

2022 年度

The

2022

Journal

大学造形美術教育研究

第21号

〈会長挨拶〉 浅野 卓司 (桜花学園大学) 「大学造形美術教育研究」の発刊に寄せて …… P.1

〈指名レポート〉 大成 哲雄 (聖徳大学) 佐藤 敦子 (目白大学) 鳥越 亜矢 (中国短期大学) 全美協造形教育フォーラム 2021 報告
「創造、探求、問い直し、そのきっかけは画材」 …… P.2

【研究ノート・実践報告】

小野 修平 (湘北短期大学) 小学生を対象にしたイメージの重なりを楽しむ版画教材の研究 …… P.14

木下 藍 (常葉大学短期大学部) 保育者養成校における自然体験を基にした表現活動 ― 保育園と養成校の緩やかなつながり② ―
…… P.18

酒井 誠 (山村学園短期大学) 造形表現における応用力や配慮を養う取り組みについて―考察― …… P.22

図画工作における発想の柔軟性を養う試み …… P.26

櫻井 剛 (新島学園短期大学) 身近にあるいろいろな材料・用具の活用 …… P.30

福岡 龍太 (新潟青陵大学短期大学部) サドセンが桃源にあることを… ―「不知身在桃源」― …… P.34

三澤 一実 (武蔵野美術大学) 「ハリガネ芯ちゃん」を用いた ICT 活用の題材開発 …… P.38

宮城 正作 (長野県立大学) 「しつもんすごろく」を用いた活動の可能性 …… p.42

森高 光広 (植草学園大学) 教育現場でのスタンプング技法の活用 …… p.44

森高研究室活動実践～幼・保専攻学生の学外活動の学び― …… p.50

山本 将之 (大阪大谷大学) 学生が主体となる造形遊びの実践授業―アクティブ・ラーニングによる保育構想とこども園での学びを経
て― …… p.56

渡辺 一洋 (育英大学) ダンボールを用いた大型お面の製作 ― 親子アトリエの空間から生まれる形と造形表現 ― …… p.60

日本の四季を表現する和紙を用いた製作 ― 総合表現における絵画と立体の視覚的効果 ― …… p.62

渡部 晃子 (帝京科学大学) 創造性研究の系譜と芸術教育 …… p.64

【産学連携レポート】

藤田 晴香 (東亜合成 (株) アロンアルファ事業部コンシューマ部) 子ども向けアロンアルファ サンプルワーク ― 子どもの想いを形
にするアロンアルファの開発 ― …… p.68

【産学連携レポート】

鳥越 亜矢 (中国短期大学) 描くことで顕在化する環境と状況の作用とメーカーも知らなかったキットパスの意外な活用 …… p.72

【全国大学造形美術教育教員養成協議会規約】 …… p.79

【全国大学造形美術教育教員養成協議会 賛助会員内規】 …… p.80

Vol. 21

「大学造形美術教育研究」第21号の刊行に寄せて

全国大学造形美術教育教員養成協議会

会長 桜花学園大学 浅野卓司

ここに第21号となる全美協（全国大学造形美術教育教員養成協議会）の研究誌をお届けします。全美協は、大学・短期大学で造形・美術を教授する教員及び造形に関わる企業（賛助会員）によって構成される組織です。この研究誌は加盟大学・加盟資格大学及び賛助会員に配布いたします。

研究誌は、本協議会の会則2条（目的）に示す「本協議会は、全国の大学及び短期大学における造形美術教育に関わる保育士及び教員養成の充実をはかり、造形教育の振興に寄与する。」ことの具体的な取組みとして20年以上の実績があるものです。第1号から第20号までの研究誌は、国立国会図書館にも納本されています。国立教育政策研究所より、本誌の実践について問い合わせがあったものもあります。この研究誌の特筆すべき点は、多くの学会誌にみられる研究論文という位置づけでは無く、造形活動の探究的な実践報告が多いところです。ワークショップや大学での日常的な授業など、多様な取組みにあふれています。

新型コロナウイルスの国内感染拡大から3年が経とうとしており、造形実践は多くの影響を受けています。乳幼児の遊び環境は変化しています。また小学校以上においては学習者本意の学びや主体性が課題となる中で、「個別最適な学び」や「協働的な学び」は教育・保育の現場でどのくらい保障されてきたのでしょうか。

造形・美術の実践は、見たり、感じる活動やえがいたり、つくったりする活動を通して、自分自身の表現の在り方や他者との関わりにおいて、形や色という造形的な視点から共感性や生み出される価値観を大切にしています。そして、造形的な体験を通して感じる様々な思いは、自身の人生観を深めていくこととなり、この営みは乳幼児の遊び活動の中から始まっていきます。

本研究誌には、コロナ禍においても造形・美術の活動を通して感じる内面の変化が、様々な角度から考察されています。研究誌の中の様々な実践や造形活動に触れることが、こういうアプローチがあるのかという、しなやかな捉え方に繋がったり、実践の深化やコミュニティーの広がりとなっていくことの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本研究誌の発刊にあたり、執筆いただいた皆様と編集作業を引き受けていただきました三澤一実先生はじめ、多くの方々にお力添えをいただきました。厚く御礼申し上げます。

全美協造形教育フォーラム 2021 報告

聖徳大学 大成哲雄、日白大学 佐藤牧子、中国短期大学 鳥越亜矢



2022年2月19日（土）13:30～16:30

開催方法：ハイブリット型
(Zoom+対面ワークショップ中継)

会場1:聖徳大学
会場2:中国学園大学・中国短期大学
附属たねのくにこども園

13:30 開会・キットパスの紹介
13:45 実行委員による事例発表
14:55 教材研究型ワークショップ
15:45 発表・共有・ディスカッション
16:30 閉会
フリートーク（自由参加）

I 企画について

1. 企画の経緯

全国大学造形美術教育教員養成協議会（以下、全美協）は2020年より賛助会員制度を施行している。その目的は、Society5.0の社会に向かって教育が大きく変化しつつある中で、造形美術教育を推進するための新たな価値の創出である。異なる他者との意見等の交流によって造形美術教育の新たな価値が生まれると仮定し、産学連携の教材開発や新教材のテストなどを念頭においてこの制度を設けたのである。

日本理化学工業株式会社（以下理化学工業）は、2020年11月に全美協賛助会員になった。理化学工業はダストレスチョークや環境固形マーカー「キットパス」（以下、キットパス）を製造している会社である。キットパスの特徴は、鏡やホワイトボード、ガラスなどの水を通さない平滑面に描けることであ

る。そのうえ水溶性のため、窓ガラスなどに描いた場合には水で濡らした雑巾などで拭いて消すことができる。理化学工業では、こうした特徴を生かした使用事例などを蓄積し、教育・保育現場での活用が広がるような産学連携を希望して全美協の賛助会員になった。

それに対し、大成、佐藤、鳥越の3名が理化学工業との連携を申請した。3名ともキットパスの特徴を魅力的に感じており、養成大学の学生のみならず、教育・保育現場での実践で起きることに期待を持っていたため、2021年度造形美術教育フォーラムに向けて、チームキットパスとして実行委員会を発足した。

2. 実行委員会におけるテーマ・内容・方法等の検討

1) テーマの決定

Zoomを用いた実行委員会を重ねる中で、キット

パスに対する興味が三者三様であることが分かった。

大成はこれまでも様々な実践を展開しているが、キットパスを使った活動には、思ったこととは違うことが出てくるような創造の可能性を感じていた。

佐藤は幼稚園や児童館での造形活動を通じて、子どもたちが多様な画材の1つとしてキットパスを捉え、柔軟な使い方をする様子に、画材の特徴を活かす表現を探求する姿を見ていた。

鳥越は窓に描けるキットパスにらくがきのイメージを重ね、「やってはいけないこと」を起点にした実践や研修が、造形表現をはじめとした保育における様々な活動の問い直しとなる可能性を感じていた。

そして、それぞれの事例や研究を会員、保育現場、企業に還元できる機会として、2021年度の造形美術教育フォーラムを位置づけ、環境固形マーカー「キットパス」をきっかけに、参加者が新たな創造、探求、問い直しの時間をもつことを目的としたフォーラムを実施することにし、以下のテーマ決定に至った。

「創造、探求、問い直し、そのきっかけは^{キットパス}画材！」

2) フォーラムの内容と参加の在り方

「キットパス」を「画材」の当て字にすることにより、テーマを声に出すとキットパスが前面に出る印象になる。ところが、テーマを黙読するとキットパスが数多の画材の1つという印象になる。そこで、実行委員の3名は画材がきっかけで起きる創造や探求、問い直しに焦点を当てた実践や研究を行い、フォーラムで事例として発表することにした。

また、私たちは画材としてのキットパスの魅力を多くの教育・保育現場の方に知ってもらえるようなワークショップも実施したいと考えた。そこで、聖徳大学を卒業した保育者のリカレント教育という位置付けでワークショップを行うことにし、現場保育者が参加しやすいようにした。その後、岡山県にある中国学園大学・中国短期大学附属たねのくにこども園(以下、たねのくにこども園)が園内研修としてワークショップに参加することになった。そのため、千葉県の聖徳大学をメイン会場に、岡山県のたねのくにこども園をサブ会場にして、2020年度のフォーラム¹⁾同様に、全国の任意の場所から参加する方々と2会場をZoomで繋い

でフォーラムを実施することにした。

なお、事例発表とワークショップの両方に参加する枠と、事例発表だけに参加する枠を設け、参加方法を選択できるようにした。前者は先着20名とし、後者は人数制限なしとした。そして、前者には事前にキットパスを送付することにした。

3) ワークショップ

テーマや実施方法、現場保育者の参加が決定したが、懸案となったのはワークショップの内容とその結果の共有方法であった。

共有方法については佐藤が提案したpadletというオンライン掲示板アプリケーションを使用することにした。ワークショップでやったことをスマートフォンで撮影し、コメントを付けて写真をアップロードすると、リアルタイムあるいは事後も参加者間でワークショップの結果や感想を共有できるメリットがある。

ワークショップの内容については、当初共通の素材を使った技法の体験を想定していたが、実行委員会を重ね、キットパスに期待することが実行委員それぞれ異なっており、それは参加する人も同様であろうと考えるに至った。そこで、参加者が思い思いに画材としてのキットパスを研究し、その結果を共有する教材研究型のワークショップをすることに決定した。

3. フォーラム概要

- 対象：全美協会員と教育・保育関係者
- 実行委員：大成哲雄（聖徳大学）、佐藤牧子（目白大学）、鳥越亜矢（中国短期大学）
- 当日運営：山本房子（中国短期大学）、福澤惇也（中国短期大学）、能登谷小町（聖徳大学）
- 講師：理化学工業キットパス事業部 西田太士、佐藤亜紀子
- 参加人数：52名（対面参加22名、オンライン）



写真1 Zoomによる実行委員会の様子

参加 30 名) このうちワークショップ参加: 39 名

■参加者概要: 全美協会員 (48.5%) 非会員 (その他) (42.4%) 非会員 (教員養成校教員) (9.1%)

■事前アンケート回答内容

①キットパスについて知りたいこと

- ・価格、形状、色数、素材等の規格、耐久性、他のパス系画材との違い、実践例、使用のコツ、消し方、教育現場での使用の様子など。

②フォーラムに期待すること

- ・オンラインならではの研修、他大学での実践事例を知ることがきる点、プロ(キットパス事業部)の方によるワークショップ、新たな表現の可能性など。

フォーラムやワークショップを通じて上記の内容に応えられるような企画にすることを心がけた。

II 事例報告

1. 聖徳大学 大成哲雄「コロナ禍の教材研究～晴れときどきキットパス～」

1) 実践の概要

2021 年春、コロナ禍も 2 年目に入ったが、授業はまだオンライン中心であった。造形科目も例外ではなく、全身を使ったダイナミックな活動などは十分にできなかった。そういった背景もあり、キットパスを取り入れた 3 つのワークショップを考案した。いずれも今まで行ってきた実践にキットパスを組み合わせ、どのような活動に展開するかを試みた。

2) 実践報告

実践① 大学 1 年生「造形ワークショップ」

「造形ワークショップ」は、4 月から対面で行えていた数少ない授業の 1 つである。入学したての 1 年



写真2 大学生がビニールにキットパスで表現



写真3 フロワーで空気を入れて膨らます



写真4 グループで工夫し遊ぶ・鑑賞する



上 写真5, 下 写真6 保育園で描いて屋外に

生は、初めての造形の授業であることもあり、毎回熱心に楽しみながら取り組んでいた。しかし、感染対策をしての授業は例年に比べ静かでどこか盛り上がり欠けていた。そういったこともあり、6月には教室を飛び出し、屋外で「らくがきバルーン」の活動を行った。以前からビニールに空気を入れて遊ぶ活動はよく行っていた。今回は、長さ約3メートルの筒状のビニールの両端をテープで留めたものを3本用意し、そこにキットパスを使ってスクリブルを楽しんだ(写真2)。

キットパスには大きいサイズやブロック状のものが、様々な幅の線を描くことができる。一通り描き終えたら裏面にも描いた。基底材が透明なので、先に描いた線に影響され新たな線が生まれた。完成後は、大学向かいの松戸中央公園に持って行き、ブロワーでビニールに空気を入れて膨らました(写真3)。

どのように遊ぶかはグループで考えた。空中に浮かせてみたり、遠くに飛ばしてみたり、持って走ったり様々な遊びが生まれた(写真4)。

学生からは「空が青かったから描いた線がよりきれいに見えた」「インスタ映えする」「思いっきり描いて楽しかった」などの感想があった。キットパスは、ビニールに描く際は特に滑りが良く描きやすかった。スクリブルを楽しむのに適していると感じた。また、「色が他のクレヨンと違い、かわいい」と評判であった。今回の活動は、1時間の授業で、絵画に始まり、立体、遊具へと変化した。また、遊びながら鑑賞活動も行った。自由に思いっきり描くことや、天気の良い屋外での活動は、開放的で気分転換にもなり、コロナ禍で少なくなっていた交流の機会にもなった。

実践② ケヤキッズ保育園 ワークショップ

7月には、同様の活動を地域の保育園で行った。幼児は具体的なものを描いたり、行為を楽しんだりするなど思い思いに描いた。滑りが良く、描きやすく、多少手荒に扱っても折れなかった(写真5)。最後は徒歩で江戸川河川敷に向かい、ビニールに空気を入れて遊んだ。自分たちが描いたものが

遊びにつながることで作品に愛着を持っていた。(写真6)。

実践③ 大成ゼミ「グローバルピクニック2」

3、4年次のゼミの活動は、10月に松戸中央公園で「アートパーク14」を実施し、11月には21世紀の森と広場で「松戸アートピクニック2021」に参加した。筆者のゼミは子どもたちとフラッグを作り、走る電車に向かって振るワークショップを行った(写真7)。布の切れ端を張り合わせ、公園で採った竹に結ぶフラッグ作りでは、2週間の会期後半にはキットパスも用意した。布の形や柄に影響されて描いたり、自らの姿を描き加えたりする子どもがいた。キットパスは布にも描きやすく、相性が良いと感じた。子どもたちにカメラを向けると作品を振って見せてくれ、表情からも満足している様子が伺えた(写真8)。

3) 実践を終えて

今回、3つの実践を終えて気づいたことは、キットパスを用いたことで「絵画表現」の枠を広げられたことである。ビニールに描いた絵画は空気を入れると、立体作品となり、公園に持っていくと遊具になった。また、コラーージュした布に絵を描いて棒をつけるとフラッグになり、小さい子どもでも振って楽しむことができた。どの活動も屋外に持って行くことで身体と関わる遊びへと発展した。「絵画とは紙やキャンバスに描くものだ」といった固定概念があるのだとしたら、キットパスはそれを解放し、広げてくれる可能性



写真7 目の前を走る電車にフラッグを振る



写真8 子どもたちが作ったフラッグ

のある描画材であると感じた。

一連の活動を経験した4年生が模擬保育でキットパスを使った題材を考えた。新しい画材の魅力を友人に伝えなかったそうである。今回は掘り下げる機会はなかったが、キットパスは水で溶け、水彩絵の具のようにも使える。次回はクレヨンと水彩を同時に楽しめる表現を試してみたいと思っている。

2. 目白大学 佐藤牧子「キットパスで教材研究～子どもたちと教員の探求～」

1) 実践の概要

キットパスの使用実績がない東京都内のこども園に通う幼児と児童館を利用する児童を対象に、2021年7月～2022年2月にかけて、複数回観察を行った。キットパスは、造形素材とともに画材として提示し、その都度特徴を伝えて提供するようにした。キットパスによる作品作りは目的とせず、子どもの要望があれば手伝ったりアドバイスをしたりするが、基本的には子どもが主体的に行う活動を見守る形で観察した。実践報告は、2つの報告の視点に分類して行う。

2) 実践報告

■報告の視点(1)

キットパスとの組み合わせにより生まれる教材と、その魅力

事例①キットパス×アクリルパーテーション

子どもの表現活動や遊びにおける造形素材の選定においては、子ども自身で持ち運びが可能であるなど、扱いやすいものを選定するよう配慮している。活動の結果、5歳児は表裏双方向からアプローチできるパーテーションの特性を利用して、「描く→のぞく→描く」を繰り返し楽しむ姿が見られた(写真9)。アクリルパーテーションは、遊びの展開に応じて描かれたものが消されて新たなものが描かれたり、場所を変えたりして、基底材としての役割を果たしたり、文字通りパーテーションの役割を果たしたりしながら、幼児の遊びの中に取り込まれていた。

事例②キットパス×アクリルフォトフレーム

アクリルフォトフレームは、個別の活動に向いているサイズであること、自立すること、紙を挟むことが可能である点に魅力を感じて基底材として選定した。活動の結果、小学3年生はアクリルフォトフレーム上で指を使いながら混色したりグラデーションを作ったり、その上にホットボンドで模様をつけ



写真9 パーテーション越しに楽しむ5歳児



写真11 箱の内と外からのアプローチを楽しむ幼児

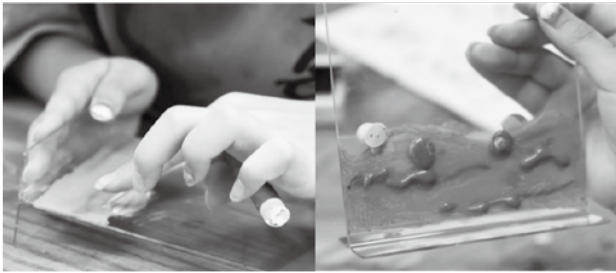


写真10 個人の表現を追求する3年生

たり(写真10)、フレームの間に色紙を挟んだりしていた。アクリルフォトフレーム上にキットパスで描いたものは容易に消すことができるため、何度も消しては描くことを繰り返すなど、自分の表現を追求する姿が見られた。アクリルフォトフレームの耐熱性も、表現の幅を広げることに繋がったと言える。

事例③キットパス×蓋付アクリル抽選箱

蓋付アクリル抽選箱は、幼児の扱いやすさを考慮して300mmの立方体にした。蓋付きにすることで、表裏12面を確保できる点と物が入られる点に魅力を感じて基底材として選定した。3～5歳児の混合で活動した結果、常に複数人がアクリル抽選箱に関わる形になった。それぞれの面からキットパスで描いていたかと思えば、箱の内側から食パンのスポンジ人形を箱の外から描いた絵に合わせる遊びが始まり(写真11)、内側の人形に合わせて外から絵を描くなど、幼児同士がコミュニケーションを取りながら、箱の内と外からのアプローチを楽しむ姿がみられた。

事例④キットパス×ビニール傘

ビニール傘は、傘の構造の面白さと異素材が混合している点に魅力を感じて基底材として選定した。活動の結果、5歳児が「ここはプラスチックだよ」「これは鉄だよ」と、知っている素材名を口にしながら、素材によって塗り心地が異なることも感じながら塗り進めていた(写真12)。傘部分では、中骨の仕切りを場面の区切りと見立てて2人で絵を描き進め、最終的には傘の下に入り、傘をゆっくり回して描い



写真12 傘の映画館を楽しむ5歳児

た絵を2人で眺めて話をしながら、「映画館ができた!」と喜ぶ姿が見られた。傘に描いたキットパスを定着させるための仕上げは、子どもたち自身にベビーパウダーで行ってもらった。

■報告の視点(2)

画材(キットパス)が、子どもの探求心を誘発する

事例⑤素材の違いを探求する

キットパスは、ツルツルした面に描くと消すことができるという特徴を知ると、感触の違いに注目しながら手当たりしだいモノの表面を触り、「これはつるつるだから消える」「これはつるつるじゃないから消えない」と独り言を言いながら予想を立て、予想結果を確かめるように色々な素材にキットパスで描いては消すことを繰り返す5歳児の姿があった。キットパスという画材の特性が、モノの質感、素材の違いを探求するきっかけになったと言える。

事例⑥画材の違いを探求する

キットパスで絵の具の表現を楽しんでいるうちに、色鉛筆でも同じことができるのではないかと思いついた3年生が、他の画材(色鉛筆)でも同じ表現ができるかどうかを試し始めた(写真13)。「キット



写真13 画材の探究から表現を追求する3年生

パス[色鉛筆]と2つの画材を行き来する中で、キットパスは水筆で直接擦れば色が抽出できるが、色鉛筆では難しかったことから、色鉛筆の芯を砕いてその砕いた粉を水筆で溶くことで水彩表現を実現した。キットパスの画材の特徴に誘発されて、他の画材にも興味を示して始まった探求が、表現の幅を広げることにつながったと言えるだろう。

3) まとめ

本報告では、子どもたちがキットパスの特徴を遊びの展開に合わせて上手く活用していく姿や、キットパスを通して行われた実験的な探求の姿を報告の中心とした。事例を通して印象深かったこと3点を中心に考察を加えて報告のまとめとしたい。

1つ目は、キットパスの消せるという特徴を堪能する子どもの姿である。子どもの造形・表現活動においては、納得がいくまで繰り返し試行錯誤ができる環境が必要である。作品を一発勝負で作らせるような活動に陥らないように気をつけたい、と改めて考えさせられた。

2つ目は、キットパスによって子どもの探求心が誘発される姿である。探求によって自分なりの表現にたどりつくのだとしたら、探求的な画材研究というのは子どもにとっても面白く、そして重要なことなのだと感じられた。

3つ目は、ベビーパウダーでクレヨンを定着させる行為に興味をもち、最後の仕上げを丁寧に行う幼児の姿である。もしクレヨンコートなどを使っていたら、幼児にこの仕上げを任せることはなかった。実は学校などの集団生活の中では、子どもたちは最後の仕上げなどの醍醐味を大人に奪われているのかもしれない。最後の仕上げまで子どもが扱

れるものを使用することは、子どもの造形・表現活動にとって重要なことだと考えさせられた。

最後に、キットパスの活用を通して、子どもたちが画材の特徴を知ること、遊びや表現の幅を広げていく姿を確認することができた。知識の詰め込みよりも、体験が子どもの造形・表現活動に重要なのだとしたら、圧倒的な体験の充実が、時間と質とともに保障されている必要がある、と改めて考えさせられるいい機会となった。

3. 中国短期大学 鳥越亜矢・山本房子「キットパス体験の読み解きと問い直し」

1) 発表の概要

鳥越は2021年6月より、教室や廊下の窓ガラスなどへのらくがき体験と、各種パス類の比較を授業実践している。そのことをたねのくにこども園の園長に紹介したところ、大変興味を持たれた。園での保育実践の前に保育教諭が画材を体験する必要があるため、2022年1月5日6日に上述の授業実践に基づいた園内研修を実施した。

フォーラムにおいては、上述の授業実践や、キットパスを用いた保育者研修、たねのくにこども園での保育実践を通じて分かったことを事例報告した。

2) キットパス体験とその読み書き

学生はパス類の比較(写真14)を行った後、教室や廊下の窓ガラスなどにキットパスやサクラクレパスの「水で落とせるしにくいクレヨン」でらくがき体験をしている。体験後の調査では、75%の学生が使ってみてキットパスが1番良いと回答した。その理由には、塗りカ

パスの比較		
画材名	線描き (らくがき)	面塗り (2色)
サクラ クレヨン		
クレパス (オタク) (ダブッ) いびき		
べんてる パステル ミニ		
日本理化学工業 (株) 環境園形 マーカー キットパス		
サクラ 水で落とせる しにくい クレヨン		

スが出ない点や、滑らかな描き心地、消しやすさなどのほかに、描いて消すことができるという特性が、“描画は紙に”という概念を覆し、描く行為を

写真14 授業で行ったパス類の比較



写真 15 鏡に描いて表現と鑑賞を楽しむ学生

紙以外の素材や環境に広げることが挙げている。

また、学生はキットパスを使った環境への直接的な描画体験を通じて、描くことが探索的な行動を促す非日常的な表現活動となることを実感し、環境や基底材を生かした描画活動や鑑賞の面白さを味わっていた。特に、トイレの鏡に描いた学生は、自分が映り込むことで描いた絵の中に入り込む面白さに夢中になり、立ち位置やポーズを調整していた。授業者としては、トイレにまで行くことを想定していなかったが、描くと面白そうな場所を求めて学生が探索したことがうかがえる(写真 15)。

また、学生の感想には「本当にきれいに消えて驚いた」「消せるから何度でも楽しめる」「消せるから失敗しても安心」という趣旨のものが複数あった。このことから、普通なら消えないパスのような画材が消せることに対する驚きのほかに、キットパスのこの特徴が、何度でも描画できる喜びや、描画活動が苦手な者にとって安心感に結び付くことが分かった。

また、授業実践を通じ、キットパスで描く行為を幼児期の終わりまでに育ててほしい 10 の姿(以下、10 の姿)と、小川純生(2003)による遊びの面白さを捉える「5C」の力²⁾で読み解いた結果を以下に示す。

キットパスで描く行為には 10 の姿のうち、特に

③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑥思考力の芽生え、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現に関連する様子が認められる。

キットパスで描く行為では「C」で始まる 5 つの力発揮されている。それぞれに見ると、以下のとおりである。五感による Catch: 見る・描き心地を感じる・音や話を聞くなど。Control: 心・体・画材(キットパス)の操作。Communicate: 表情・仕草・視線・会話などによる意思の疎通。知的理解や気づきとなる Comprehend: 他のパスとの違いに気づく。何にまたはどこに描くかによって、紙に描くのと異なる絵になることや、見る位置で見え方が変わることに気づくなど。意思決定や破壊も含めた創造の力としての Create: Comprehend の力を発揮して気づいたことからやりたいことや描きたいものが決まる。消えるから何度でも描いてみる。

3) キットパス体験を通じた問い直し

2021 年 12 月には岡山県総合教育センター主催の保育者研修を、2022 年 1 月にはたねのくにこども園の園内研修を実施した。いずれも各種パス類の比較体験後に、各自が持ち寄ったキットパスで描いてみたい基底材に対して、思い思いの描画体験を行った。そこでは保育者がキットパスの画材としての魅力を知る一方で、描くことに対する問い直しの様子が見られた。ガラスやペットボトルのほか、どんぐりやポリ袋など、今まで油性マーカーを使っていた素材や爪などに描く体験は、学生同様に“パスには紙”としか考えていなかった保育者にとって、驚きの連続であった。1 つの画材で描ける基底材が多数あることは、描画活動の環境構成に手間をかけずに気軽に取り組める良さがある。そのうえ、よ



写真 16 描くように描画部分を「消す」様子



写真 17 表現の可能性を秘めた園環境の問い直し



写真 18 画材と表現の出会いとなる3歳未満児の保育環境

り多様な描画活動の創出が期待できる。

また、水に浸した綿棒や筆を使えば、キットパスで塗ったところを部分的に消したり、色を抜いたりできる。「消す行為」が「描く行為」になるのは、保育者にとって描くことに対する問い直しの体験であった(写真 16)。

園内研修では、保育者が持参した素材のほか、園環境に描画した。研修後に行った振り返りシートの記入内容からは、描画活動に苦手意識を持つ保育者が多いことが分かった。しかし、フォーラム実施までの間にも子どもたちとともに探索的にキットパスを使った活動を行い、表現の可能性を秘めた独自の園環境に気づいたことや(写真 17)、描画活動がおぼつかない子どもたちも画材や表現に出会ってかわられる環境の創出に、保育者自身が楽しみながら努めたこと(写真 18)をフォーラムで報告した。

Ⅲ ワークショップ

ワークショップは、全国の任意の場所からオンラインで参加する方々と2会場(聖徳大学、たねのくにこども園)をライブ中継で繋ぐ形で実施された。

前半の45分間は、参加者がそれぞれの場所で実際にキットパスを使用して、さまざまな素材に描くことを通して描き心地を味わったり、素材との相性や表現の可能性を探ったりする時間となった。

会場には、ペットボトルやプラスチック製の写真フレーム、ビニール傘やレインコート、鏡、緩衝材、木製の鱒寿司の蓋や画用紙などの基底材から、LEDライトなどの素材(写真 19)が準備された。

聖徳大学の会場では、参加者が屋台の中で活動を行なったり(写真 20)、戸棚のガラス扉をテーブルにして活動を行なったり(写真 21)するなど、会場に身を置くだけでワクワクするような仕掛けがなされ、参加者は各自好きなスペースで活動を行った。

戸棚のガラス扉をテーブルにして活動を行なった参加者(現役の小学校教諭)は、素材とテーブルにキットパスで交互に描いては絵を重ね合わせたりするなど、基底材自体を拡張させていた(写真 21)。その延長線で、木製の椅子にキットパスで描いても消すことができるのかという疑問が湧いた。会場にいた理化学工業キットパス事業部の西田氏からは、木製の椅子のようにキットパスの塗料が浸透するような素材に描いたものを消すことは難しいとの回答があった。それらのやりとりも、オンラインを通して別の会場にいる参加者にも共有された。手を動かして実際に活動することで生まれる疑問を大切にすることこそが、まさに教材研究の基本であると実感する瞬間でもあった。

たねのくにこども園の会場では、子どもたちが生活をし、まさに日々の保育が行われている園の施設が会場となった。参加者した保育者は、それぞれの場所で活動を展開した。金魚が泳ぐ水槽に絵を描いていた保育者からは、描いていると金魚が寄ってくるという現象が起きたことが報告された(写真 22)。子どもたちが興奮して喜ぶ顔が目につくような現象も、実際に試すことで出会えたと言えるだろう。



写真 19 聖徳大学の会場に用意された素材



写真 20 屋台の中で活動をする参加者



写真 21 戸棚のガラス扉をテーブルにするかして絵本の場面を表現した保育者

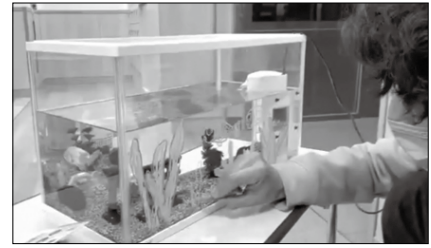


写真 22 金魚の泳ぐ水槽に描く



写真 23 窓ガラスで行う塗り絵



写真 24 ガラス窓の開閉による重なりを活かして絵本の場面を表現した保育者



写真 26 メガネのレンズとカップに描く

園の階段の途中にある窓ガラスに蝶々を描いていた参加者からは、ガラスの裏面に蝶々の絵を貼ることで、塗り絵のような面白さを味わえることが報告された(写真 23)。インタビューを行った福澤からは、何を描いたらよいか困っている子に対しても、いい手立てになるのではないかとという提案がなされた。

ガラス窓に2人で描いていた参加者からは、窓をスライドすることで描いたものが合体し、1匹の黒い小魚が赤い小魚の集団の目となる絵本の場面を表す仕掛けが報告された(写真 24)。

休憩を挟み残りの40分間は、ワークショップに参加した参加者から、活動を発表してもらったり、参加者が padlet に投稿したものを大成が紹介したりするなど、ワークショップの活動を発表・共有・ディスカッションする時間とした。

自宅から4歳児の息子さんと参加していた現役の保育者からは、プラレールの「のぞみ号」を黄色に塗ることで、購入できていない「ドクターイエロー」に作り替えたことが報告された。北海道から参加の大学教員からは、出前保育でラッピングフィルムにキットパスで描いた実践が紹介され、キットパスの発色の良さが子どもたちの塗る行為に繋がったことや、ラッピングフィルムを個々に配布して個別に描いたものを最終的に窓ガラスに貼ることで、個別に描いたものから協働性が生まれる機会になったことなどが、ラッピングフィルムとキットパスの相性の良さとともに報告された。また、自宅から娘さんと参加した大学教員からは、鏡に事前にアクリル絵の具(白)で人物のシルエットを描いて乾燥させたものを

基底材とした活動が、padlet を通して動画で共有された。実際に濡れたスポンジで拭き取っても、キットパスで描いた洋服部分だけが消えて、アクリル絵の具で描いた人物のシルエット部分は綺麗に残る様子が、「やー!裸になっちゃう!」という娘さんの楽しそうな声と共に共有された(写真 25)。

また研究室から参加した東京の大学教員は、モニターを見過ぎて目が赤くなったということで、メガネのレンズにキットパスで赤目を描いた状態で登場し、その場が笑いに包まれるなど、楽しく有意義な情報共有の場となった(写真 26)。



写真 25 padlet に投稿された動画

IV 参加者アンケート

参加者からの事後アンケートを内容ごとに分類して、本フォーラムを振り返ることとする。

■本フォーラムに参加した感想（一部原文に補足）

- ・いろいろな素材に試したいと思う意欲（が生まれた）
- ・様々な角度からキットパスを捉えられたので、教材研究を続けて保育・教育につなげたい。
- ・大人になって初めて大きな窓に描いたので、ワクワクした。何度でもやり直せるので、初めてでも臆することなくかけて良かった。消せるよさが分かった。
- ・子どもの主体性を刺激する材料や用具との出会いは大切にしたいと感じます。保育者・教師が、まず面白そうと感じないと探究的な保育・教育にはならないと思いました。
- ・具体的な実践報告やワークショップから、様々なヒントや学びがあり、新たな「感性と表現」を学びました。
- ・教材を通して、探求が深まり創造性が引き出されている場面を目にすることができました。また、教材研究の問い直しについて限定するならば、いろいろな先生方からの報告が参考になりました。「キットパスだからできること」「キットパスでもできること」「キットパスだとできないこと」をもう一度整理してみたいと思いました。
- ・1つの素材を通して様々な人が創作活動を行うことにより、アイデアや活動の広がりを感じた。みなさんの「こうしてみてもどうだろう？」の過程を共有できたことが、自身の探求・問い直しのヒントになったと思う。
- ・事例研究を通して、園でも子ども達にやってみようと思うものがありました。意見交換や事例発表は参考になって良かったです。

実行委員3名による実践発表とワークショップ会場からの中継とその後の全体共有により、参加者それぞれに教材研究に関する気づきやヒントが生まれたことがわかる。さらに、参加者の気づきには、保育者・教員の姿勢に関する事柄も含まれていたことも興味深い。

■参加者の構成について

- ・[保育者の実践] スイミーをガラス扉に描いて、重ねると目が入る発想には驚きました。他の教科と絡めた作品作り、素晴らしかったです。鏡に描いて自分の顔を嵌める作品は中学美術などでも導入できそうだなと思いました。

教員を対象とした研修は、参加者の所属する学校種ごとに行われることが基本であるが、本フォーラムは、キットパスという画材をテーマの中心に据えたため、さまざまな学校種の教員から子どもまでが参加できるフォーラムとなった。その結果、保育者の実践が、中学校美術を担当する教員にも参考になったことがわかる。学校種ごとに閉じられた研修は、一見するとターゲットが絞られた実践的な研修にも思えるが、教授型の研修に陥る危険性がある。研修の場が、参加者の想像力を生かして新たなことを創造する機会となるためには、子どもを含む多様な参加者で構成することが有効であると言える。

■企業との協働について（一部原文に補足）

- ・画材の探究は種類を問わず面白いものです。今回のキットパスについては、その製造元である会社についての背景(障害者雇用についてなど)をもっと取り上げ、活動に組み込んでいてもいいのではないかと思います。教科横断的な学びにつながる(のではないかと)
- ・研究発表から実際に現場の方が使用している中継まで見られて、つくる楽しさやわくわく感も共有される良い会だったと思います。研究者と企業がうまく協力できれば、現場の環境をよりよく変化させていく大きなきっかけになるのではないかと感じました。

学校種の違いだけでなく、学校とは異なる立場から学校教育に関わる企業が参画することによって、新たな刺激が加わり、学校教育に変革をもたらすきっかけになる可能性が見えてくる。

■情報共有の方法について

- ・現場・企業・教員による重層的なフォーラムで、大変実践的な内容に満足しています。やってみたい内容も多かったので、早速、授業に取り入れ学生に還元していきたいです。写真や動画も多目で、とてもわかりやすかったです。

・padlet と併用した研究会、可能性が広がります。ハイブリット形式で開催された本フォーラムでは、参加者の活動を共有することも、大切にしたことの一つである。

padlet の活用により、フォーラム内でのリアルタイムな共有に加えて、終了後に企画者が振り返りを行ったり参加者が改めてヒントを得たりすることができる記録ができた。投稿された活動・作品は、現在も padlet で見ることができる。

* 2024 年3月公開終了予定



<https://padlet.com/maksato/2r248g26iroa0218>

■参加場所と形態について

・コロナ前の通常のフォーラムだと、1か所に人が集まり、情報を持ち寄る印象があった。今回のフォーラムでは、リアルタイムに、様々な環境を目にすることができ、それぞれの認識を環境とともに知ることができ、リアリティのある発表になっていた。今後も必要な情報共有の場だと感じました。

コロナ禍をきっかけに、オンライン型やハイブリット型のフォーラムや研修が開催されるようになり、1つの会場に集合せずとも同じテーマと時間を共有することに利便性を感じていたが、「それぞれの認識を環境とともに知ること」の重要性を改めて確認するきっかけになった。

■その他、全美協に対するご意見等がございましたら教えてください

・現場の先生が参加されている造形美術教育フォーラムは、現場の先生が研修として使える可能性があります。これはどの学会でもやっていないことですね。

前述の「企業との協働について」でも触れたが、研修テーマを工夫することによって、多様な参加者が集うことが可能であることがわかった。特に造形美術で扱う内容は、教育・保育の枠を超えて共有できる内容であると考えます。

今後も全美協のフォーラムがそうした多様な人々が集う場であり続けることにより、領域や教科・科目を越えて、教育を連続的に捉えることに寄与でき

るのではないだろうか。

謝辞

フォーラム開催にあたり、キットパスや資料をご提供いただきました日本理化学工業株式会社、並びに同社キットパス事業部の西田太士様、佐藤亜紀子様に御礼申し上げます。また、中国学園大学・中国短期大学附属たねのくにこども園におかれましては、園を挙げてのご協力に感謝申し上げます。

なお、この度のフォーラムレポート執筆は3名それぞれにとりましても大事な振り返りになりました。このような機会を頂いたことにつきましても、紙面を借りてお礼申し上げます。

註

1) 三澤一実(2022)「全美協造形教育フォーラム 2020 報告「プログラミングを使った造形から始める STEAM 教育」」、『大学造形美術教育研究』(第 20 号), 全国大学造形美術教育教員養成協議会, pp.2-11

2) 小川純生(2003)「遊びは人間活動のプラモデル?」、『経営論集』(第 58 号), pp.25-49

<http://id.nii.ac.jp/1060/00004943/>

鳥越は小川の「5C」の力を授業や保育の視点として活用している。詳細は以下を参照のこと。

鳥越亜矢・服部由美子(2018)「園内研修の研究—5C の力とパースのカテゴリー論を保育の視点として—」、『大学造形美術教育研究』(第 16 号), 全国大学造形美術教育教員養成協議会, 2018, pp.26-31

附記1

佐藤牧子の事例報告及びワークショップの報告内容の一部については、全美協メールマガジン第 54 号 全国大学造形美術教育教員養成協議会ホームページで紹介した内容(佐藤牧子,「オンライン研修におけるアプリケーションの活用について」)に基づいている。

附記2

鳥越亜矢・山本房子の事例報告の内容については、令和 3 年度両備櫻園記念財団研究助成(研究課題:「してはいけない」から始まる創造的な表現活動を通して子どもと大人に起きる学び—環境固形マーカー「キットパス」を用いた 10 の姿につながる教材研究と保育観の醸成—)によるものである。

小学生を対象にしたイメージの重なりを楽しむ版画教材の研究

湘北短期大学 小野修平

1 はじめに

本稿は、写し取る行為の楽しさや、イメージを重ねることで広がる表現の魅力を味わうことに着目した、版画教材の研究と考察を記すものである。

筆者は以前、パウル・クレーの油彩転写素描をもとにした版画教材の研究を行い、『幼児の造形活動における版画制作のための教材研究とその実践』において、幼児でも実践可能な新しいモノタイプとして、水性版画絵具による転写技法を提案した。¹この研究では、版にインクが乗ることや、版に乗せた紙に圧力を加えることで、インクが写し取られるという、版表現ならではの仕組みを、幼児なりに理解することができる点に着目した。結果として、版によって複数の色彩を構成することの楽しさや、版画ならではの表現効果を味わう点において、有用な教材になったと考える。今回、この教材の発展として、マスクングとモノタイプを組み合わせる表現に着目した。本論では、この版表現を、写し取る行為の楽しさを味わう事に加え、2つのイメージを重ねることで新たな表現の魅力に気付くことができる、小学生向けの教材として提案したい。

2 小学校学習指導要領解説・図画工作編における版画の位置づけ

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』第4章の2内容の取扱いと指導上の配慮事項(7)において、「各学年の「A表現」の(1)のイ及び(2)のイについては、児童や学校の実態に応じて、児童が工夫して楽しめる程度の版に表す経験や焼成する経験ができるようにすること。」とあり、図画工作の学びの中で版による表現を取り入れることが求められている。²さらにこの解説では、以下のように記されている。

児童が工夫して楽しめる程度とは、児童の発達や実態を考慮した上で、児童一人一人が自分の関心のある表

し方で表現を楽しむ工夫できる程度の内容を選択することを示している。版に表すとは、同じものを何枚も写し取ることができる、反転して写る、版ならではの表現効果があるなどの特徴をもった造形活動のことである。例えば、身近なものを版に利用して型を押ししたり、凹凸のあるものを選んでこすり出したり、紙版や簡単な木版で表したりすることなどが考えられる。型紙を切り取ってその内側や切り取ったものの外側をスポンジやローラーのような用具で着色するなど版に表す経験の一つと考えることができる。³

版画と聞くと、版木を用意して、彫刻刀を扱い、陰刻・陽刻を指導して、紙をよごさないように等、準備の大変さや技術面のハードルを考える人が多いように感じている。もちろん、それらが大切な要素の一つであることは確かだが、指導者や子どもたちのモチベーションを下げてしまっては元も子もない。ポイントはこの解説にもある通り、表現を楽しみ、工夫して取り組むことであって、「版画ならではの表現効果」をいかに発見し、楽しむことが出来るかだろう。スタンプひとつを見ても、何度も押す中でインク（絵の具）が沢山ついてべったりとした力強い跡も、うすくかすれた優しい跡も、それぞれが版画ならではの表現効果である。子どもは、制作の中でこれらが自身の力に自然の理が加わった結果であることに気づき始める。そして、版を使った複数性を理解しながらも、同じような画面をつくることはなかなか困難であることから、紙をめくる、あるいは版材を外す瞬間の一期一会の出会いに期待が膨らむようになる。こうした取り組みを通して、自分のイメージした表現をもとめて、絵の具の種類や量、力の入れ具合等を考え、コントロールするように思考がふくらんでいく。版画制作を通したこうした一連の流れは技能だけでなく、手で描いたり作ったりする表現とは全く異なる発想や構想する力を伸ばし、思考力・判断力・表現力を育むことに繋がることも押さえ

ておきたい。

3 パウル・クレーの油彩転写素描から

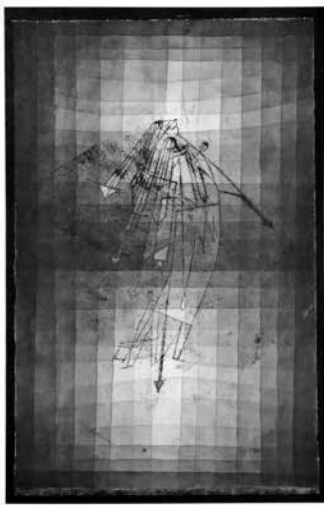


図1
《蛾の踊り》⁴
パウル・クレー (Paul KLEE)
1923年
オイル・トランスファー・ド
ローイング・鉛筆・水彩、
紙 / 台紙:水彩・ペン、グアッ
シュ、マウント・カード
51.5 × 32.5
所蔵: 愛知県美術館

今回の取り組みで、マスキングとモノタイプを組み合わせる手法を思い立った背景としては、図1のクレー作品が起点にある。もともとは油彩転写素描の参考作品を調査している最中に会った作品だが、水彩による格子状のリズミカルな表現と、油彩転写素描の叙情的な線表現は、その色や形から、一見お互いに異なる要素のレイヤーの重なりのようにでいて、見事にそれぞれの表現を引き立て合っているところに惹きこまれた。愛知県美術館HPの作品解説においては、以下のように記されている。

線描は軽やかな感覚と静止感を与え、線描の周囲の表現はぶれを感じさせ、空気の揺れや時間のずれを感じさせている。蛾の上昇感とバランスをとるかのようには線は下向きの矢印へと変化し、たわんだ格子の表現でリズムに変化を与えている。こうしてクレーは、一見詩情的に見える一枚の絵に、運動と静止に関わる抽象的な思考を共存させている。⁵

このように、技法においても思考においても、2つの要素をひとつの画面に効果的に共存させた表現は、クレー独自のものといえよう。クレー作品の魅力の一つである幾何学的な形の表現と、有機的な油彩転写素描の線の組み合わせは、作品の構成として大変魅力的である。手法として、水彩と転写のどちらを先に施したかは不明だが、それぞれに異なる工程が必要な点は、いわゆるレイヤーごとに摺りを分割していく版表現に近いものを感じた。子どもたちの造形活動になぞらえると、一見関連の無い色や形がレイヤー的に重なることで、お互いのイメージに異なる見方が生まれ

たり、表現を展開させたりする楽しさにも、気づききっかけになるのではないだろうか。

4 マスキングとモノタイプを組み合わせた版表現

前項クレーの作品を参考に、一つ目のイメージを、淡いトーン表現が可能なコンテパステルを使ったマスキングで表し、その上からモノタイプを組み合わせることで、イメージを重ねる楽しさを味わいつつ、互いを引き立て合う表現が可能なのではないかと考えた。今回、筆者が考案したマスキングとモノタイプを組み合わせた版表現の手順を表1に記す。尚、モノタイプの部分については、前項で紹介した自身の先行研究においても作例と手法を紹介しているが、今回は版に使う素材がベニヤ板である点や、マスキングを組み合わせる点も踏まえて、改めて全ての手順を明示している。

5 教材の実践と作品の解説

今回の研究では、小学校2年生～6年生の児童40名を対象に実際の制作を行った。協力は、Y県のアトリエIに依頼した。制作にあたっては、児童たちとパウル・クレーの様々な作品を紙面上で鑑賞し、矩形による表現でいろいろなイメージを構成していることに気づいたり、クレーの描いたそれぞれの形が、何を表しているのかを考えたりする時間を設けた。制作のテーマとしては、「空からいろんな形が降ってきて、重なっていくと…」というストーリーを設け、その先を自由に想像するよう促した。その後、技法の手順を一通り指導し、2つのイメージが重なって、一つの表現が現れることに着目させた。また、版による表現のためイメージが反転することを伝えた。反転を好まない児童は、あらかじめトレーシングペーパーに下絵を描き、モノタイプの描写に移る際に、この下書きを裏返して、画用紙の上に乗せ、描いた線をなぞる方法を取った。ここでは、表2における4つの完成作品をもとに表現の効果や作品の解説を行う。

作品①は、基底線から建物や山々が描かれた、想像の風景が広がる作品である。まだ低学年の作者は、手の跡がつくことを気にせず、思い思いにイメージを描写することで画面全体にモノタイプのリズミカルな手跡が刻まれ、端正な線画の世界にとってもやさしい雰囲気が出てくる。マスキングによる描写は、斜め方向の線がまるで空から射すやわらかい光のような効果

を表している。作品②は中心に置かれたお城のような建物に加え、周囲の具体的なモチーフ一つひとつから児童の中の物語性を感じる作品である。中心に集約的に置かれたイメージを引き立てるような、四隅のコンテパステルを使ったマスクングによるグラデーションが、効果的に組み合わせられている。また、中心に柔らかいピンク色のぼかしを施している点も大変効果的な表現となっている。作品③は、猫を模した建物と、周りの家々、登場人物たちのポーズや表情から、児童の中の楽しい世界観が伝わる。画面右下から勢いよく流れる虹色のグラデーションは、マスクングの原理をよく理解して取り組んでいる様子が伺える。二つの表現が合わさることで、虹の中の不思議で楽しい街に迷い込んだような作品となっている。作品④は、全てのモチーフに矩形を使い、工夫して表した抽象的なイメージによって、鑑賞者はそれぞれの形は何を表しているのかを考える楽しさがある。着目したいのは、モノタイプで施した色調の幅広さで、塗りつぶしによる色濃い面と、指でやさしくなぞったハーフトーンが、線描とは異なるコントラストとして表現されている点である。制作の中で版表現の面白さを理解し、獲得した表現技術から新たなイメージを導き出して実践している様子が伺える。コンテパステルを使ったマスクングによる表現も、矩形が降り注ぐ街を照らす灯りのような、やさしい雰囲気に見立てることが出来る。

6 まとめ

本研究と教材の実践における最大の成果は、マスクングによるイメージと、モノタイプによるイメージを組み合わせることによって、児童の作品それぞれに大変効果的な表現が生まれた点である。写実性を好む、あるいは交線を回避しがちな児童の発達段階からみると、仮にこれらの技法だけを提示した場合はイメージの主線をモノタイプで描いて、そのあと着色を行うという流れが一般的だろう。しかし、今回はコンテパステルを使ったマスクングによる画面の着色が先だったため、純粋に画面を覆う色や形の組み合わせを楽しんだり、版の向きを考えたりしながら制作する様子が見られた。これはスクラッチのカラフルな下地をつくる際にみられる、次の表現へ移行する際の期待感にも似た感触だったと推察される。そして、1版目で制作したマスクングによる描写が、モノタイプで描画する際は裏返して見えなくなることで、そのイメージに引

きずられることなく、純粋に2版目の制作に取り組むことができたと考える。最後に、全ての作品が完成して紙をめくった時、誰一人としてマスクングとモノタイプのイメージが重なることに、ネガティブな気持ちを抱く児童はおらず、「おお!」や「きれい!」という感嘆の声が多くみられた。イメージどうしの大胆な交わりや色の組み合わせが、児童の感性にポジティブな要因として響いた瞬間だったのではないだろうか。こうした偶発性のおもしろさや、表現の充実に気づく瞬間こそ、版表現に取り組む魅力の一つだろう。

今後の課題や取り組むべき内容としては、こうした作品を使った鑑賞教育も加えていくことだろう。筆者自身も、前項で児童の作品を解説しているが、2つのイメージが重なることで、作品から非常に様々な見方や考え方が引き出された。これは制作から鑑賞までを含めて、この表現に取り組む大きな魅力の一つであると考えられる。抽象的なイメージだったマスクングによる描写が、モノタイプによる具体的な描写と重なることで、どんなふうに感じたり見えたりしたのか、児童なりに言葉で伝えたり、理解したりすることや、他者の作品を鑑賞することで、新たな見立てや発見に繋がるかもしれない。

註

1. 小野修平 (2018) 「幼児の造形活動における版画制作のための教材研究とその実践」 版画学会学会誌 第 47 号 ,pp.38-46
2. 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 図画工作編』 日本文教出版株式会社 ,p.120
3. 同上
4. 本作品は、愛知県美術館 HP においてパブリックドメインに指定されており、作品画像のダウンロード、活用が許可されている。 [http://jmapps.ne.jp/apmoa/\(2023.1.12 閲覧\)](http://jmapps.ne.jp/apmoa/(2023.1.12 閲覧))
5. 愛知県美術館 HP より、パウル・クレー :〈蛾の踊り〉 解説 [http://jmapps.ne.jp/apmoa/det.html?data_id=9985\(同上 \)](http://jmapps.ne.jp/apmoa/det.html?data_id=9985(同上))

表1. マスキングとモノタイプを組み合わせた版表現の手順と方法


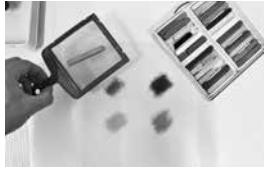
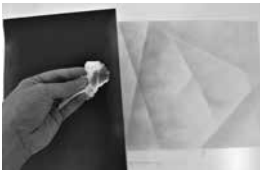



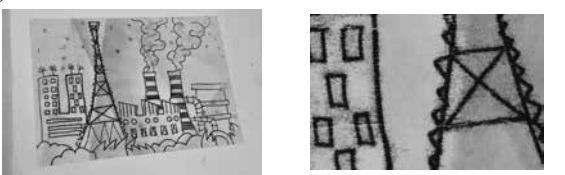
●材料と道具	
	① 
② 	③ 
④ 	⑤ 
⑥ 	
●材料と道具:水溶性版画絵具、ゴムローラー、ベニヤ板、バット、画用紙、鉛筆、網、コンテパステル	
<p>①コンテパステルを網でこすり、好きな色の粉をつくる。</p> <p>②型となる黒画用紙を、作品となる白画用紙に乗せる。画用紙同士が重なる部分を、ランダムにコンテの粉をこすっていく。マスキングの原理で、黒画用紙の境目から、顔料が白画用紙に定着し、グラデーションの様子を伴った、直線的なイメージが現れる。ステンシルのように、型紙を使っても良い。</p> <p>③水溶性版画絵具を、ゴムローラーでバット上に慣らし、そこからベニヤ板に薄く均一になるよう延ばす。</p> <p>④Aでコンテパステルの粉が定着した面を、版画絵具の乗った板上に置き、上から鉛筆でイメージを描写する。</p> <p>⑤描き終わったら、紙をめくる。加筆したい箇所があれば、再びもとに戻して加筆することもできる。</p> <p>⑥完成作品。背景の、カラフルで柔らかい色彩と、モノタイプの有機的な線のコントラストが、効果的に合わさった表現となった。今回、モノタイプの転写に用いた版材をベニヤとしたため、線の周囲に木目がにじみの様に現れた。(右図) こうした偶然的の産物も、版画ならではの表現効果となる。</p>	

表2. 児童の作品一覧


作品① (2年生女子)

作品② (3年生女子)

作品③ (4年生女子)

作品④ (5年生女子)



保育者養成校における自然体験を基にした表現活動—保育園と養成校の緩やかなつながり②— 常葉大学短期大学部 木下藍

1. はじめに

保育内容研究(表現)の授業において行った、自然体験を基にした表現活動について報告する。本実践では自然体験と自然物の収集、体験を基にした制作、展示と鑑賞という一連の表現活動を4回の授業の中で行った。また、制作の動機づけとして保育園での実践を紹介し、展示、鑑賞の際は保育園の先生を招待する等して、コロナ禍での保育現場とのつながり方について模索した。

自然体験を基にした表現活動の実践の様子や、学生の振り返りとそこから得た教員の気づきについて報告する。

2. 領域「表現」の授業の流れ

筆者の勤務校では、1年次の領域表現の授業(通年30回、受講者数141名)を5人の教員で担当している。造形・音楽・身体運動・野外活動・音楽療法といった専門領域の異なる教員が、各々の専門性を交差させながら活動を展開しており、6回ずつ授業をコーディネートしている。

筆者のコーディネートした授業の概要は表1の通りであり、通算回数でいうと後期の18-23回の授業を担当した。本稿では3-6回目(10月-11月)に行った自然体験を基にした表現活動「わたしのハコ」の実践について報告する。(1-2回目の授業「絵の中で重なるうプロジェクト」については『大学造形

美術研究』(2021)で報告している。)

表1 授業の流れ

1	絵の中で重なるうプロジェクト①	保育園でのプロジェクトの紹介・自分をかたどる、自分のなかを表す
2	絵の中で重なるうプロジェクト②	描いた自分を好きな場所に持って行き撮影する(人・風景・自然と重なる)
3	秋の自然を感じる	秋の自然を感じる・自然物を集める(学外)
4	わたしのハコ①	小さなハコの中に自分を表す
5	わたしのハコ②	小さなハコの中に自分を表す キャプションを作成する
6	わたしのハコ展	ハコを素敵に設える・共有する 保育園の先生を招待(外部講師)
授業外活動: 大学祭での展示		

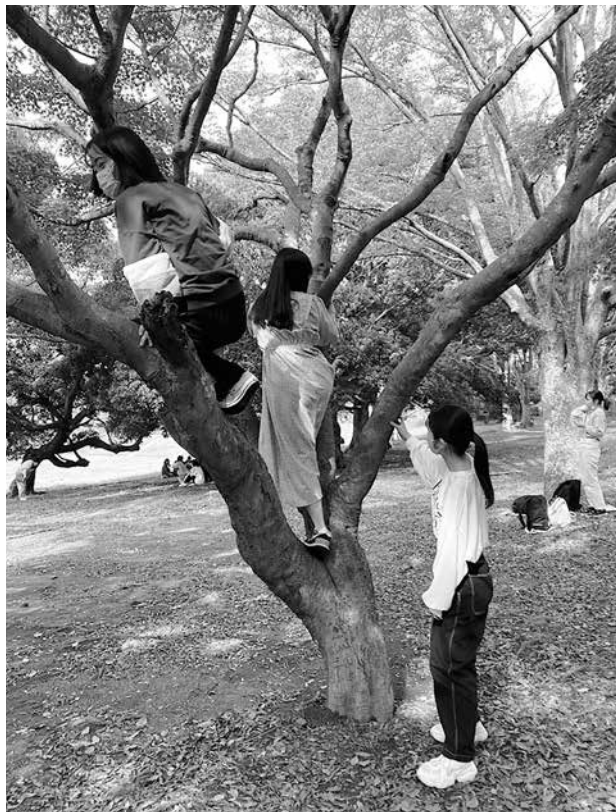


図1 散策の様子

3. 授業の様子

3-6回目の授業の様子を写真とともに紹介する。なお、写真の掲載ににあたっては該当学生に許可を得ている。

3-1. 自然を感じる

3回目の授業では、学校近郊の自然の広場へ出かけた。授業が行われたのは10月中旬で、木が紅葉し木の実が落ち始め、秋の気配を感じられる時期である。実際の保育現場での秋の散歩の様子や、幼児がお散歩バッグいっぱい木の実を拾う様子などを写真で紹介したあと散策に出かけた。「秋の季節と自分を重ねる」をテーマとし、学生は自然の中で木登りをしたり、落ち葉や木の実・枝を拾ったりし、思い思いに自然散策を楽しんでいた(図1)。拾ってきた木の実や枝・落ち葉等は次週まで保管した。

また、「季節を感じる写真」を投稿してもらい、Teamsを用いて学生間で共有した。「影の重なる写真」「落ち葉を踏む音」等の写真・動画が投稿された。

3-2. 自然体験を基にした表現活動

4・5回目の授業では、学外で活動した経験を基に小さなハコの中に自分を表す表現活動を行った。学生は先週拾ってきた木の実や枝・落ち葉等とともに、自分の「ハコ」と、ハコの中に入れてみたいものを考え各々持参した。

布やシールといった自分の好きな世界観の素材、過去の写真といった自分を直接的に表すもの、マスコット等の自分の分身になるもの等と、散策で拾ってきた自然素材を組み合わせて、思い思いに表現していた(図2)。

また、自分のハコを説明する「キャプション」を作成することも課題とした。キャプションにはタイトル、氏名、作品を他者に伝えるための言葉を添えるよう伝えた。



図2 授業の様子

3-3. 外部講師を招待しての「わたしのハコ展」

6回目の授業では「わたしのハコ展」と称して、授業内展覧会を行った。はじめは屋外で行う予定であったが、この日は雨天が予想されたため教室内で行った(図3)。

教室内で電気を落とし、自分のハコにライトを当て展示をした(図4)。学生は薄暗い教室の中一つ一つの作品をじっくりと鑑賞していた。

また、保育園でアトリエリスタとして子どもの表現を援助している保育士の三浦諒先生を外部講師として招待した(図5)。外部講師講演では、最初に展示の感想について他教員と意見交換を行った。その後、保育園において子どもたちの表現をどのように捉え支えているのか、アトリエで子どもが制作している動画や、「process」と呼ばれるドキュメンテーションを用いて講演を行っていただいた。また、授業外での活動として大学祭において展示を行った。大学祭には地域の子どもの見に来ており、興味津々で作品を覗いていた。

4. ふりかえりと考察

次に、学生の振り返りについて紹介する(図6)。本授業では授業の最後に振り返りを記入する時間を設けている。授業での気づきをその場で書き、自身の学びを連続して眺めることができる。学生の気づきから、自然体験を基にした表現活動における学びについて考察する。

4-1. 自然の散策について

自然の散策については、久しぶりに自然に目を向けて気づいたことを記入している学生が多い。自然

の中で視覚、聴覚、嗅覚、触覚といった様々な感覚を通しての気づきがあったようだ。

「実際に学校外に出ることでいつもは感じる事のない自然を感じる事ができました。」「どんぐりや枯れ葉、まつぼくりなどたくさん秋がありました。落ち葉があると目で見るだけでなく、ざくざくという音や、ふかふかした感覚、まつぼくりのチクチク等、様々な感覚を使って感じる事ができました。」

「自然と触れあう機会があまりないので、授業を通して自然を感じる事ができました。子ども目線になると自分が発見できなかったものや興味が出るようなものがあつたりと視線を変えると違う見え方になると思いました。」

4-2. 表現活動について

自分をハコの中に表す活動については、難しいという学生と、どんどんアイデアが沸く学生がいた。しかし、難しいと感じることが悪いわけではなく、真摯に向き合い試行錯誤した結果の感想であると考える。

「自分で見つけた秋と一緒に、今の自分を重ねてオリジナルのハコを作るのは、とてもわくわくするけれど難しいと思った。今の自分はどんな感じかというのは自分では分かることは少なく、客観的な視点から見る必要があるのかと思った。広場で感じた風や音や風景など、ハコの中に表せたら良いなと感じた。」「ハコという限られた中に作るのはとても大変で、飛び出して作ったりハコの形を変えたり試行錯誤しながら作りました。普段はじっくりと葉っぱや木と向き合うことは少ないので、ゆったりとした気持ちで制作できました。」



図3 「わたしのハコ展」の様子



図4 ライトで照らしたハコ

4-3. 展示について

展示を行うことで、仲の良い周りの人の作品だけでなく様々な学生の表現の魅力に気づく記述が多かった。また、部屋を暗くいつもと異なる教室環境で展示をしたことで、環境構成について言及している学生もいた。

「学外に行ったときの自然がハコの中にずっしりと詰まっていて、とてもきれいでした。」「作品は、部屋の雰囲気作りから始まるのだと思った。一つの環境をみんなで作るのが大切だと感じた。」「今まで近くの席の人の作品しか見ていなかったの、みんなの作品を見てとても面白かったです。『そんな表現の仕方があるのか!』と学びになったことや、私と似ているところもありました。」「自然のものからだんだんと自分のものにしていく過程もとても楽しかったし、他の人の過程について知ることとても楽しく感じました。」「ハコ展を通して、他の人の作品にそれぞれの世界があることを実感できた。」「自然だからこそ変化してしまうということを今回学ぶことができたのがよかったと思う。」

4-4. 外部講師の講義

外部講師の話では、アトリエリストの援助の様子や動画の子どもの細やかな変化に気づく記述が多かった。「保育園のお話の中で、見ることやまねることも成長の中で大切なことだと知り、どうしても実際にやってほしくてやらせてしまうことがあったので、子どもたちのオリジナルな学び方を尊重していきたいと思いました。」「自分の作った作品で少し不安があってもそれが自分の作品であるから自信を持って良いんだよと言うのがとても温かいなと思っ

た。」「動画の中で、釘を打っている時にうまくいかなかった子が、他のものを使って台にしたり自分で工夫している様子が見られた。どうしてもやり方を教えて同じようにやらせてしまうが、普段からヒントを出し、子ども主体でやっているからこそ、思考力や創造力などの力が身についていくと知り、自分も答えを与えるのではなく、子どもが自分で考えるようになる声かけ、対応を意識していきたいと思った。」「子どもたちが作りたいものを自由に作ったり表現したりしている姿を見て、とても生き生きしていると感じました。またその姿をよりよい形でドキュメンテーションでまとめることで伝えることに繋がることも分かりました。」

5. まとめ

学生の振り返りから、各回で一人一人が自分なりの気づきを得ていることが改めて分かった。振り返りを記入することでそれぞれのプロセスを記録に残すことができる。造形表現活動において作品ができるまでのプロセスを大切にするためにも振り返りは重要であると言える。

本授業の形態はカリキュラムの変更により今年度で終了となるが、今後も授業の中で学外の自然に触れる活動や、保育現場の先生の話や聞く機会、子どもの活動を見る機会を確保し、学生の学びにつなげていきたい。



図5 外部講師講演

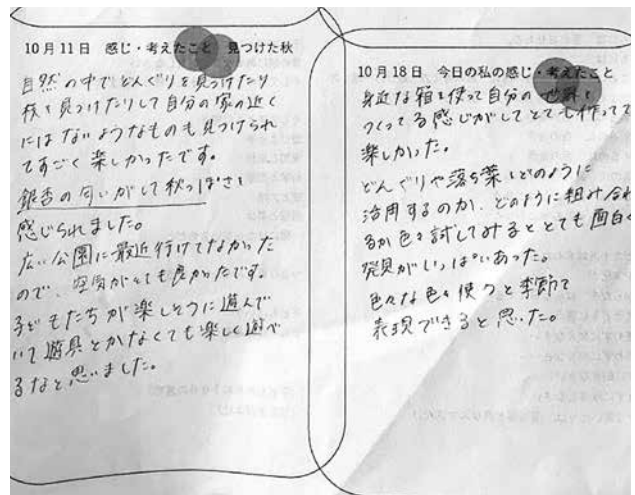


図6 学生の振り返り用紙



造形表現における応用力や配慮を養う取り組みについて一考察

山村学園短期大学 酒井 誠

1. はじめに

本学は保育者養成校という事もあり、現場を想定した実践的な学びを行う機会が多く、なるべく学生達に数多くの事例を踏まえ考えてもらうようになっている。今回は私のゼミにおいて、造形表現を行う際に応用力や配慮といった事を学ためにいくつか実践してきた事例を述べ、それについてどのような効果と影響があるかの考察を行なっていきたく思う。

2. 取り組みのねらい

今年度は「ワークショップについて考える」と銘打ち、希望者を募った結果、1～2年生の計17名の学生が集まった。学生自身がただ工作を行う、い

わゆるお客様の思考ではなく、教える側に立った程での動き方、配慮の仕方などを各々に考えさせ、理解を深めるといった時間を想定している。ただ頭の中で考えているといった環境下では、実際に行動に移した状況とイメージに誤差が生じる事が多々ある。この誤差を是正し、どの様に動けばより質の高い学びの環境構成が行えるかが本ゼミの大きな課題だが、この気づきにより、教える際に様々な配慮が行える人材になるのではないかと考える。ワークショップという短時間での活動を想定した環境下で、どのように材料を配置するか、どのようなタイミングで声かけをするか、リスクマネジメントは行えているか等、様々な配慮が行える人材の育成が行えたら

と考える。

3. 授業実践

ゼミでは大まかに分けて「身近な素材を使用した万華鏡作り」、「水と油の反発を利用した工作」、「木やタイルを使用した植物鉢工作」、「クレヨンで色染めを行うキャンドル作り」の4つの工作を行い、その工作を踏まえてどのように段取りを構築して行くかを考察しながら活動を行なった。

ゼミの進行としては、事前に3グループ程に分割し、学生達には授業の冒頭にその日制作する完成作品をあえて見せ、その際、工作には何が必要かを考えさせる。素材から道具まで一連の工程を考えた上で何が必要かを想定し、グループ事に別の場所に用意してある様々な素材、道具の中から必要と思う物を選び、テーブルに持って来させる。事前に工作室の傍には様々な素材、道具を用意し、その中には必要な物、必要無い物をたくさん置いて様子を見た。そこで、できるだけ学生達が考え、悩みなが

ら楽しめる配慮を行なった。学生達が素材や道具にある程度目星をつけ、テーブルに持って来たら、次はその道具、素材をテーブルの最善であろう位置に配置させる所まで行き、全てのグループの準備が終わった際にお互いのグループの配置を見ながら意見交換を行い考察した。工作の手順を考えただけでも、テーブルのどの位置に置く事でスムーズな導入ができるのか、素材は1箇所にとまとめて置くのか、個別に設置を行うのか、置く場所でも工作の進行は大きく変化する。その様な事象を踏まえた疑問や、もっとこうすれば作業がしやすいのではないかな等を学生同士でディスカッションさせ、お互いの認識を最適化させる事を行なっている。この様な工程を制作前に必ず行き、事前準備の大切さ、進行の工夫点を考えさせる事で、制作指導を行う際に、より深く物事を考えさせる癖をつけるように取り組んでいる。

制作物についてもできるだけ様々なケースを想定できるように、ハサミやビーズを使用した工作や、



図1 工作で使用する道具の一部



図3 制作風景1



図2 必要な素材や道具を選ぶ様子



図4 制作風景2

液体を使用した物、木工系工作、熱などを利用した物等、バリエーションに富んだものを準備した。

1つ目の「身近な素材を使用した万華鏡作り」だが、名前の通り身近な物を使用して万華鏡の様な物を作る事ができないかと考え、紙コップ、プラスチックコップ、画用紙、ミラーシート等を組み合わせて制作する万華鏡を考案した。作り方はとてもシンプルで、ミラーシートを三面鏡にし、その表面を色画用紙で筒状に丸める。両サイドを紙コップとプラスチックコップで閉じるだけといった物だ。プラスチックコップはわざと2つを重ね、その隙間にガラスビーズを入れることで万華鏡の見る物を入れる部分を作った。万華鏡というと、制作するのに複雑な工程と様々な道具を必要とする物だが、今回の工作は主に切って貼るだけというシンプルな工程になっている。所要時間は15分程で制作可能だ。使用素材も普段生活しているとどこかで目にした事がある物だけなので、道具の説明も最低限で理解ができる。あとは、工作を行なっている際に、どこが

作業として難しいのか、楽しいのか、ポイントを必ず伝えておきたい箇所もあるはずなので、作りながら各々にどの様に指導すればより良いコミュニケーションが取れるのかを考えさせながら工作を行なった。

2つ目の「水と油の反発を利用した工作」だが、こちらは水と油が分離する様子を観察できるような工作を作りたいという所から始まった工作になる。縦長の容器に着色した水とベビーオイルを入れ、蓋を締めたのちに容器を装飾して完成といったこちらも所要時間15分程のシンプルな工作になる。紙コップを2つ用意し、片方に水、もう片方にベビーオイルを入れる。水には食紅(赤、黄、緑)、ベビーオイルにはジェルキャンドル用着色料(赤、黄、青)を自身の好きな色で混色を行う。思い通りの色が完成したら容器の中に着色した水とベビーオイルを入れる事により、容器の中で異なる色の液体が分離する。これは光に照らして眺めるだけでも綺麗だが、容器を振る事で水と油が一時的に混ざり、色が変わ



図5 水と油の反発を利用したカラーボトル



図7 木工鉢とタイルコースター

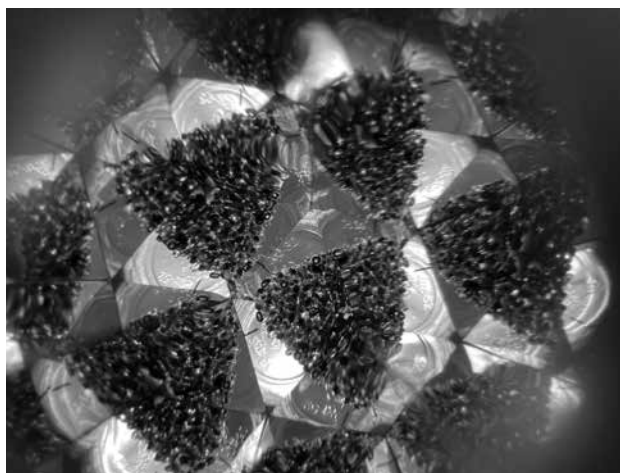


図6 万華鏡を覗いた様子

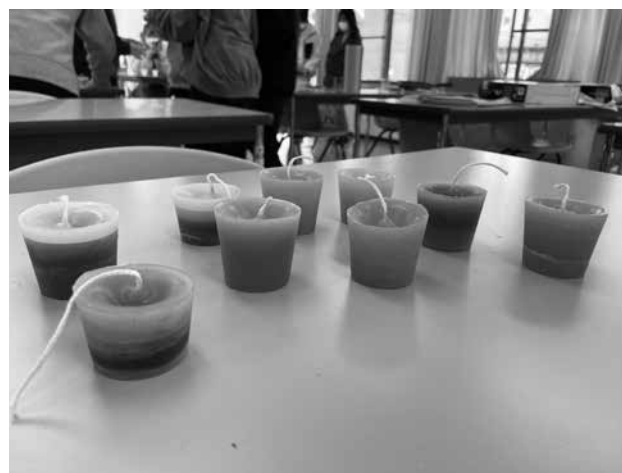


図8 手作りキャンドル完成品

化する。分離後は色を含め元に戻る。色の変化を楽しむ知育玩具といった形の物になる。工作の手順を学ぶ際に注意をしたい点が、今回は液体を使用した工作を行うとしているため、準備段階でテーブルの養生や液体をこぼした際にすぐ対応できる様な準備が必要になる。その点の把握や、絵の具類を使用する事もあり、手を拭ける様な準備も行なっておくとその都度良い配慮が行える可能性が高い。この様な事を行い、液体系工作の注意点や配慮の仕方を学びながら活動を行なった。

3つ目は「木やタイルを使用した植物鉢工作」を行なった。こちらは木材と釘を使用した鉢植えと鉢の下に敷くコースターを作る工作になる。これまで行ってきた図画工作系、液体系工作とも違い、こちらは木工系工作になる。こちらは事前にカットした木材を木工用ボンドと釘を使用して組み立てていく。金槌は使用する際、指先保護用の軍手と、テーブルを傷付けない様カッターマットを設置し組み立てを行なった。釘の打ち方一つに対しても、怪我になりにくい釘の持ち方、金槌の使い方等、様々な配慮の仕方を考えながら工作を行なった。組み立てが終わった後、アスファルトの地面にあえて完成した鉢を擦り付け、全体的に傷をつけ、ニス塗った。あえて傷をつけニスを塗る事により、アンティーク調の雰囲気を出すために行った。ただ物を作るという事だけではなく、あえて物を傷つけ、完成度を上げて魅力ある物を作る工程があるという事を学ぶ機会を設け工作を行う。この様な行いをする事で、創作の幅が広がり、広い視野を持って制作指導が行える人材になるのではないかと感じる。鉢が完成した後、コースターの制作に移る。コースターは10cm程の正方形の板を用意し、四隅を割り箸で囲いを作り、その内側に好きな色のガラスタイルを配置しボンドで貼り、隙間に石粉粘土を埋めていく。指で粘土を押し込みながら、余分な粘土を取り除き、20分程自然乾燥させれば完成になる。こちらアンティーク調の仕上がりになるので、作った鉢との相性も良い。こちらの工作では、金槌や釘、粘土を使いながらも、道具自体も本来の使い方以外の使用方法もあるという事を学ぶ機会に良いと思い活動した。

最後に4つ目の工作「クレヨンで色染めを行うキャンドル作り」になる。こちらはホットプレート上で砕いたローソクを湯煎し、溶かしながらクレヨン

で着色をし、冷やしてカラフルなキャンドルを作るといった物だ。見た目にも華やかで、工程もお菓子作りに近いので普段よりも雰囲気の違いを感じる。ただ、ホットプレートの熱を使用し工作を行うので、火傷等の工作に対する注意が多いのも特徴的だと感じる。湯煎している際のキャンドルは液体でもあるし、冷えた物は個体になるため、汚した際の片付けも大変になる。どのように設置、養生を行えば汚れや掃除が簡単になるか、といった考察をしている学生も多く見られた。他にもキャンドルを冷やす際の工夫方法や、キャンドルの芯を綺麗に中心に入れるのはどの様にすれば仕上がりが綺麗になるか等の考えは数多く上がっていた。

4. まとめ

これまで4つの方向性の異なる工作を通して様々な考え方、対応方法における配慮の仕方を各々が学び、考える事により視野の広い柔軟な発想のもと、工作の行える学生が増えるのではないかと考える。様々な工作や道具の使い方が慣れた人材育成を行う事により、怪我などのリスクも未然に防げるような想像力と、先を読み、より良い方向に行動する力が身につくのではないだろうか。更には、ただ用意された物を使用して工作を行うのではなく、学生個々が自分なりに考えた道具や、作業工程を考えながら行う事により、より主体的に物事を考えながら作品制作が行えるのではないかと感じた。この様な動き方の癖をつける事で、より質の高い制作指導が行える人材に育っていくのではないかと考える。

引き続き、様々な体験を通して主体的で様々な配慮の行える人材育成が行える様な教育方法の模索と、作品制作を心から楽しみ、それを相手に自然と伝えられる様な人材育成に尽力して行きたいと思う。



図画工作における発想の柔軟性を養う試み

山村学園短期大学 酒井 誠

1. はじめに

私の所属する学校のある埼玉県鳩山町では、毎年夏頃になると、「子ども大学はとやま」と呼ばれる鳩山町教育委員会が運営する地域連携事業が行われている。鳩山町にある大学で行われる特別講義に鳩山町の小学生4～6年生の中から希望者が受講できる形の事業になる。今年度は東京電機大学、日本医療科学大学、山村学園短期大学の3校で講義が行われる事となった。その内の山村学園短期大学内での講義を私が担当する事になった。対象が小学生4～6年生である事から、素材、工程のどれをとっても内容の分かりやすい授業展開を心が

ける構成を行った。講義内容を「太陽光と葉っぱで写真を作ろう!!～青焼き日光写真とパスタフレーム作り～」と題し、授業展開を行った。

2. 実施概要

- 対象：埼玉県鳩山町の小学生4～6年生計19名
- 日時：令和4年9月3日(土) 9:00～12:00
- 場所：山村学園短期大学構内(埼玉県鳩山町)
- 講義：「太陽光と葉っぱで写真を作ろう!!～青焼き日光写真とパスタフレーム作り～」

3. 取り組みのねらい

昨今では世の中が様々な物やコンテンツに溢れ、物一つ一つを気にしてよく見る事は少なくなっている感じがする。ただぼんやりとその物を見るというと、ながらで物を見る事が多くなりつつある世の中に感じる。この行動を繰り返すことにより、物が持つ特徴や特性も気にする事なく、対象の事を何となく扱う人間も多くなってきている感覚がある。これは便利な物で溢れかえった現代社会の特徴の様な気もする。この授業では、普段からよく見る物だが、何気なく見てきた物たちを、じっくりと観察し、少し見る角度を変える事により普段からよく見ている物の意外な一面を楽しむ時間になりたいと考えている。何気なく見ている物も、柔軟な発想が加わる事で、新たな面白い物が作れる可能性がある。作り手の柔軟な発想や、その見る物の角度を変える事で新たな物が生まれる際に、様々な気づきや発見があり、それが作り手の良い刺激になってくれたらと考える。頭の中で考えられる事を逸脱した、新た

な発想を試みる事により、作り手本人が想像していた物を越えた美しい物が出来上がる事で、より授業への関心と、のめり込みきっかけが与えられたのならば建設的な機会ではないかと感じる。

4. 授業実践

本授業は大まかに分けて2つのテーマで制作を行なった。1つ目はパスタフレーム作り、2つ目はキャンパス内の植物を使用した青焼き写真になる。この2つを組み合わせて1つの作品にするよう構成を行った。

パスタフレームについては、5～6種類程の様々な形状のマカロニを準備し、これを窓枠状にカットしたダンボールにボンドを使用して好きな形状に貼り付けていくといった、とてもシンプルな工程になる。ただし、シンプルさ故に奥が深い。マカロニの形状は立体的で1つ1つ微妙に形状が異なる。様々な形状のマカロニをただ貼るのではなく、横にしたり、縦にしたり、斜めに貼ってみるだけで印象が変



図1 パスタフレーム制作風景



図3 パスタフレーム塗装の様子2



図2 パスタフレーム塗装の様子1



図4 完成したパスタフレームを見る小学生たち

化する。他にも1層貼るだけではなく、2層3層と重ねて貼ることにより、複雑な形状になるため、様々な表現ができる。更には、マカロニ1つを貼るだけでなく、集合体として形状を構成することも可能のため、様々なパターンの模様なども制作が可能になっている。例えばスパゲッティの乾麺なども、1本ずつ貼るのではなく、10本単位程で貼り合わせる事で、波状の板を制作する事ができる。この様な普段見慣れたパスタも、少し見方を変え、工夫する事により、普段見慣れた物とは違う、見慣れない不思議で面白い物が出来上がる。この様な体験につながるヒントを織り交ぜつつ指導することで、制作者である小学生達が思いも寄らない物が出来上がる。この一連のプロセスを踏まえる事で、結果としてポジティブな感情ならば、ある種の成功体験を得ることができる。この刺激はとても重要で、小学生達が時間を忘れ制作に夢中になってくれる状況が出来上がった。パスタを組み合わせたといった作業は、一種のパズルにも近い感覚であるため、この授業内で

もひたすら作品に向き合い、黙々と制作する小学生の姿が多く見受けられた。こうしてひと通りパスタがダンボールに貼り終えたらば、次の行程に入る。次は貼り終えたダンボールの彩色になる。今回は金属質の額縁をイメージした仕上がりを目指していたため、ラッカースプレーを用意した。色はゴールド、シルバー、ブロンズと言った金属色を使用した。塗装する色は単色でも良いが、複数使用しても良い旨を事前に説明し、各々が思う好きな配色を考えさせ彩色した。ある程度自由に選択肢を与える事により自身で考え、制作に対するやりがいと、彩色が完成した際の満足度が上がるよう心がけを行った。この様な事を行う事で、完成し乾かしている間も作品のもとを離れず、じっと自身の作品を見ている小学生も多く見受けられた。それだけ自身の作品に対して思い入れが生まれたのかと感じる。パスタフレームについてはこのタイミングで乾燥させると同時に、ラッカースプレー独特のシンナー臭を取り除くため、ここで一旦外に置き、青焼き写真の制作に移る。



図5 青焼き写真用素材採取の様子



図7 作品が完成した様子



図6 青焼き写真の化学反応を観察している様子



図8 完成作品

青焼き写真とは、別名サイアノタイプとも言い、クエン酸鉄(Ⅲ)アンモニウム緑色とフェリシアン化カリウム(赤血塩)と呼ばれる物を混ぜて作る薬剤を使用した写真のプリント技法になる。鉄塩の化学反応を利用して光の明暗が青色の濃淡として移るため青焼き写真と呼ばれる。上記で記載した薬剤の混合物は感光性があり、紫外線に当たる前は黄色い液体になる。この黄色い液体を画用紙などの紙に塗布し、乾燥させた後、その上に葉っぱなどの物を置き、太陽光(紫外線)に当てる事で、葉っぱを置いた所以外が、5分程度で黄色から青色に変色する。葉っぱを置いた所(影の部分)は変色せず、黄色のままの為、水洗いする事で黄色の部分だけ水で洗い流され図像が出る事になる。今回はこの技法を使用して、小学生達に難しく考えさせず、簡単に制作が行える配慮をした。今回の活動では、事前にこちらで薬剤を塗布した画用紙を用意し、各々の気に入った形の葉っぱを敷地内から採取し、画用紙の上に置くだけで変化を観察できる状態にした。こうする事で、絵の具やクレヨンを使用する事で絵を描くという概念だけではなく、太陽光や葉っぱなどの身近で、よく見ている物も、違ったアプローチの仕方や工夫により面白い表現ができるという事を学べるのではないかと考える。小学生達に一連の工程の説明を行い、全員外へ赴き、好きな形の葉っぱを探す。この時期はシロツメクサやハギ、シダ系植物などの形状が独特な物や、虫食いの穴の開いた葉や、木の枝、小石などを持ち寄る小学生が多く見受けられた。こうして持ち寄った素材を画用紙の上に好きな様に配置し、クリアファイルにとじた後、外に持って行き太陽光に当てて変化を観察する。クリアファイルについては、葉っぱなどをより画用紙により圧着させる役目と、屋外での観察になる為、風で葉っぱが飛んで行かない様にするにはどうするのが良いかと考えた結果、コストもかからず最善な素材ではないかと考える。5分程観察していると、黄色だった画用紙は次第に青くなっていく。頃合いを見計らい、一斉に水洗いを開始する。水洗いした物を乾燥させ、青焼き写真の完成となる。

青焼き写真の工程が完了した頃合いで、先程乾燥させていたパスタフレームを回収する。ボンドや塗料もしっかり乾いており、シンナー臭も抜けている。こうして出来上がったパスタフレームと青焼き

写真を組み合わせて貼り込み、壁掛け用の金具を取り付けて完成となる。見た目としてはとても手の込んだ制作するのが大変そうな物に見えるのだが、作業工程としてはとてもシンプルで、誰でも簡単に組み立てる工程が多く、作業1つ1つを取っても、イメージのしやすい工程が多いので、小学生達も各工程を理解した上で完成までたどり着けた印象が強い。この事からも、作業工程をシンプルにし、見せ場をはっきりさせ、その都度学びのポイントを説明する事により、こちらの意図する学びのポイントや作業の楽しさの共有が行えたのではないかと感じる。

5. まとめ

今回使用した素材はどれも身近で、生活環境にあるものをメインに選んだ。これは、普段見ている物や、口にしてる物も、考え方や見方を少し変えるだけで、思いも寄らない変化が起こることを知ってもらいたい為だ。全体を通しての指導についてもなるべく難しく考えさせずに、直感的に工程が理解できる最低限のヒントを与える程度で進めていった。これは、全て教えてしまうという事は、考える機会や、楽しさや、やりがいといった機会を奪いかねないリスクもある。なるべくならば少しでも自身で考え、主体的な学びを行っていかなくては、工作の楽しさや気づきは身につかないのではないかと感じる。この、想像はつくけれども、実際にやるという発想はなかった。という位の意外性が、1番親しみやすく、楽しみながら学ぶ事ができるポイントなのではないかと考える。

今後の展望としては、一見難しく見える技法や、本格的な技法を、より親しみやすく、楽しく学べる様に簡略化する事を行っていきたい。今回の青焼き写真も専門的な技法ではあるが、あえて難しい部分を簡易化し、理解しやすい物に置き換える事で、敷居の高い物から、親しみやすい物に変化させる事は可能だ。普段見慣れている物、見慣れない物、様々な物を見て、触って感じることで物の特性を知り、その体験を経て、柔軟な発想の人々が増えていくと考える。今後も引き続きその様な人材の育成に尽力していきたいと思う。



写真1 ランプシェードを作る

身近にあるいろいろな材料・用具の活用

新島学園短期大学 櫻井 剛

1 背景

造形に関係する授業において学生が製作する様子を見ると、材料・用具の使い方や作り方に課題を感じることもある。原因の一つには学生の体験不足が関係している。この課題は、幼少期から短期大学の入学までの長い期間に体験したことが影響している。しかし、体験を重ねることは時間がかかり、学生の体験不足は短期大学の授業や短い学生生活の中で改善することは難しい。

この実践では、学生が身近にある材料・用具を使用した活動を通して、いろいろな材料・用具を活用する技能と感性を補うことを目指す。

また、この実践での体験を踏まえて、学生が将来、

保育現場でこのような活動をやってみたいと思うことを期待した。

2 実践の場

実践は、短期大学の「子どもの環境と文化」コースの「自然と生活の体験」の活動で行った。「子どもの環境と文化」コースは、子どもの活動やあそび、保育教材の活用や環境の構成の習得を目的としている。このコースでは、学生が「自然と生活の体験」の活動を含む複数から一つを選ぶ。学生が複数の活動から選択するため、それぞれの活動の人数は少人数である。少人数のため、話し合いや役割を分担して協力して活動することができ、教員が見守り

アドバイスすることも容易にできる。少人数の有利な点をいかした授業の方法を検討した。

(1)対象の学生

対象の学生は、「自然と生活の体験」を選択した1年生である。全員が保育士資格と幼稚園教諭二種免許状の取得の希望である。対象の学生は、春学期・秋学期に資格・免許に関わる科目を履修しており、これらの科目の学びにより、ある程度の保育の知識の基盤はある。

これまでの学生の体験を確かめるため、学生にこの実践で取り上げる題材を例に挙げて尋ねた。幼いときに体験したという回答や分からないと回答することが多かった。このことから対象の学生は、この実践で取り組むような体験を、わずかに覚えている状態、あるいは未経験であることが推測できた。

(2)授業の進め方

この実践の目的と対象の学生を踏まえて、以下の方法で授業を進めた。

各学期の初回の授業は、教員がこの授業の目的・進め方を説明した。

次に教師が学生にいくつかの題材を提案した。

学生は提案を聞き、興味や関心、その日の天候、携帯電話でweb ページを調べたことをもとに話し合い、題材を選んだ。

題材が決まったら、学生が携帯電話でweb ページなどから、より細かく方法・材料・用具を調べ、それをもとに話し合っどどのように進めるのかを決めた。

携帯電話で調べる理由は、web ページは文字や写真、動画の情報が豊富に掲載されており、学生が興味を持ち、取り組んでみたいと思えるからである。文章と写真が掲載されたweb ページは手順やポイントが示されていて、見やすく分かりやすいので実際の活動の参考になる。動画は、実際に実施した際の周囲の環境が映されていたり、活動の際の材料の変化が映されていたり、音や声もあり、臨場感がある。Web ページにこれらの情報が少ない場合は、必要に応じて教員がアドバイスをした。

携帯電話で集めた情報をもとに、学生が他の学生と一緒に材料・用具を集め、協力して実施した。学生は他の授業のときに、造形室の材料・用具を自由に探して使っているので、造形室で多くの材料・用具を準備できた。学生が準備することが難しい材料・用具や普段は使わない材料・用具は教員が

準備した。

この授業を主に実施する場所は造形室である。また、必要があれば、造形室の他に短期大学の庭を使用した。庭には草花や樹木、土・石といった自然物があり、活動を実施するために水を流したり、火を燃やしたりすることもできる。このような学内の環境や材料・用具を活用して活動を実施した。

活動の後には、教員が用意したコメント用紙に、感じたことや発展的な内容を記入した。教員は、コメント用紙の記述内容から、学生の学習したことを読み取った。

3 実践

授業回数は、春学期3回、秋学期5回である。受講者は、春学期は9名、秋学期は5名である。

(1)春学期

初回の授業は、担当教員からこの授業に取り組む目的を説明し、複数の題材例を示し、これを参考に学生が話し合っど体験する題材を決めた。以下に、春学期の題材とコメント用紙の記述の概要を示す。

①草花を使った色水作り

題材の目的は、学生が身近な草花に興味を持ち、色水作りの方法を学び、色水遊びを楽しむことである。

題材の進め方は、学生が携帯電話で色水作りを調べ、草花やその他の材料を集め、色水を作った。

学生はコメント用紙に次のように記述した。色の組み合わせについて「同じような色の花を入れるとき綺麗な色になる。」などと記述した。また、色の変化について「重曹が青、酢が赤などの色の変化を楽しむことができた。」などと記述した。発展的な内容について「もう少し色を出して色塗りなどしたら楽しそう。」と記述した。

②竹を使った流しそうめんのような装置作り

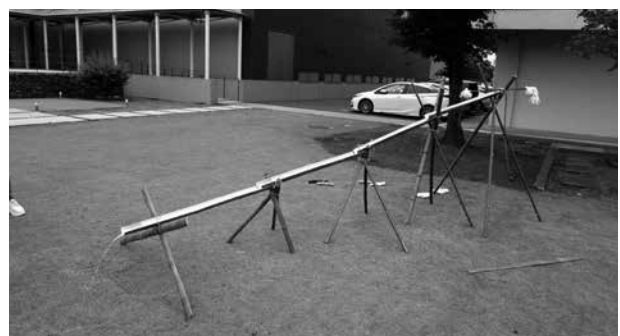


写真2 竹を使った流しそうめんのような装置作り

題材の目的は、学生が竹や水に興味を持ち、竹の加工を学び、水遊びを楽しむことである。

題材の進め方は、学生が携帯電話で流しそうめんを調べ、協力して竹を加工して流しそうめんのような装置を作る。ホースを設置して、水を流して、そうめんの代わりに包装されたスナック菓子や飴を流す。

学生はコメント用紙に次のように記述した。竹の性質について「竹が意外ととげとげしていた。」と記述した。竹の加工について「途中で(流れが)止まってしまうことがあったので、竹を削るのは重要だ。」などと記述した。水の調整について「水の速さ、量など、調節しながらすることの大切さを知った。」などと記述した。

③シャボン玉液とバブルマシーンを作る

題材の目的は、学生が生活に使う材料に興味を持ち、シャボン玉液の作り方とバブルマシンの作り方を学び、シャボン玉の遊びを楽しむことである。

題材の進め方は、学生が携帯電話を使ってwebページを見て、シャボン玉液の作り方とバブルマシンの作り方を調べて作る。そして、シャボン玉で遊ぶ。

学生はコメント用紙に次のように記述した。バブルマシーンについて「針金で大きい円を作ってシャボン玉は作れた。」などと記述した。シャボン玉の膨らませ方について「ふわっと上げる感じでやるとシャボン玉がしやすい。」などと記述した。発展的な内容について「大きい器や深い器に(シャボン玉液を)入れて吹くともっと大きなシャボン玉ができると思った。」と記述した。

(2)秋学期

初回の授業は、春学期の初回の授業と同じようにこの授業の目的を説明した。以下に、秋学期の題

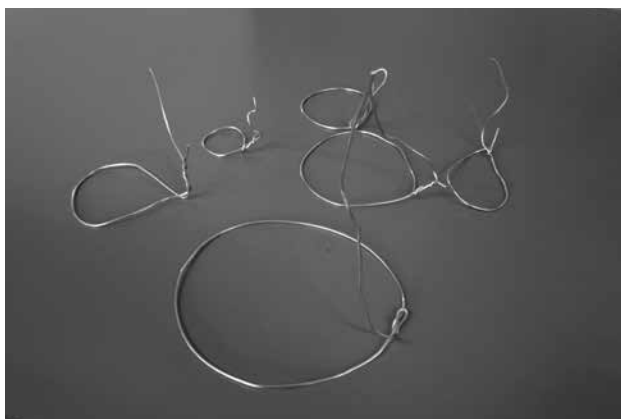


写真3 バブルマシーンを作る

材とコメント用紙の記述の概要を示す。

①木の実を使ったお菓子作り

題材の目的は、学生が木の実に興味を持ち、作ったお菓子に木の実を飾ることを学び、木の実を飾って食べることを楽しむことである。

題材の進め方は、学生が携帯電話で木の実のお菓子を調べ、学内で木の実を採り、木の実とお菓子を調理した。そして、お菓子に木の実を飾り、食べた。

学生はコメント用紙に次のように記述した。味や食感について「思ったよりも渋みがなく、食べやすかった。」などと記述した。しかし、お菓子へのトッピングや装飾についての記述はなかった。

②藍の葉のたたき染め

題材の目的は、学生が植物や布に興味を持ち、たたき染めの方法を学び、たたき染めの遊びを楽しむことである。

題材の進め方は、携帯電話でたたき染めを調べたものの、十分な情報が見つけられなかったため、教員がたたき染めの手順を伝え、学生が葉を採集し、たたき染めをした。そして、布を洗い、干して、布が染まる様子を見た。

学生はコメント用紙に次のように記述した。葉の構成について「葉を好きな位置に並べて模様を作ることができて楽しい。」などと記述した。また、金づちのたたき方について「金槌の丸い面で叩いたことで葉に丸く跡がついて、そういう工夫もできるんだと感じた。」などと記述した。

③枝や木を燃やし、食材をあぶって食べる

題材の目的は、学生が枝や木で火を燃やすことに興味を持ち、食材を火であぶって食べる方法を学び、火遊びと食べることを楽しむことである。



写真4 木の実を使ったお菓子作り

題材の進め方は、学生が携帯電話を使ってwebページから着火の仕方やあぶり方を調べ、学生が燃やす材料を集め、火をつける。そして、身近な食材をあぶって食べる。

学生はコメント用紙に次のように記述した。着火について「一度失敗したところから改善することで上手く火を付けることができた。」などと記述した。火の暖かさについては「火は暖かいよりも熱かった。」と記述した。

④竹を使っておもちゃを作る(水鉄砲・竹ぼっくり)

題材の目的は、学生が竹・紐・布などの材料を使っておもちゃを作ることに興味を持ち、竹を使っておもちゃを作る方法を学び、おもちゃを使って遊ぶことである。

題材の進め方は、携帯電話で水鉄砲づくり・竹ぼっくり作りを調べたものの、十分な情報が見つけれなかったため、教員がアドバイスをし、学生が竹を選び、竹を加工して製作した。そして、おもちゃで遊んだ。

学生はコメント用紙に次のように記述した。水鉄砲作りについて「竹の太さに合わせて布を巻くのが大変だった。」などと記述した。竹ぼっくりについて「ぼっくりの高さと太さが大切。」などと記述した。

⑤ろうそくを作る

題材の目的は、学生がろう・紐などの材料に興味を持ち、ろうそくを作る方法を理解し、ろうそくの炎を楽しむことである。

題材の進め方は、学生が携帯電話でろうそくの作り方を調べ、材料・用具を集め、ろうを溶かしてろうそくを作った。そして、火をつけた。

学生はコメント用紙に次のように記述した。ろうの加工について「ろうが溶けやすいのはボールで、紙コップやプラコップ、牛乳パックは溶けるのに時間がかかった。」などと記述した。着色について「少しの色で色がつく。」などと記述した。

⑥ランプシェードを作る

題材の目的は、学生が野菜でランプシェードを作ることに関心を持ち、ランプシェードを作り、明りを楽しむことである。

題材の進め方は、学生が携帯電話でランプシェードの作り方を調べたものの、十分な情報が見つけれなかったため、学生が考えてランプシェードを作った。ランプシェードの材料としてキャベツと大根のかつらむきを使用した。そして、中に火をつけて明りを楽しんだ。

学生はコメント用紙に次のように記述した。野菜の加工について「ストローで穴が開く。」などと記述した。光について「キャベツがうすいため、光がきれいにうつし出されている。」などと記述した。臭いについて「キャベツは燃えて臭くなった。」などと記述した。

4 まとめ

学生のコメント用紙の記述内容から、多くの題材でいろいろな材料・用具の活用の様子が確認できた。また、題材によっては味やにおい、熱さといった感覚を感じていることが確認できた。ただし、題材によっては発展的な内容の記述がなかった。

この実践では、題材について携帯電話でwebページを調べ、方法・材料・用具を確認して実施した。しかし、webページに十分な情報が掲載されていなかったり、学生がwebページから必要な情報を探すことができなかつたりする場合があります、この点が課題であった。

また、この実践は、教師が学生にいくつかの題材を提案し、学生が話し合っって題材を選んだ。このため各題材の関連性は薄く、学習の系統性はなかった。今後は、初回の授業でこの活動の目的を十分に示し、題材にある程度の関連性を持たせることが改善すべきことである。



写真5 藍の葉のたたき染め



写真6 枝や木を燃やし食材をあぶって食べる



写真7 竹ぼっくり

サドセンが桃源にあることを…

—「不知身在桃源」—

新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科 福岡龍太

I はじめに

非常に回数が少なく、そして不規則な時間割だが、学生が安心して表現したくなるような信頼関係を築ける造形授業はできるのだろうか。

2022年度、新潟県佐渡市内にある保育士養成専門学校、「佐渡保育専門学校」(以下サドセン)で開講される造形授業は、極めてイレギュラーな授業構成及び日程であった。対象者は今年度入学したばかりの1年生、女性7名である。

サドセンは高校を卒業したばかりの学生だけではなく、保育所等で働きながら保育免許を取得しようと再び学ぶ社会人学生も毎年一定数在籍している。保育職に就きたい人や専門的知識を深めたい人を幅広くバックアップする、全国的にも稀有な保育者養成校だ。表現教育の一端を担った筆者は、冒頭の条件下で問題意識を掲げつつ、表現活動の原動力のひとつとされる「やる気」を学生が自発的に表出できるような授業展開を試みた。本研究ノートは、近年よく議論される「主体的な表現活動」を、極めて短期間で実現するために必要なきっかけを明らかにすることを目的としている。

II 現況と問題意識

1ファーストインプレッション

サドセンでの第一回目の授業は、入学式を終えて間もない4月15日。集中講義として、月に一度の午後に造形表現という授業を前期のみ行う。先月まで高校生だった学生が5名(以下妹学生)、2名(以下お姉さん学生)は社会人経験がある。

筆者は初回授業の第一声を、授業開始直前まで考えていた。堅苦しい挨拶や、授業に対する心構えなどは、授業内容の特性上あまり効果的ではないと判断する。そこで、ただちに制作へ引き込むよ

うに「○△□を使って猫や犬のラクガキをしてください。遊びですよ」と伝えることにした。

2 問題意識

サドセンの授業は、一回の時間数が3時間から多い時には6時間となる。忘れた頃に会う教員と造形表現で関わることを、学生も筆者も経験したことがない。長時間にわたる授業にたちまち飽きてしまう学生の苦悩が安易に想像できる。

気楽な気持ちで制作に臨んでもらおうとスタートした、サドセンでの演習授業における筆者の問題意識は、この状況で筆者と学生とのコミュニケーション構築ができるのか、そして学生各々の主体性を短期間で引き出し、継続できるのか、その主体性は本物なのか、にある。

III 方法

そこで筆者は、問題意識を解消するために授業を細分化し、制作活動と理論探究を交互に織り込みながら、時おり学外活動を行うことで、多角的に表現教育を捉える機会を講じた。

- ・ 図工室の環境：1メートル×1.8メートルの作業机を7台連ねて使用する。着席場所は自由にした。
- ・ 使用する主な描画用具：マジックペン10色×3セット、のり(大)5本、ボンド(大)3本。4つ切り画用紙、ロール紙、A3用紙

IV 観察記録と結果

(1)4月15日(雨) 対面6名、ZOOM1名(社会人)
14時～17時20分

課題①「ラクガキ」40分

—表現に対する苦手意識を克服する—

「○、△、□を使って犬や猫をラクガキしてくださ

い。決して上手に描いてはいけません。描けてしまう人は利き手と反対の手で描いてください」

〈様子〉上手に描こうとしないでほしいと伝えると、たちまち学生は好きな色のペンを手に取って大胆に描き始める。「上手に描いたらだめなんだよ」とお互いに声をかけ合いながら、スピーディーに描き進めている。

課題②「自分チャートの作成」60分

—自身を客観視する—

〈準備と目的〉1メートル四方の紙をひとり一枚配布。そこに縦、横軸を引き、上にヒト、下にモノ、左に外、右に内と書き込む。日常生活で感じた事柄を事実とそれに伴う感想に分けて、毎日頻繁にメモをしたものを区分したエリアに貼り付けていく。紙の中央には毎時筆者が質問をした返答を書き込むスペースを設ける。自身の観察力を客観視することが目的である。

〈中央スペースの質問〉①自身の名前に込められた親たちの思い。②保育に目覚めたきっかけ。

〈様子〉自身の名前に込めた思いをほとんどの学生は知っていた。メモの作成は数日前からの生活を振り返って書いてもらった。「一日ひとつメモをする」と宣言する学生もいたが、周囲からは「ひとつでは少なすぎるでしょ」と指摘されていた。メモ内容は、まじめな事柄でないといけないと認識している学生が多く、学校生活での出来事ばかりに偏っている。筆者が「遊びを中心に思い出してほしい」と伝えると、急にメモ数が増えた。

課題③「ある子がシリーズ」50分

—保育現場をシミュレーションして対策を考える—

お題「みんなでラクガキをしているとき、ある子がクレヨンを食べてしまいます」

〈準備と目的〉A3の紙を使用する。保育現場での問題を仮想して、その子や周囲への対処はどのようにしたらよいかを検討する。様々な対応策の文章化を目的としている。

〈様子〉「皆さんは保育士です」と仮定することで、学生の目が変わる。筆者の質問に答える様式で解決策や再発防止策を考える。筆者からの質問は、①なぜそうなったか。②再発防止策は何か。

(2) 5月13日(雨) 対面7名 14時～17時20分

作業① 90分

翌週に行われる運動会の小道具を完成させたいと申し出があったため、筆者は許可をした。ポンポン30個と1メートルほどの棒3本に装飾を施す。

課題①「ラクガキ」50分

「GWの思い出を描いてください」

〈様子〉お姉さん学生2人はそれぞれの家庭での出来事と、自身の子どもの思い出を絵にした。妹学生5名はアルバイトの体験談や、友人と遊んだことを絵にしていた。

課題②「ある子がシリーズ」50分

お題「みんなで歌っているとき、ある子があきらかに大便をしたいのに必死に我慢をしています」

〈目的〉我慢してしまう子どもへの対応策を保育者目線で考える。恥ずかしさを解消する方策がカギとなる。

〈様子〉学生は排便を我慢すると人体にどのような影響が出るかをスマートフォンで検索する。その後、筆者の質問に答える。①なぜこのような状況になったのか。②あなたはすぐにどうするか。

〈考察〉排便不良が体に及ぼす影響を知った学生は、恥ずかしいなどと言っている場合ではないと切迫感が高まった。この意識がすでに定着しているお姉さん学生は、排便の際に恥ずかしいと思う子どもの心を払拭する魔法の言葉を知っている。実子との交流で培ったシンプルな言葉には説得力がある。

(3) 6月10日(晴れ) 対面7名 14時～17時20分
作業①

月末に近所の園を訪問する際の手作り土産を制作した。12色の色紙を重ねて貼り付けたミニチュア傘30個と、折り紙とストローを使った風車を14個制作する。

(4) 7月15日(曇りのち雨) サマースクーリング対面7名 9時～17時

課題①学外活動 40分

島の中央部よりやや南に位置する「人面岩」がある真野湾へ行く。石を見て何か感じたら拾い、学校へ持ち帰る。

〈様子〉現地到着後、お姉さん学生2名と妹学生1名がさっそく浜辺へ飛び出し、縦横無尽に石を探し始めた。いったんしゃがむとしばらくその場で動くことなく、足元にあるいくつもの石に手を伸ばして、角度を変えながらじっくり吟味している。一方、妹学生4名の傘グループはなかなか海岸へ下りていこうとはせず、人面岩でしばらく写真を撮っていた。

20分ほど経過して、ようやく採取を始めた。

課題②「ラクガキ」 50分

「自分の誕生日を祝ってください」

〈様子〉妹学生のラクガキはケーキの前に自分が座るが、お姉さん学生は我が子を中心となっている。

課題B「ある子がシリーズ」 40分

お題「みんなでお昼ご飯を食べていると、ある子が突然隣の子とけんかを始めてしまいました」

〈質問〉①なぜこうなったのか。②保育者としてこの状況をどう解決するか。

課題③「自分チャートの作成」 50分

〈中央スペースの質問〉「自分の性格を客観的に書いてほしい。5年後の自分はどんな生活をしているかを具体的に(月収も)予測してほしい。」

〈様子〉1か月間書き貯めたメモの量は人それぞれ違うが、メモをしていない学生は一人もいない。

〈考察〉メモ帳の端の劣化が激しく、メモを取るという意識が生活に根付いてきたようだ。

課題④「見立て遊びを行う」 60分

—遊びから表現につなげる演習活動—

〈準備と目的〉午前中に採取した石が乾いたのを確認して、教室へ運び込む。そして各々その石を再びよく観察して何に見えるかを考える。マジックペン等で着色して見立てを可視化することが目的である。

〈様子〉石をじっくり観察し、何に見えるかを再考している。そして十分考慮し終わると、一気に着色をして見立て遊びを具現化させた。「海岸では〇〇に見えたのに、今は見えない」という意見が多い。

(5) 8月19日(快晴) サマースクーリング2日目 7名 感染拡大が深刻なため遠隔授業 9時~17時

接続確認と授業説明 30分

課題①「散歩観察と報告」 30分移動80分報告

—自身の思いを要約し、確実に他者へ伝える—

〈お題〉福岡に知らせたいヒミツの場所を現地から報告してください。

〈様子〉お気に入りの場所へ車や徒歩で移動して、そこから各自発表を行った。海や田畑、神社や農園などを映しながら、幼少期や実子との思い出を解説してくれた。全員が発表を楽しんでいる。

課題②「ラクガキ」 50分

「あなたが働いている未来の園の風景」

〈様子〉すべての学生が40分間以上集中して描いていた。描き終わるとカメラに向けてラクガキを見せ合っていた。

〈考察〉上手に描こうという意識が完全に消失したようだ。

課題③「自分チャートの作成」 30分

〈中央スペースの質問〉「20年後はどんな生活をしているか。」

課題④「ある子がシリーズ」 60分

お題「受け持っている子どもの親が再婚するそうです。守秘義務について考える。」

〈筆者の感想〉母・父の日にありがちな「親の顔を描かせる」という活動意義について議論がしたい。

課題⑤「推しをプレゼンする」 30分

—端的に意思をアピールする表現方法を身につける—

〈様子〉好きな有名人の写真等を一枚表示して、興味のない人へアピールする。サドセンの教員も参加したことで、すべての学生が推しについて熱く語ることができた。

(6) 9月30日(快晴) 対面7名 14時~15時35分 最終回

8月の提出物の確認とまとめを行い終了する。

V まとめ

(1) 優先すべきこと

サドセンで行った授業で筆者が試みたことは以下の3点である。

- ・丁寧な説明を控えてみた。
- ・学生がやりたいことを第一優先とした。
- ・グループワークにならないような課題を設定した。

どんなに綿密に授業計画を立てたとしても、学生が興味を持って取り組んでくれるとは限らない。医師の岩田健太郎によると、「どういう手を尽くしても(中略)やる気が起きない人もいる。そういう時は、諦めるか、待つよりほかはない¹⁾」らしい。だから筆者が予定していない活動であったとしても、学生がやりたいと申し出たことを優先した。また、準備したカリキュラムへ誘う時には、事細かく説明することを控え、各々が今、表現する意欲があるのかを確認できるような“ゆとり”を醸成するよう心掛けた。すると、このゆとりを有用に使いこなそうとするお姉さん学生は、自らの認

知的・身体的・情動的体験の記憶を呼び起こし、他者を頼りにしない表現を目指すようになった。そして、その様子を傍らで見ていた妹学生は、少しずつ模倣していくのであった。

(2) 真の主体的活動とは

学生が心から望む制作には、制作しなければならないからする場合と、制作したいからする場合とにおおよそ分けられる。6月10日の作業①と、8月19日の課題①「散歩観察と報告」でのお姉さん学生の学習態度を比較すると、その差異を見ることができる。園訪問で持参するお土産を制作しなければならないという申し出に、学生の主体性は見受けられる。一方、自身の思い出の地を訪れ、観察をしながら他者へ伝えるという課題へ取り組む姿勢にも、主体性は見受けられる。しかし、しなければならないという他者が学習目標へひきつけるために奮い立たせたやる気と、学生が他者へ知見を伝えようと発した強烈なやる気との起首は違う。前者は他者の主導で学生は受け身となり、後者は学生の欲望そのものであり、それは誰からのコントロールをも受け付けずだ。どちらも主体性を叶えているが、双方を経験した学生はその違いを今後どのように社会で生かすのだろうか。

(3) 主体性の継続

なぜ筆者がグループワークをあえて行わない授業構成にしたのかというと、毎時自分の活動を振り返る絶対評価の徹底から、学生に単独行動をしてもらいたかったためである。そのために意欲的な学生を過度に褒めたりすることで、学生同士が知らず知らずのうちに比較してしまう場面を作らないようにした。その結果、なかなか活動を始めない学生も、いつの間にかこの環境に引きずられて制作が恒常化するようになる。他者の目を気にしながら制作をしなければならないという意識が消えると、学生はたちまち自己対峙を始めるようだ。

(4) 結論

本実践における問題意識は、一回の授業に複数の課題を盛り込むことができるのか、そして短期間で筆者と学生とのコミュニケーション構築と学生各々の主体性を引き出し、継続できるのか、であった。

学生に主体性を重視した複数の授業課題へ取り組んでもらおうとするならば、教員は十分な準備段階において思考や活動内容の視点を多角的に捉え

るよう計画するだろう。そして思い通りに授業が開けた教員は、学生を信頼するはずだ。しかし、学生が教員を信頼したかどうかは不明である。真の主体性は意外にも、綿密に練った授業計画を予定通り進めない、もしくはあえて進みにくくするなどといった隙間だらけの授業と、教員の我慢によって生まれるのかもしれない。



活動1：意識することなく個別活動ができる課題を心掛けた

VI おわりに

年齢差が少なくとも、社会人経験知のあるお姉さん学生が存在していることは、サドセンの最大の特徴であり、この環境が妹学生の学習意欲を刺激したことは、わずかな授業からも明確であった。

筆者はこれまで、保育者の資質向上のために図画工作を介して何かを“作らせる”のではなく、作りたいと思ったときにすぐ活動ができる環境を整備し、そこから生まれた個々の意欲を尊重してきた。サドセンでも同様に、表現に対する欲望が強靱な表現力となって学生をコーティングしている。そのうち、それが骨身に沁み込んでいく2025年3月頃、彼女らは最後の卒業生としてサドセンから飛び立っていく。長い歴史を紡いできたサドセンが、世代間交流を経た多くの卒業生によって作り上げられた雄大な桃源郷だと、まだ気付いてはいないのだろう。

註

¹ 岩田健太郎『主体性は教えられるか』筑摩書房,2012年.p.35



コマ撮りアニメ作成アプリ「アニコマ」を使って、一つ前のカットが重なり表示されることで動きが確認できる

「ハリガネ芯ちゃん」を用いた ICT 活用の題材開発

武蔵野美術大学 三澤一実

1. はじめに

教員養成課程では、平成 28 年の法改正（教育職員免許法の改正（平成 28 年 11 月）及び平成 29 年の省令改正（教育職員免許法施行規則の改正（平成 29 年 11 月））により、学校現場の状況の変化や教育を巡る環境の変化に対応するため、特別支援教育の充実や、ICT を用いた指導法等の内容が新たに盛り込まれた。教職課程を有する全ての大学等（1,283 校）に設置される合計 1 万 9,416 課程に上記内容が盛り込まれたことを国において審査・認定し、平成 31 年 4 月より新たな教職課程が始まった。¹このような状況下、教科教育法における ICT 機器の活用が

課題となっている。

ICT の活用ではデジタル機器の活用だけではなく、インターネットを含む GIGA スクール構想の下、広く捉える必要があるが、美術では鑑賞での活用は進んでいるものの表現領域ではまだまだといえる。そこで、今までも多くの実践があるアニメーションを CIT 機器を使って取り組む表現体験として学生に経験させ ICT 活用の入り口としたいと考えた。アニメーション制作については全美協の賛助会員である株サンワの Web アプリの「アニコマ」と「レポクラフト」を活用し、彫刻教材づくりから、教材を使った映像制作、データのアップロード、全員の鑑賞まで 2 コマ 180 分の授業とした。

2. ハリガネ芯ちゃんについて

ハリガネ芯ちゃんは筆者が13年前に開発した彫刻題材であり、2つの木片にアルミのハリガネを通して、人間の骨格を再現するものである。元々は川越市美術館での彫刻鑑賞ワークショップで開発したものであるが、人体や骨格の構造を理解し、ハリガネを曲げることで生まれる動きや空間、そして感情を表現できる教材として優れている。そして、制作物を使って、立体クロッキーや写真表現、アニメーションなど活用の幅が非常に広い。教材としての学習適齢は小学校高学年以上で、学習指導要領に示された材料用具の針金の学習題材としても適しており、小学校だけでなく中学校や高校、教員対象の研修でも十分活用できる。芯ちゃん自体の組み立ては10分程度で完成する。

芯ちゃんの針金はアルミ線を白のビニールでコーティングしてあり曲げやすく自由なポーズを作つくり出すことができ、胸骨と骨盤を模した木片が、人間の動きを自然に再現してくれる。

3. 芯ちゃんを使った3つの題材

(1) 芯ちゃんアルバム (90分)

この題材は写真表現の題材で、芯ちゃん制作10分、カメラの取り扱い説明15分と合わせて90分の授業である。ここでは2人一組になり、それぞれ芯ちゃんにポーズをとらせ、ポーズに合った背景を見付け、そこに設置して写真を撮る題材である(写真1~4)。カメラはAPA(公益社団法人広告写真家協会)から15mm-45mmのレンズ付きミラーレス一眼をレンタルし、写真撮影の基本的な知識の使い方を学んだ上で撮影する。基本的な知識は「シャッタースピード」、「絞り」、「露出」、「感度」、「被写界深度」などである(写真5)。実際にカメラを使うと、スマートフォンでは表現できない写真表現に学生は驚いていく。

(2) 芯ちゃんクロッキー (15分)

芯ちゃんクロッキーは人体の動きの面白さを短時間で感じ取り学べる題材である。クロッキー帳でクロッキーをするように、芯ちゃんを手に持ち3分間で素早くモデルの動勢を写しとる。一方向からの観察では写しとれないので、モデルに対してぐるっと360度回り込み自分の写しとった形を確認していく。この活動を通して人体の形の面白さに気づいていくと同時に、アニメーション作成時のポーズの作



写真1 マニアル撮影に挑戦



写真3 背景をぼかして(学生作品)



写真2 明暗を活かして(学生作品)

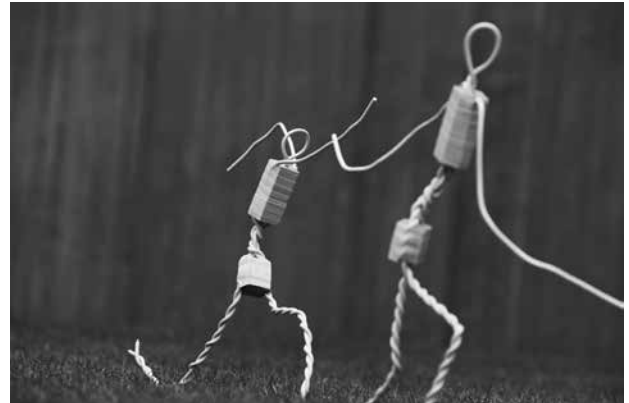


写真4 手前と奥をぼかして(学生作品)



写真5 カメラを使う基礎知識のスライドから

り方に深みが増していく。(写真 6,7)

(3) アニコマで芯ちゃん (75分)

(1)の芯ちゃんクロッキーに続き、グループでアニメーションを作成する。5人グループを作りクロッキーを行ったあとグループに1台 iPad を配り、動画を撮影する。アプリケーションは(株)サンワと共同開発した「レポクラフト」という授業サポートアプリに付随している「アニコマ」というアニメーション作成ソフトを使う。このアニコマは web アプリなので、iPad にインストールする必要が無く、web から



写真8 ポートフォリオ式評価アプリ



写真6 ポーズをとる学生とクロッキーをする学生



写真7 芯ちゃんでクロッキーをする手もととモデル

直接立ち上げられ、学習集団で作品共有も出来る。使い方は至って簡単で画面を見ながら確認でき、学生に説明をしなくても使いこなせるアプリである。ここでは一コマあたりの形の変化が大きければ大きいほど動画にすると動きが速くなることを伝えた。また、フレームワークも、前後の動きを作ることで奥行き感などを表すことが出来ることを伝えた。あとはグループで学内を散策して面白そうな場所を見つけたらそこから発想し、ストーリーを作っていく。この発想のしかたは小学校学習指導要領図画工作



写真9 コマドリで使用したアプリ

の5・6年生の造形遊び「造形遊びをする活動を通して、材料や場所、空間などの特徴を基に造形的な活動を思い付くことや、構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながら、どのように活動するかについて考えること。」に該当する。

このように場所の特長から思いつき表現していく活動なので制作時間も75分と短くても10秒前後の動画が生まれてくる。

この活動では、発想や構想の能力はもとより、奥行きや動きなど、映像ならではの知識の学習ができる。授業コマ数としては2コマの授業ではあるが、ハリガネ芯ちゃんや「アニコマ」デジタルカメラ、レポクラフトなどのICTを活用することで充実した学習になる。動画は各グループからアプリを通して提出させ教員が動画を繋ぎ合わせ、youtubeから著作権フリーの音楽をダウンロードして音楽を付けて完成させ翌週の授業の冒頭で鑑賞した。

4. まとめ

ハリガネ芯ちゃんは13年前に開発した教材であるが、ICT器機の活用によって新たに息を吹き返した感がある。活動は極めてアナログでありながら、デジタル器機を活用することでその学びは広がっていく。とてもシンプルな教材なので、大学生も単時間で興味も持って取り組みことができた。ICT器機は絵の具や筆のような存在である。ハリガネ芯ちゃんを使った題材はスマホでも簡単に取り組める題材である。操作が簡単であるからこそ、発想や構想の能力、知識や技能、鑑賞の能力を十分に働かせられる時間となる。そして教員は学生が発揮している能力を言葉にして学生に伝え、確認させ、美術で育む資質・能力の実感的理解を図ることができる。

註1 https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_kyoikujinzai01-000012386-7.pdf



ハリガネ芯ちゃん教材



ハリガネ芯ちゃん動画

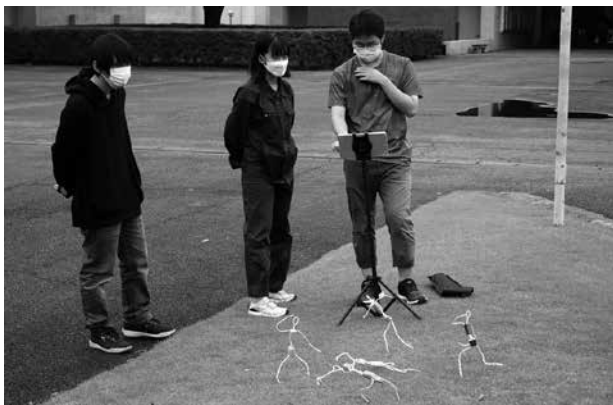


写真10 活動の様子



写真12 その場でアイデアを出してストーリーを作る



写真11 撮影のようす



写真13 場所から発想を広げて

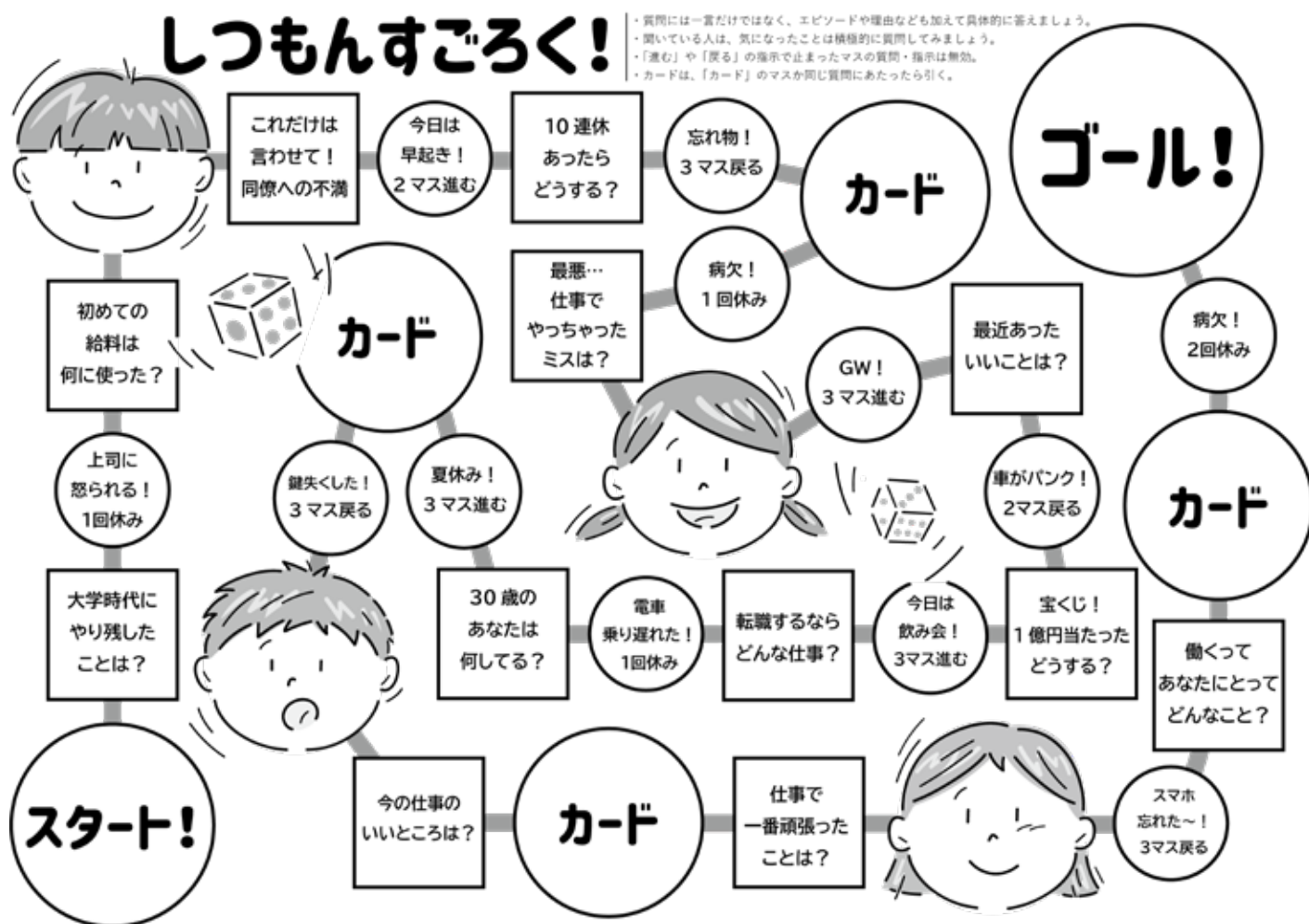


図1 筆者が作成した「しつもんすごろく」

「しつもんすごろく」を用いた活動の可能性

長野県立大学 宮城 正作

1. はじめに

本稿では、「しつもんすごろく」を用いた実践について報告する。「しつもんすごろく」とは、図1のように、すごろくのマスに書かれた質問に答えたり、指示に従ったりしながら進めていくすごろくのことだ。このすごろくの利点は、マスに書かれている質問や指示を変えるだけで、多様な年代や目的に合わせた活動が行える点である。図1のすごろくは、筆者が作成したものだが、この教材の基となったものは、日本キャリア開発協会(NPO 法人)によって作成された「人生すごろく『金の糸』～golden thread～」というキャリア教育のために作られた教材である。本稿の「しつもんすごろく」は、この教材に着想を

得て、より簡易的に取り組めるように作成したものだ。

現時点では、筆者が作成したすごろくを、授業の受講者やワークショップの参加者が使用するという段階にとどまっているが、将来的には、受講者や参加者が「しつもんすごろく」を自ら作成し、活用するということを目指している。本稿では、自作の「しつもんすごろく」の課題を把握するために行ったこれまでの実践を報告する。

2. ルール

基本的なルールは一般的なすごろくと同じで、さいころを振って出た目の数だけ進み、止まったマス

の指示に従うというものである。「しつもんすごろく」の最大の特徴は、マスに書かれている内容が「1回休み」などの指示だけではなく、対象者に合わせた質問がある点だ。たとえば、図1の「しつもんすごろく」は、筆者の勤務校（保育者養成校）の卒業生を対象としたホームカミングデイ用に作成したもので、「同僚への不満」や「今の仕事のいいところ」など、卒業生同士で「おしゃべりしたいこと」を質問内容として設定した。なお、質問を設定する場合は、「好きな色は？」などの端的に答えられる質問ではなく、エピソードで答えたり、理由を付け加えて答えたりするような質問を設定したほうがよい。

このすごろくのもう1つの特徴として、「カード」というマスが挙げられる。カードにも、マスと同じような質問や指示が書かれているが（写真1）、「カードを引く」という行為や、何が書かれているのかわからないという状況が、この活動をより活発なものにすることができる。また、カードの活用法として、答えたくない質問のマスに止まったときに、その質問に答える代わりにカードを引いて、カードの質問や指示に応じるという用い方もある。

3. これまでの実践と今後想定される活動

本稿の「しつもんすごろく」を使用した実践は、卒業生を対象としたホームカミングデイにおける実践（写真2・3）、大学1年生を対象とした自己紹介や親睦を目的とした実践、家族を対象としたワークショップにおける実践（写真4）の3つである。とくに、卒業生を対象とした実践では、参加者が友人同士であることや、社会人1年目の卒業生が対象であったことから、想定以上に会話が盛り上がり、教材としての可能性を感じることができた。

「しつもんすごろく」は、図1のようなマスさえ作ってしまえば、質問を変えることで様々な活動で使用することができる。この教材の使用が今後有効だと考える場面は、保育者養成校における実習の振り返りや、保育士のキャリアアップ研修、地域住民の交流会や児童館・児童センターなどでの活用である。最終的には、受講者や参加者が使用するだけでなく、作成することも視野に入れているので、そのようなノウハウを蓄積するためにも、実践を重ねていきたい。



写真1 カード



写真2 実際の活動の様子①



写真3 実際の活動の様子②

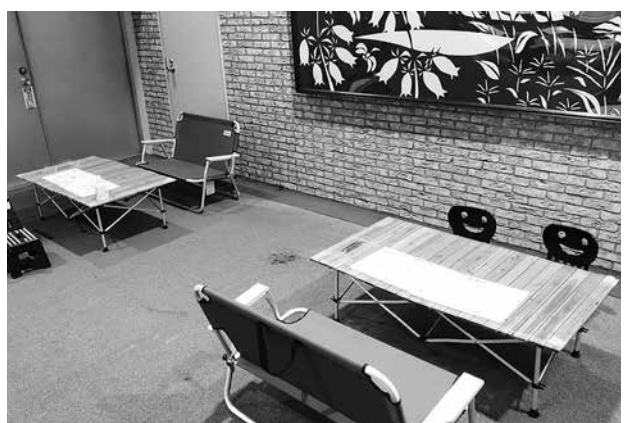


写真4 親子を対象としたワークショップ

教育現場でのスタンピング技法の活用

植草学園大学 森高光広

1. はじめに

筆者は公立中学校で22年、国立大学付属小学校で5年、現職14年の教員経験を持つ。大学教員となってからも、小学校や保育園などの教育現場で子どもに図画工作科の授業実践や造形ワークショップ等を毎年継続して行ってきた。長年、様々な教育現場で指導実践を続けたが、絵の具や絵画に苦手意識を持つ子どもや大学生は多い。その要因として考えられることは、主に水彩絵の具を使用する絵画制作での失敗経験に起因する例が今も変わらず多い。失敗経験から自分の表現に自信を失い、図画工作や美術という教科自体の意欲を失う場合もある。学校現場でも、様々な努力や工夫を重ねていることも理解しているが、大学教員となり様々な教員の研修会で講師として講演や実技研修をする際も、教員自身の絵画や絵の具に対する苦手意識が根強くあることは気になっていた。個々の子どもが様々な表現に意欲的に取り組めて、自分なりの工夫や表現ができる喜びを味わえるためには、具体的な指導の手立てや支援が必要である。それは絵の具を扱う表現に関しても同様である。以上について、過去に中学校美術教諭として、また、小学校図画工作科担当教諭として様々な授業実践の中で探り、大学教員となっても継続して研究してきた。本稿は、「スタンピング技法」に関する実践を主として、子どもが技法を獲得し、楽しく自分なりの表現に結びつけるために、発達段階に即した指導の手立てを以下にまとめる。

2. 問題点について

2-1 絵の具の苦手意識について

コロナ禍の元、2年間大学外での授業実践は途切れたが、2022年度は再び複数の小学校や保育

園現場で様々な実践が出来た。複数の小学校で、全学年の複数学級で絵の具を扱う授業を実践した際、例えば5年生の子どもに絵の具の得手・不得手を問うと、どちらでもないは2%で、得意と答えた子どもは1%に満たなかった。理由を尋ねると絵画経験からの失敗を挙げる者がほぼ全員だった。これは前回学習指導要領改訂前に何度も授業時に調べた結果とあまり違いはない。今も大学生に対して授業時に尋ねるが、絵の具の表現に自信を持つ学生は少なく(参照;表1~4)、教員研修の場で調査しても同様の結果が多い。共通していることは、透明水彩技法による絵画表現の失敗経験に基づくことが多い。そのため絵の具を扱うこと全般に苦手意識を持つに至ることが少なくない。小学校教員を目指す学生が図工は苦手と語る者が少なくないのは本学だけではない。以前国立大の学生に調査した際も、8割近くの学生から絵画指導に不安を抱く理由として同様の回答があった。以上を踏まえて、様々な実践を通してよりよい指導法について探ってきた。本稿は、小学校低学年や就学前の園児などに有効と考える、水を使用しない不透明水彩技法を主とした技法とその有効な手立てについて、スタンピング技法を踏まえて以下にまとめる。

尚、スタンピング技法に特化した著作や研究は極めて少なく、筆者のオリジナル題材と考える内容も多い。

2-2 スタンピングとは

スタンピングとは、身近なものに絵の具をつけてはんこのように紙に押しつける技法である。身近なもの材質や跡としてつく形、使用する紙材料に絵の具を押しつける際の力の入れ方や押しつけ方によって、様々な表現が出来、個々の工夫も可能となる。幼児でも支援をすれば表現できる技法でもある。不透明水彩技法の考えをもとに、押しつけるものの材

表1～4 クラス A34名、クラス B32名回答(複数回答可)

表1 あなたは水彩絵の具で絵を描くことは(2021年)

とても好き	13.3
好き	38.3
どちらでもない	18.3
あまり好きではない	16.7
嫌い	13.3

表2 あなたは水彩絵の具で絵を描くことは(2021年)

とても得意	3.4
得意	8.3
どちらでもない	25
あまり得意ではない	35
不得意	28.3

表3 あなたは水彩絵の具で絵を描くことは(2022年)

とても好き	8.7
好き	21.7
どちらでもない	17.4
あまり好きではない	21.7
嫌い	30.4

表4 あなたは水彩絵の具で絵を描くことは(2022年)

得意	0
やや得意	17.4
どちらでもない	13
あまり得意ではない	21.7
不得意	47.8

質の違い、跡のつけ方の違いによって表現の効果が違う。また、塗り重ねたり、色画用紙に絵の具を押しつけて紙の地色と重ねたり、型などの覆いとなるものやその置き方を工夫することで、多様な表現が可能な魅力的な技法の一つである。現在では技法としてはよく知られ、小学校の教科書に扱われたり、授業などでも使われたりすることがある。しかし、学校現場での事例をみると、十分に活用されている例は少ないと考える。単発的な技法遊びや絵画で大きな画面の背景などを埋めるために使用される例をコンクール等でも多く目にする。スタンピング技法の持つ良さが十分に発揮されていない事例も過去に多々あった。

筆者はスパッタリング技法については過去に少しまとめたことがある。¹ 中学校でスパッタリング技法の実践を続け、様々な成果を得たが、このスタンピング技法については、その実践に続くものである。

スパッタリング技法は、小学校でも実践したが、特に低学年の手指の発達の関係でスパッタリング技法を活用しづらく、効果も充分には出来ないことが多い。別の技法はないかと探った結果、様々な発達の段階の子どもでも効果があるスタンピング技法に行き着き、具体的な手立てを探ってきた。

実践や研究の一部は紹介もしている。² 以来、研究を継続してきた。単に表現上のアクセントとして使うだけでなく、この技法を活用して、単独の題材としても成り立たないか、試行錯誤を重ねてきた。その結果、小学生から大学生まで、誰もが真剣に取り組める、魅力ある技法の一つとして活用できることがわかった。最近では保育士を目指す学生の授業や保育現場の造形教室でも活用している。様々な実践を通して、発達の段階に応じたねらいや援助によって、さらに効果が増すことも明らかとなった。詳細を以下に述べる。

たとえば、技法遊びの手順は次の通りである。
 ・不透明水彩技法のできる濃さの単色を用意(水はほとんど使用しない。基本色(赤、青、黄、白)のみで行わせる場合と小学校高学年等は明確な色を自分でつくらせる場合がある。ただし使用する折り紙や色画用紙の色には留意させる。ためし紙に絵の具をつけて押しつけさせて、使用するものの跡を確認させる。低学年など、絵の具をつけすぎることがあるので、たたいて跡がわかるように別紙で絵の具の調整をさせる。必ず手拭きを濡らして汚れた場合にこまめに使用させる。スタンピングを行う画用紙とは別に、型紙を活用する場合もある。主に小学校中学年以上である。型紙は画用紙をハサミで切る場合は、切り口はセロテープで留めるなど補強して使わせる。型紙を使い(白抜きの理解)、置き方を変え使用する色を変えてスタンピングする(重色の理解)。理解が進んだら単色ではなく、白を混ぜて使わせる等、応用の例を示す。保育現場の場合、型紙は事前に指導者が用意することで対応してきた。低学年は指や軍手でスタンピング、という授業も行ったが、どの子どもも楽しく取り組んでいた。その後試したいものについて個々発表させ、次時に持参させて次に展開したこともあった。試す楽しさをしっかりと伝え、何か思いついた際に、まず試すように促した。小さな作品でも相互鑑賞して、他の工夫や効果をみて今後の参考にさせた。

おおよそ、以上のような流れで大学の授業でも

行い、基本的な技法の理解をさせた。学校現場で2時間展開の場合は、最初の時間にいろいろと試させ、印刷用紙に不透明技法による重色など、スタンプングを十分楽しませてから次の時間に工夫させた。技法遊びでは、各自の用意した物を使ってスタンプングを行った。子どもはこちらの想定外のものまで持ち込み、各自絵の具をつけて跡を確かめていた。短時間の制作だが、この技法遊びで、子どもはスタンプングを理解し、絵の具の使い方、型紙の使い方などの基本的な技法を身につけることができる。小学校4年生の実践では、身近なものに絵の具をつけて押しつけるだけでなく、転がす、たたきつける等の様々な試みがあった。例えば、表面の凹凸の激しいボールに絵の具の色を塗り分ける等、遊び感覚の子どもの試行があった。スタンプングの技法活用は多様であるが、あくまでも基本的なことだけを実際に手を動かして身につけさせ、それ以上もやり方があることやいろいろな工夫も可能であることを示唆する。それによって、子どもは実際に制作する際に、自分で工夫した使い方を試みることが増える。その結果、子どものスタンプングに対する興味・関心と制作や表現に対する意欲は増し、スタンプング技法の基本の獲得とともに応用への意欲にもつながる。この経験の後の子どもの作品を見ると、混色や型紙の使い方等、技法遊びを踏まえて各自工夫していることが多々あった。

大学の授業でも毎年行ったが、子どもの活動にみられる柔軟性のある活用はやや少ない傾向がある。身近にある木の葉や石、綿やスポンジの使用が多く、応用例までにはなかなか至らない。これは時間的な制約によることも考えられる。コロナ禍で制約の多い時期に自宅制作させた年度ほどの学生も時間をかけて型紙を作り、丁寧に楽しんで制作した様子が提出画像からもうかがえた。対面授業となってその点は弱くなっている。それでも研究室所属学生などは、身近なものであっても個々工夫をしていた。(写真1 参照)

小学校の実践では全学年で実践してきた。保育園では5歳児を中心に実践を重ねている。型紙の活用については、低学年や園児も可能であるが、保育士が事前に作成し用意したり、当該造形活動の事前に参加学生に複数型紙を作成させたり等は必要となった。園での活用に関しては、個々の子どもの制作実践から共同制作など様々な活動で試して



写真1 歯ブラシの活用例 研究室所属学生例



写真2 5歳児共同制作 型紙は学生 模造紙2枚大

みた。(写真2 参照)

保育園での活動は事前に型紙を複数作成したものを当日持参し、スポンジで園児にスタンプングさせていき、共同で制作を行った。(写真2 参照) 1つの園では、子どもが自分の制作したところを個々が持ち帰りたいという意向であったため、一定期間掲示した後で、個々の園児の作品の周りを切り取り台紙に貼って返却して喜ばれている。

小学校1年生の実践は、対象の小学校によって内容も多少違う。指絵との組み合わせによる制作、ペットボトルキャップを使用した制作など、各学校の実態や事前の活動に合わせて行っている。その都度楽しく制作ができていた。小学校3年以上はスポンジによるスタンプングを主として、小学校高学年では型紙を各自に作らせて活用させた。実践の中で、内容は異なるが、幼児や低学年であっても手立ての工夫によって、楽しく取り組み、個々の工夫もできることが明確となった。多少複雑な内容は、小学校高学年からが多いが、条件や指導の手立てによってはさらに発展的な内容も考えられる。園児や低学年等は、まだ自分の構想通りの表現ができ



写真3 綿棒の活用例 造形教室用学生試作例

ない子どもも当然見られるが、手を動かして工夫する中で、最後は達成感を味わえた様子も多くみられた。どの年齢の子どもも授業後に「楽しかった」という感想が多くあり、校長なども喜んでいた。

園での実践で補助に入った保育士からも、当初不安も持ったようだが、いざ活動させると子どもの集中度に驚いていた。

3. 大学での実践

1) 保育士向け授業から

大学の保育士向けの授業等では毎年実践しているが、次回絵の具を使用することを伝えると不安を示す学生も少なくない。それでも制作後の感想を見るとスタンピング技法はどの学生も楽しく学んでいることが伝わる。過去の経験を聞くと、幼児期に野菜や葉っぱでのスタンピング経験が多く、型紙の使用はほとんど経験がない。具体的には、野菜の切り口に絵の具をつける、落ち葉スタンプ、紙や指でスタンプ遊びの経験が多く、小学校1年生の授業時に尋ねた際も就学前に同様の経験を答える児童が多かったことから、大学生が子どもの頃と今もそ

う変わらないと考えられる。

○授業後の感想から

- ・大学生でもスタンピングの技法を行って楽しめることがわかった。子どもの頃は、スタンプすることや絵の具を使うことが楽しかったが、大学生になって行くと、子どもの頃と同様などところもあるが、丁寧に作り工夫することがより楽しいと感じた。保育を学び、子どもの目線や、保育者としてどのように行うのか考えながら、実際にスタンピング技法を行い、将来にも役立つと思った。
- ・絵の具は筆を使うという概念が多いと思うが、様々な材料を使いスタンピングすることにより、柄や跡がその素材のまま写し出されるのがおもしろいと感じた。また、型をとっておくことで子どもでも簡単に表現できる点が良いと感じ、色の組み合わせも自分で考えて行うのが楽しかった。
- ・制作がとても簡単で洗い物が少なく、準備するものもそれほどないので、すぐに取り組めることによさを感じた。身近なもの（葉っぱ、野菜など）に親しみを覚える良い機会にもなると思う。

2) 専門ゼミナールでの授業から

研究室所属学生と対外的な活動を継続して行った。その授業で活動に関係する内容の演習も行っており、スタンピング技法の活用も何度も行ってきた。（写真4～8 参照）研究室所属学生は特に造形

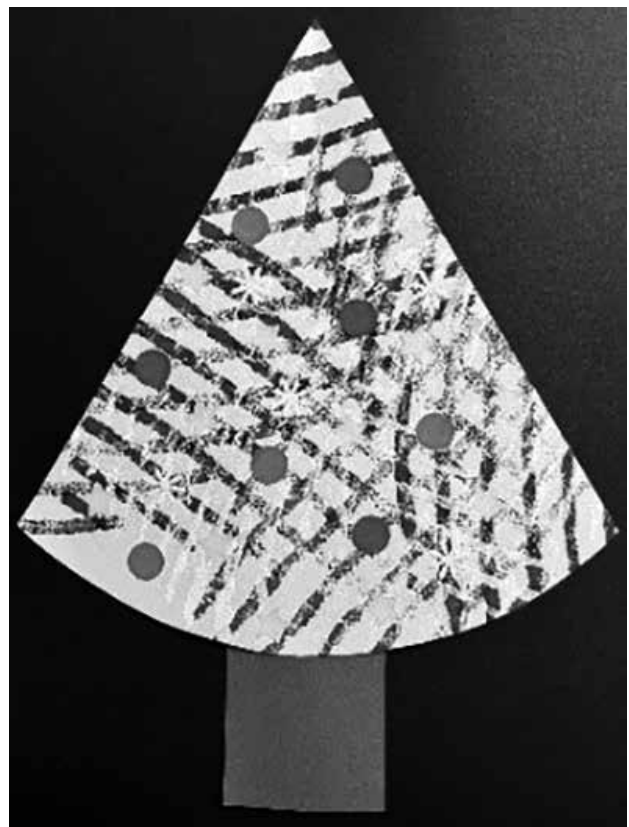


写真4 綿棒の活用例 造形教室用学生試作例



写真5 綿棒の活用例 造形教室用学生試作例

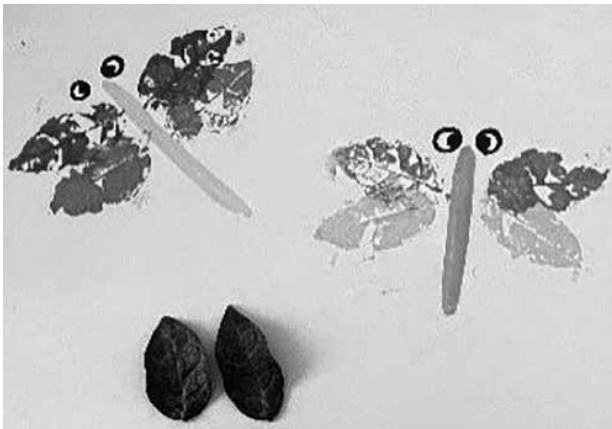


写真6 歯ブラシの活用例 研究室所属学生例



写真7 落ち葉の活用例 研究室所属学生例

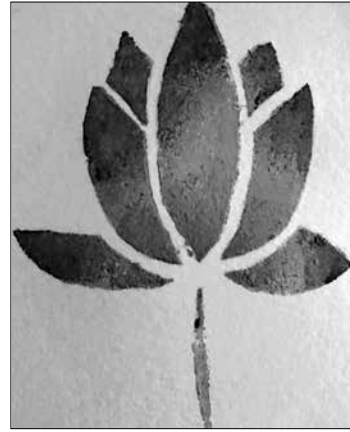


写真8 型紙活用例

や美術を得意とする者が多いわけではなく、絵画などは苦手とする学生も少なくない。無理のない程度に保育現場の活用を常に意識して個々様々に工夫して制作させている。意欲的に取り組めていることは感想からもそれが伝わる。

◎研究室所属学生の感想

- ・使う素材や色の重なりによって違う形になるのがおもしろいと感じた。また力入れ方によって形が変わったり、型を使うなどの活用法があるのも制作の幅が広がると感じた。
- ・身近にあるものを楽しくスタンプし、スタンピングしたものからいかに発想を伸ばして形にするかがとても楽しかった。
- ・市販のスタンプとは違い、身近な物を活用してスタンプするのはとてもおもしろいと感じた。絵の具をつけてスタンピングし、何かの場面や物に見立てられることに楽しさを感じた。
- ・今までの学校生活の中でスタンピングを行ったことが少なかったため、身近な材料を使って作品を生み出すことが出来て、とても楽しいと感じた。
- ・スポンジで押すだけだが、いろんな形になったりして、個性が出ておもしろいと思った。
- ・小中高ではスタンピング活動をあまりしたことがないので、身近にある材料を使って作品を作ることがとても楽しいと感じた。

4. まとめ

以上の継続した実践から、スタンピング技法の活用が発達の段階も踏まえ、各自の工夫や追求が可能な技法であることは明らかである。研修会などで、教員や保育士に示すと明日から活用できると最も喜ばれる技法の一つでもある。実践の際に重視したことは、技法の活用経験を踏まえて、画材としての絵の具やその技法に親しむ場の設定をしたことである。また、発達の段階に応じて、自分なりの表現の工夫、そして追求ができる場の設定や具体的な援助などについて考えさせる場を作ってきた。

具体的な手立てを以下に述べる。

スタンプ題材の実践にあたっては、子どもに失敗したと思わせないように、手立てについて考案した。例えば、以下のような手立てである。

- ・型紙は単純な型をまず使用し、使い方を工夫した型紙の活用を理解させる。
- ・低学年などは、発泡スチロールトレイなどに絵の具を出して薄いスポンジを入れ、簡易スタンプ台のようにして制作させる。
- ・スタンプする紙材料を複数種類用意して選択させる。(色画用紙の場合は数色用意)
- ・出来た作品は乾燥棚でしっかり乾かす。(園ではつるして乾かした)

時間上の制約もあり、以上のような内容は最初から授業内で出来ないの、事前準備をしっかりと行い、柔軟に対応できるようにした。

失敗したとその時に思われても、最終的に何とか工夫して完成させるように励まし、子どもが安心して取り組めるように心がけて指導した。基本、不透明水彩技法なので失敗と思われる箇所でも乾かして上から絵の具をたたくと充分修正可能である。また、製作用の紙の大きさを小さくするなど、制作時間の短縮化もできる。

また、実践に際して配慮したことは、以下である。

- ・子ども一人ひとりが興味・関心を持ち、自分の感じ方や考えを大切に、楽しく制作に取り組める場や手を動かして工夫が出来る題材の設定をする。
- ・制作の過程で、子どもが自分のとらえ方や発想により適した表現の方法や工夫を見出し、自信を持って表現するための手立てや支援の工夫をする。

様々な実践を通して、例えば子どもが少し「むずかしい」と感じるがあっても、「楽しい」と感じれば、「自分でもできそうだ」と、より「工夫」もしたいと考える。少しでも「試行錯誤」をして継続していくと、自分なりの「工夫」をみつける。その結果、「自分なりのこだわり」や「自分なりの表現」にも結びつき、制作後に達成感も得られることができる。経験を通して学ぶものも多く、その経験は他の制作活動の際にも役立つと考える。特に幼児期や小学校の時期は、なるべく多くの経験をして、素材や画材、技法の楽しさ、少し難しかったけどおもしろいという経験を多く積ませたり、実感できたりする機会を設けていくべきと考える。様々な経験の中で手を動かし、五感を駆使し、子どもが制作を通し

て学べることは少なくない。特に幼児期等にはその基盤となる興味や関心・意欲、意欲をしっかりと身につけさせたい。幼児期から小学校の時期への系統性も踏まえ、経験や学びの積み重ねが必要である。その結果、中学校や高校へと進み、また大人となっても、より自分なりの表現や工夫することにも意欲を持ち、積極的に取り組み、制作後の達成感も得られるのである。

以上述べたことは、今まで学生とともに実践を重ね、子どもの実際の姿から確認し続けてきたことである。意欲的な制作や活動の経験を通して、楽しく獲得した「技法」や「工夫」は子どもが表現をする際に、「意欲」や「こだわり」がより強くなると考える。スタンプ技法に限らず、自分なりのこだわりを持って絵の具を扱う場を今後も設けていければ、絵の具自体に対する苦手意識も減っていくことと考える。そのためには、絵の具に対する研究だけではなく、材料や紙材料の色彩、技法や活用方法等の工夫、また手を使う際の微妙な力加減なども関係する。まだまだ研究の途中である。今後も様々な子ども、大人の制作に関わり、実践を通して探りたいと考える。できる限り実践を続けて、次の世代に、何かヒントとなるものを少しでも伝えていきたいと考える。

謝辞

これまで多くの方々にお世話になりました。

関わってくださった学校や教育現場の関係者の方々や子どもたち、授業に参加した学生の皆様、森高研究室所属学生の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1; 森高光広. 実践報告「技法の獲得」が「自分なりの表現」に結びつくための実践について～スパッタリング技法を用いた小, 中学校での授業実践～日本美術教育学会学会誌「美術教育」NO.292. 日本美術教育学会. 2009年
- 2; 鈴木幹雄・佐藤昌彦、森高光広編著、森高光広・他(著)「表現教育にはそんなことができるのかー教師達のフレキシブルなアプローチに学ぶ」あいり出版、子どもたちの発想を生み出すもの9章. P81～97、2015年、2022年再版

森高研究室活動実践～幼・保専攻学生の学外活動の学び

植草学園大学 森高光広

1. はじめに

長年、研究室所属の幼・保専攻の学生と対外的な学びや活動を継続して行ってきた。年度により目的や内容も違うが、学生にとって卒業後も印象に残る活動となっている。コロナ禍で2年間できなかったが、2022年度は複数の保育園や小学校などで子どもの造形活動に学生とともに関わり、授業実践もしている。本稿では、2022年度での活動の代表的例を紹介するとともに、学生にとっての意義も踏まえ、過去の取り組みをも含めて今後の学外での学びのあり方について述べる。

2. 問題点について

これまで大学では14年間小学校専攻に所属していたが、研究室所属学生はほぼ幼・保専攻の学生である。優秀な成績にも関わらず、早々に離職する学生も多くいた。保育や幼稚園現場の現状にも課題を感じつつ、目の前の学生にも不足する点はないか考えるようになった。学んだ造形的な内容が園によっては任せてもらえなかったり、周りから理解されなかったなどの事例もある。対人関係に疲れ果てて離職する例も少なくない。また、大学生の日常は自宅とバイト先、大学、ボランティア先を行き来することが多く、たまに他の所へ行く程度で意外と行動範囲が狭い。本大学に通う学生は同じ県下でも遠方から通う者や他県から通う学生も多く、片道2時間程度通学にかかる学生も珍しくないため、なおさらである。就職先もしっかりと見て選択させる必要もある。そのため、学内のみならず、学外でも柔軟な学びの機会を設け、多様な視点も身につけさせる場も必要と感じたのである。見る目を育てることも重要である。卒業式で成績優秀のため賞を得た学生が半年持たず離職した時、所属研究室の学

びについて、造形的な学びだけにとどまらず、現場に進む前にもっと違う学びもできないか、改めて考えるようになったのである。

3. 実践から

これまで学外での学びの例として、以下の学外訪問の実践がある。

- ・美術館 (4)、博物館 (3)
- ・新聞社 (2社)、出版社 (6社)
- ・製紙工場
- ・折り紙工場
- ・アニメーション制作現場 (2回)
- ・観劇 (5回)

美術館、博物館については、単に鑑賞だけでなく、子どもが実際に館を訪れた際と同様の説明を学芸員から受けた。大手新聞社では、家庭欄担当の記者から話を伺い、複数の出版社では、編集者から絵本ができるまでの過程を原画も見ながら編集者目線で丁寧に説明していただいた。アニメーション制作現場では、最新のデジタル制作のアニメーション制作現場を目の当たりとした。

また、学外の方を招いた例としては、以下がある。

- ・絵本作家 (3名)
- ・イラストレーター
- ・紙造形作家
- ・人形劇団 (3劇団)

コロナで招くことができない時期は、遠隔で以下の方々にワークショップをお願いした。

- ・劇団の演出家
- ・漫画家
- 人形劇団員 (2回)

実際に来ていただいた場合も、遠隔の場合も、学生は熱心に取り組み、積極的に質問した。学ぶ意欲は高いことを再認識した。また、学生にとって、

様々な場で働く社会人やその道のプロの方のお話を伺う機会は有意義であった。社会に出た時に、直接関わる保護者は様々な職業に就いている。飲食店などのアルバイトをしている学生が多く、様々な人々と関わる経験はあると自負もするが、じっくりその方の話を聞く経験は乏しく、ネット上の情報に終始する学生にとっては、直接話を伺う機会での学びも多いと考える。実際、ヨシタケシンスケのアイデアスケッチや手塚治虫の原画を直接見たり、劇の舞台美術に驚いたり、プロの技術に圧倒されたり、その都度学生の学びは大きかった。

3-1

2022年度は、学生とともに複数の活動実践をした。以下代表例を具体的に以下に述べる。

3-1-1

ここでは、保育校現場での活動を示す。以下である。

幼稚園や保育園に行き、造形教室等のワークショップ的活動はコロナ禍となる前は毎年行っていた。主たる内容は、以下である。

- 1) 幼・小または保・小合同造形活動（神奈川、東京、千葉など）
- 2) 幼稚園の造形ワークショップ
- 3) 保育園の造形ワークショップ

本年度は以下を行った。

教育現場造形ワークショップ活動

- ① 附属幼稚園 + 近隣小学校 6月
- ② A企業系列保育園 5歳児 8月
- ③ B企業系列園7園、1歳児～5歳児 6月～2月
- ④ C幼稚園造形教室 5歳児33人 2月

内容は、1.2歳児から小学生までを対象にしたり、1年や2年と園児が協働で行う等、様々である。筆者主導のものもあれば、企画や事前準備まで学生主導のものもある。ここでは、両方の例を1つずつ紹介する。

(1) 筆者主導例

○園の造形教室

1.2歳児に色のついた紙や新聞紙を丸めたりちぎらせて、協働制作として一つの大きな作品の制作をした。

写真1は魚などの形に学生が手早く糊を塗りつけ、子どもに上からちぎった紙をはりつけさせた。写真2は大きなビニール袋に丸めた紙を詰めさせて

学生が形を整え、目鼻などつけて仕上げた。どちらも完成後は子どもたちが群がり興味を持って見に来る様子があった。園内の人目の集まるところに掲示してもらい、来演者や保護者にも見てもらえるようにし、好評を博した。

(2) 学生企画・準備・運営の例

卒業研究にちぎり絵をテーマにした学生の企画内容を他の学生も手伝い、準備して当日2歳園児に制作させた。写真3のカタツムリの柄は学生の描いたものを印刷して、にじみ技法を卒業研究にした学生が仕上げた、にじみができた柔らかい紙を複数枚用意させた。2歳児に紙をちぎらせ、のりをつけたかたつむりの殻の中にはりつけさせた。当初、



写真1 筆者主導制作例1



写真2 筆者主導制作例2

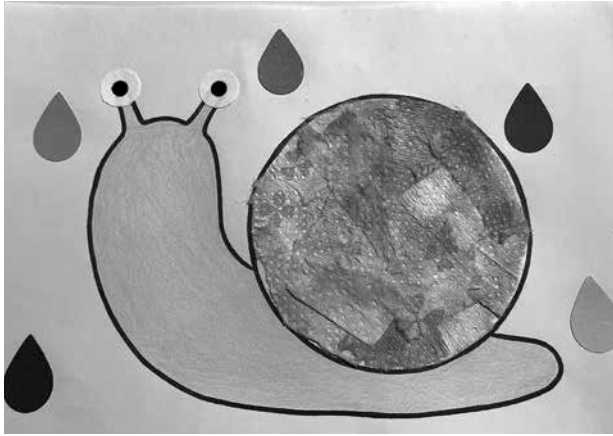


写真3 学生主導例

園の保育士は集中できるか、のりづけが個々でできるか不安をもっていたが、当日は特に支障なくできていた。最後に学生の用意した目玉を貼らせて完成させたが、子どもたちはつるして乾燥させていた作品に興味深く見入っていた。学生が各園に行くのにやはり片道2時間、時として3時間要することもあり、交通費も出すことが出来ず負担となる。そこで学生の卒業研究に関わる内容の制作に取り組み、学生自身の卒業研究にも役立てることが出来る配慮をしている。全ての活動がそうはならないが、学生の参加率は高かった。直接、子どもと触れあうことから学ぶことも多いからと考える。

3-1-2

ここでは、小学校現場での活動を示す。以下である。

○A 市立B小学校創立 150 周年記念事業補助

- ・式典会場(市民文化会館)入退場用の塔作成
- ・当日の来賓向け記念品作成
- ・2、5 学年の児童全学級の授業補助

◎目的; 創立 150 周年を迎えるB小学校の記念式典行事に向けて、小学校児童の記念式典用制作物の補助を行う。

・限られた授業時間を有効に使い、効率良く作成を進めるために補助・支援をする。

◎留意したこと

・こちらの発想の押しつけではなく、制作物には学校の校長、教員の意向や意図に沿ったものとなる配慮を加味する。

・小学校児童にとって貴重な授業時間を使うという意識を学生も持ち、45 分間の授業時間を有効に使うことに留意する。

- ・制作物が事前に学生の持つイメージと違う内容

となることは当然であるが、その点にはこだわらないこととした。

・卒業研究のために児童へのアンケート調査を校長の許可のもと行う。その際は、児童や小学校の活動に邪魔にならない程度となるように充分留意し実施させる。

※日程

1. 8 / 24 事前 学生不参加
1. 9 / 12 学生参加
2. 10 / 31 学生参加

8月に式典会場の入り口の装飾用の塔の基礎を2つ制作し、9月に低学年児童の装飾活動の援助をする。

また、5年の各学級で記念品用ポップ・アップカードの基本的な構造の理解と制作のため、飾り付け方法の例示するため、学生と飾りつけ方法について、学生が3人一組で説明し試作例を具体的に示す。

※手順

1) 事前; 8 / 24; 教員と筆者で入り口の塔 2 本の基礎となる部分を制作した。

2) 内容

塔のおよその飾りつけのイメージは、小学校の意向も聞いて正面と中は蝶の群舞。反対正面と外は樹木としたが、制作の過程で日程的なこともあって内容を以下に変更した。

・2年生児童は、学生の制作した型の形に沿って色紙など切って各自で色を塗り、指定された側面付近(各学級ごとに分けた)にのりで貼りつける。型紙の大きさは以下の各種を事前に制作し、データを送って印刷した。

- ・10センチ×10センチ大
- ・5センチ×5センチ



写真4 入り口用の2つ棟 基礎部分の制作

・2センチ×2センチ

☆形;蝶、花、葉、鳥 輪郭線を描いたものを印刷して配布した。

3)9/12の実施内容

3.4校時

参加学生4年6名

○制作1

対象;2年4学級;1学級ごとに移動(20分ずつ)時間でローテーション。45分で2学級終了予定。

児童は色鉛筆や色ペンで彩色した飾りを各自のりで貼りつけた。(貼りつける形は学級ごとに変えた)樹木は色模造紙を活用し、樹木の幹や枝らしくみえるようにゆがめてボンドで貼りつけた。

○制作2

5校時

対象;5年児童3学級同時展開

・ポップ・アップ・カードの基本構造の理解と仕組みの制作

- ・大きめの見本または印刷物で手順を指示する。
- ・構造を説明し、基本構造を大まかに制作し、装飾を考えさせる。
- ・飾り付けの際の手本としていくつかの例を示す。

以下の活用例を具体的に示した。

クラフトパンチ、ちぎり絵、紙バネ、にじみ、透明の色セロハン等。

4)10/31

参加学生4年6名

内容;ポップ・アップ・カードの仕上がり状況を確認し、のりつけが弱くはがれそうなどところの補修など。

ポップ・アップ・カードで児童がどの飾り付け方法を使用したかの調査を行う。これは各学生の卒

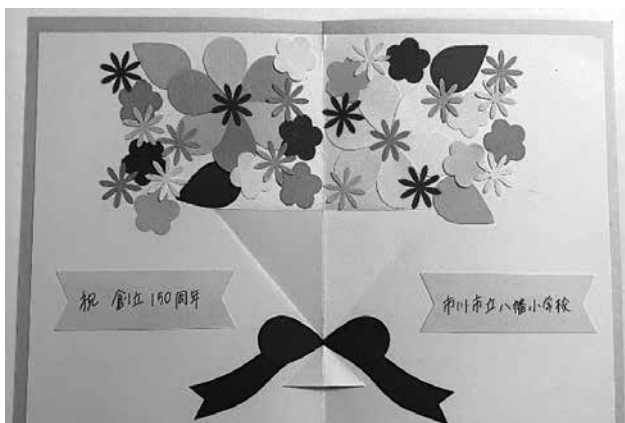


写真5 所属研究室学生試作のポップ・アップ・カード例

業研究に関わる内容である。

入り口の塔に児童が貼りつけたものが剥がれている場合の補修とスタンプや色づけの追加をして仕上げる。

○参加学生の感想

初めて小学生との製作活動でした。とても緊張していましたが、楽しく活動できました。幼児と比べて、児童はとても理解力が高く、こちらの趣旨も理解して活動を進行できるので、やりやすく思いました。

○2年生との門の制作について

●良かった点

・最終的にはカラフルな仕上がりになり、華やか



写真6 入り口装飾用塔の児童との制作の様子



写真7 入り口装飾用塔の完成

な印象になった。

・貼る位置をこちらから予め伝えておくことで、貼りムラがなく適度な間隔で貼ることができた。

・木を立体的に見せるために、先生の提案した、クシャクシャにした紙を入れるという技法はとても良い方法だと感じた。

●反省点

・門に貼る飾りつけの位置を予め示す等、事前に共通理解をしておく必要があった。

○5年生とのポップ・アップカード制作

●良かった点

・全体的に事前の試作とは別に、大きいサイズの試作と完成品と同じサイズの試作を用意したため、子どもはよりいろいろな装飾やアレンジの方法を理解出来たと感じた。

・作業を進める際は、一人ひとりの状況を把握するため、机間巡視することで、全体的に同じ進行で制作することが出来た。

●反省点

・説明する順番が交互となったので、より予め順序だてて準備しておく必要があった。

・2人で同時に説明をしたり、途中から説明する学生が交代したことは改善の必要があった。

4. 成果と課題について

学外活動は、14年間の大学教員生活で多く実践してきた。様々なプロの方と接する機会は、社会に出てもなかなか行えないことでもあり、学生にとっても新鮮で、学びも多い。園や幼稚園の造形教室の実践は、実習やボランティアでは見えない保育士や幼稚園教諭の働きや動きに触れることも出来た。例えば、4歳児を相手に造形活動を実践している際に、3歳児の活動を保育士が実践している場や5歳児に支援している場を目の当たりにすることもある。実習では自分のことで精一杯であったが、保護者と園長とのやりとりや掲示物などの環境も客観的にみる機会もある。そういった多様な見方が出来る経験を積むことは、就活の際に見学に行く際などで選択する観点も増えることとなる。また、園などの造形活動は、学生に企画・準備・実践の主導させることが主だったため、実践を踏まえて子どもから学ぶことも多い。予想外の事態に何度か遭遇し、柔軟に対応するなど、経験の積み重ねがあつてこそ対応もできた。着実に実践力が身につけられていく

様子は多々あった。

小学校現場での実践は、さらに学生にとって緊張感の増す内容だった。その分、事前や企画段階でのこちらの支援も多かったが、経験がないことが返って学びにもつながっていたと考える。最初、自分よりも背の高い小学校6年生に驚いたり、幼児と違い言葉の指示で的確に動く様子に感嘆していたが、準備や指示によって内容に大きな変化があることを知り、より責任感も持って取り組めた。小学校教員から、学生の子どもへの対応にこんな言葉をかけられたことが印象に残っている。

「学生の子ども目線の対応や暖かい言葉がけに私も学ばせていただいています」

絵本を出版する会社で「赤ちゃん向け絵本」を編集者がどのように企画し意図的に制作しているか、漫画家の色を塗る速度の早さに感嘆するなど、多様な学びが出来た。就職後の離職者は以前よりやや少なくなり、5年以上勤務を続ける者も増えてきた。直接的な関わりはないかも知れないが、大学外での多様で柔軟な学びは、少しは学生にとっても役立つのではないかと考える。

学生に活動事後の振り返りを書かせた。その一例を示す。

○保育園での活動

・実際に園に行き、造形教室を行えるという経験はとても貴重でした。事前に試作を行い、援助を考えたり、実際に園児に対して製作活動を行えたことで、良かった点だけでなく改善点も見つけることができました。また実際に保育現場に入れることで、保育者の声かけや子どもの反応を直に見ることができ、多くの学びが得られました。

・実際に現場に行き造形教室をすることで、子どもたちの様子を実感することができました。ボランティアでは様子を見たり関わることができませんが、造形教室では、保育者のように関わるので、構成を考えたり反応をよく見たりと、その場でしかできないことができました。

・制作活動をする中で子どもに話しかけて進めることで、一緒に楽しむことができました。自分達が造形教室をさまざまな所で行わせていただいたことで、改善点を踏まえて次に繋げることもできたので良かったです。

・園によって環境構成の違いや時間配分などが大きく違うのだと、複数園でボランティアをして感しま

した。また、園児の姿も園ごとに違うため自分に合った園を探すことが大事なのだ実感しました。

- ・子どもの発達について理解を深めることができました。同じ4歳児、5歳児でも月例によって発達に大きな差が出ることや、どうしたらインクルーシブな保育ができるかを考えることができました。また、保育士の雰囲気も園によって異なり、元気でパワフルな先生が多い保育園だと、園児たちも外で遊ぶことが大好きになったり、虫や生き物の知識が深い先生だと子どももよく虫を観察している事例があったので、自分がどのような保育士になりたいかをよく考えることができました。

- ・実習や自分のボランティア先とは違い、造形を中心に子どもたちと関わることができ、幼児の発達を感じながら作業を行うことができました。ワークショップでは、子どもたちに様々な種類の活動をしてもらい、この活動がこんなにスムーズに進められるのかと感ずる場面も多々ありました。実際に子どもを通して行わなければわからないこともあり、とても学びになりました。

○小学校での活動

- ・これまでの保育現場での経験とは異なり、言葉での意思疎通が取りやすかったり、園児と手指の発達の違いが印象的でした。小学生が対象の場合、幼児への話し方と違うと思っていましたが、実際に話してみると、具体的に伝えることや制作例を提示してから一工程ずつ進めるという点では同じなのだと思ふことができました。

- ・小学生と関わる機会は少なかつたため、園児との違いや様子を見ることができるところがよかつたと思います。

- ・保育現場とは違つた声の掛け方や、伝え方を学ぶことができました。注意点などを一度伝えると、そこに注意して活動を進めていく姿が見られたので、保育現場との違いを見つけることもできました。

- ・自分が実習などで関わつてきた幼児とは違い、出来ることの幅が広がるため、手先の器用さなどに驚くことが多くありました。また、小学生からもたくさん関わりに来てくれたり、ととても学びの深い活動にすることが出来たと思います。

- ・小学生の大人のような言動に驚きました。今までは幼児と関わるが多く、これできるかな?と制作活動を考えていましたが、小学生はこんなことやもあんなこともできる!と思ひ制作できる難易度

の高さに感動しました。また、先生との関わり方から幼児と児童では圧倒的に違うということも学びました。子どもからのレスポンスもしっかりと帰ってくるので、より深い対話ができたと思います。

- ・小学生との関わり感じたことは、幼児に比べて言葉だけでも伝わりやすく、コミュニケーションが取りやすいことです。小学生は、私たちと関ることへの緊張もあつたのか私たちの話をよく聞いて、質問したことには的確に答えてくれました。入り口の塔の制作やメッセージカードの造形では、自分の思い(貼りたい場所・したいこと)は伝えつつも、基本のルールや下準備をしっかり行つていたので、その部分が幼児との違いだなと感じました。

4. まとめ

学外でもより充実した学びを保証していくかが今後の課題であると思ふ。様々な場で柔軟に学ぶ機会をいかに具体的に設けていけるかは今後も試行が必要である。大学以外であっても今後も探つていきたいと思ふ。

謝辞

ご協力いただいた、園の皆様、子どもたち、小学校の先生方、児童の皆さん、所属研究室学生の皆様に深く感謝申し上げます。



学生が主体となる造形遊びの実践授業—アクティブ・ラーニングによる 保育構想とこども園での学びを経て—

大阪大谷大学 山本 将之

1. はじめに

学生が主体となって保育現場で造形遊びを実践する大阪大谷大学の授業（4回生配当科目「遊び指導実践演習」）の内容を紹介する。

2. 遊び指導実践演習の概要

「遊び指導実践演習」は本学幼児教育専攻の中でも、主として遊び文化コース4回生を対象とした授業であり、4年間の学びの集大成となる授業の一つである。当授業では履修している受講生（30人程度）を3グループに分け、対話的に造形遊びを考案するよう促し、模擬保育を経て保育現場で実践を行う。授業の流れは次の①-⑤の通りである。

①保育構想→②模擬保育→③動画による振り返り→④こども園での保育実践→⑤動画による振り返り。

本稿では、筆者が当授業を受け持った2021年度の実践の中から2例を選出して報告する。

3. 影の変化を楽しむ遊び

この保育は、グループで箱の中に異素材を構成し、その中に光を当てて影の変化を楽しむ遊びである。異素材は適当に集めるのではなく、曲げる、折る、捻る、透過する等の素材の特性を光の遊びに生かすことのできるものを選定している（紙コップ、薄紙、透明容器、モール、糸、テープの芯）。

対象は幼保連携型認定こども園の4歳児（約20

人)であり、この遊びのねらいは「影を見つける。影の変化を楽しむ。」である。

「保育の流れ」を次の① - ⑤の通りである。

①導入：ライトを上下左右前後に動かし、何が変化しているかを子どもたちに質問する。(写真1)

②活動：グループに分かれ、箱の中に異素材を構成する。当活動はボックスアートではないため、異素材の組み合わせを楽しむだけでなく、制作

物に光を当てるよう促すことを重視している。(写真2)

③活動：構成した異素材に光を当て、影の映り方を確認する。(写真3-7)

④鑑賞：他のグループが制作した箱に光を当てる。(写真8)

⑤まとめ：子どもの感想を聞き、遊びを経て得られた気づきや想いを全体に共有する。



写真1 導入の影クイズ



写真6 制作物に光を当てる様子



写真2 環境構成



写真7 ライトを紙コップに設置する方法を発見した様子



写真3 異素材を組み合わせる様子



写真8 鑑賞の様子



写真4 5 光の当たり方で影の形が変わることを発見している様子



写真9 記念写真をパシャリ

4. 異素材の組み合わせを楽しむ遊び

この保育は空間に異素材を組み合わせる構成遊びである。材料の操作はもちろん、保育者の願いとして材料の組み合わせによる見立て遊びへの発展を意図していることから、多様な組み合わせ方が可能な素材（紙コップ、キャップ、新聞紙、深皿、新聞紙）を準備した。

対象は幼保連携型認定こども園の4歳児（約20人）であり、この遊びのねらいは「操作と見立てを楽しむ」である。

「保育の流れ」を次の① - ③の通りである。

①導入：並べる・積む・丸める・破る・詰めるなど、各材料で楽しむことのできる操作を示しながら、できあがったものが何に見えるかを子どもたちに質問する。これにより遊び方（各材料の操作の方法と見立ての広がり）を視覚的に理解できるよう努めている。（写真10,11）

②活動：使いたい材料を手に取り、空間に材料を構成する。（写真12～18）

③鑑賞・まとめ：子どもの感想を聞き、遊びを経て得られた気づきや想いを全体に共有する。

5. おわりに

本章では授業担当者の視点から、各遊びの所感を記す。

まず影の遊びについて記す。この遊びは模擬保育の段階で「ボックスアートの造形遊び」に留まっており、影に注目する遊びとは程遠いものであった。しかし材料を選定し、導入や見本の見せ方を変え、箱を作りながらライトで確認できるような援助を取り入れたことで、本番では「影を楽しむ」というねらいに沿うことができた。

4歳児クラスは、子どもの興味から「運動遊び」を軸に保育を展開することが多いと担任の先生から聞き及んでいたが、この影遊びをきっかけに、歩いたり走ったりしながら外にある影を探す遊びが展開されたそうである。遊びから気づき生まれ、その気づきが「遊びの形」を変えて継続したことで、「子どもの生活経験に根ざした保育」になりえたのではないかと考える。

次に異素材の構成遊びについて記す。この遊びは、模擬保育の段階で本番よりもたくさんの種類の材料を準備していたが、素材の特性を生かしきるこ

とができず、導入や環境設定に苦慮する姿が見られた。

この模擬保育を経て学生の意識が変わり、授業外の時間であっても「構成」や「見立て」に適した素材を検討する姿が見られるようになった。このように学生一人ひとりが材料研究の重要性を実感し、話し合いや実験を重ねた成果が、本番で聞かれた子どもの「楽しかった!」という言葉に表れたのではないかと感じる。

この授業の受け持ちが決まり、最初の数回の授業を実施した段階では「教員がほとんど介入すること無く学生に全てを託すことは難しいかもしれない」と感じることも多かった。しかし模擬保育の内容を動画で丁寧に振り返ることで、学生にも多くの気づき生まれ、本番に向けて意識を変えて準備を進める姿が見られた。そして材料研究や話し合いを重ねた学生考案の造形遊びには、保育に慣れた大人には無い造形的な新鮮さや工夫が見られた。当授業の結果として、ほとんどの学生から「やってよかった」等の満足感や達成感を表す言葉が聞かれた。残り数ヶ月で保育現場に立つ彼らに、材料研究や事前準備はもちろん、改めて自身が主体的に行動することの大切さを伝える良い機会になったのではないかと考える。



写真10 構成遊びの材料



写真11 導入の様子



写真 12 キャップの操作(並べる) を楽しむ様子



写真 16 新聞紙ジュースが車に変化する様子

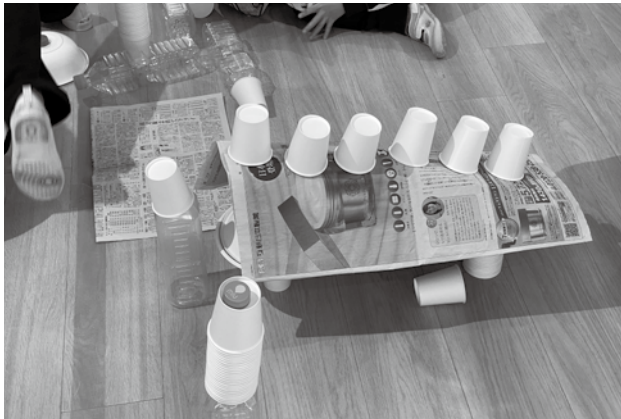


写真 13 操作を楽しみながら、恐竜のように見えてきた子どもの表現



写真 17 新聞紙ジュースをお皿に入れて、お店屋さんごっこに発展している様子



写真 14 バランスを意識しながら積むことを楽しむ様子



写真 18 全体図



写真 15 積み重ねた紙コップの頂上にキャップを置き、ケーキのようなイメージを実現しようとしている様子



写真 19 ハイタッチでお別れする様子



ダンボールを用いた大型お面の製作 - 親子アトリエの空間から 生まれる形と造形表現 -

育英大学 渡辺 一洋

1. 実践の目的

「育メン」という言葉に見られるように、近年、父親が子育てにおいて母親と協力した様々な参加や役割が求められている。筆者は近年、育メン講座の講師として、造形活動を通して、父親ならではのものづくりの視点から、親子の製作を見つめてきた。保育の場面において、親子の活動というと母親と幼児のペアでの活動は多いが、父親による作品のデザインや飾りつけについても、これまで興味深い場面に接してきた。本実践についても大型のダンボールをダンボールカッターで型取り、作品を父親が力強く製作していく場面が見られた。コロナ禍の中で、感染対策をしながら、大人数では実施できない現

状であるものの、少人数でゆったりとした親子アトリエの空間を構成することができた。また、子どもだけではなく、父親とデザインを話し合い、コミュニケーションを行う中から生まれる造形を筆者がファシリテーターとして進行して、個性的な作品製作を親子に体験してもらうことが本研究の目的である。重ねて大型ダンボールを材料に選んだ背景には、家庭内ではなかなか製作できないダイナミックな作品製作を体験してほしいという筆者の思いも込めている。

2. 実践の経過

参加した幼児は3～6歳の未就学児であり、群

馬県高崎市内在住の8組（事前抽選）であった。また、製作をしやすい雰囲気作りのためにアイスブレーキングを重ねながら、まず、筆者が子育てサークルの学生と試作を行った作品を鑑賞し、実践のプロセスについて説明を行った。次に、「冬のフルーツ（みかん、いちごなど）」「クリスマス（サンタクロース、トナカイなど）」から好きなテーマを選んで、ダンボールの大型お面の製作を行った（写真1、2）。大型ダンボールは、果物などを包む箱を作る前の平版の素材で、劇の舞台背景や秘密基地作りなどの実践の中で、かつて筆者が用いて様々な作品製作を試みてきた素材であり、父親と幼児の活動を行うのに、とても達成感を感じる大作向きの素材であると考えている。ある程度、ダンボールの製作が進むと大型お面の外枠を型取り、飾りつけ（写真3）を行い、作品を完成させ、最後に各親子に作品発表（写真4）を行ってもらい、製作を通した全体的な感想を親子に語ってもらうことにした。

3. 実践の全体的なまとめ

本実践は、父親と作品製作をチャレンジすることができ、5、6歳においては、小学校図画工作科の接続につながる製作の過程が見られた。親子アトリエの空間においては、作品製作のための指導内容を見つめ直していくとともに、ダンボールの素材感にふれる姿が見られた。また、ダンボールの大型お面の作品製作を通して、視覚的な作品製作の面白さについてもふれることができた。今後の製作においてもコロナ禍の中で、比較的参加しやすい雰囲気を保ちながらも制限はあるものの親子のコミュニケーションを通した感性を豊かにする造形活動を実践していきたいと考えている。大型お面作りの中では、綿やちぎり絵の様々な素材を混合して製作する姿があったことから、感性を豊かにする造形について、さらに検討を進めていきたい。



写真1 親子による製作の様子



写真3 親子アトリエの製作の空間



写真2 親子による製作の様子



写真4 親子による作品発表の様子



日本の四季を表現する和紙を用いた製作 - 総合表現 における絵画と立体の視覚的効果 - 育英大学 渡辺一洋

1. 実践の目的

コロナ禍の中で、アクティブな動きができない中、日本の四季や伝統文化に目を向けた製作を行うことを検討した。特に日本の和紙の素材の美しさを活かした製作を計画し、日本の造形素材である和紙の素材感の美しさを味わうことを目的とした。和紙は、ランプシェードや日本画で用いられる素材であるが、光を映し、絵画を照らすことで幻想的な表現にすることができると思った。かつて筆者は、桜の季節に絹のランプシェードを小学生と製作し、群馬県内の桜の名所の橋のある川に置いて点灯するプロジェクトのメンバーとして参加したことがあり、その時の作品イメージを今回の製作に向けて考えてい

た。また、毎回の開催時期が2月末ということもあり、冬から春に変化していく季節について表現する楽しさを参加した子どもが味わうことのできる実践として構想した。

2. 実践の経過

実践当初に参加した子どもを冬チームと春チームの2チームに分け、冬チームでは、クリスマス、冬のフルーツ、冬の動物などをイメージしたランプシェードをチーム協同で製作(写真1)し、新聞紙で丸めた雪に見立てた新聞紙の雪だるまもチーム協同で製作した。個人製作では、冬のイメージの衣装製作を行うこととした。春チームでは、桜、たん

ぼぼなどの花や植物、卒業式や入学式などの行事、蝶々、てんとう虫などの虫や生き物をイメージしたランプシェードをチーム協同で製作し、新聞紙で丸めた桜に見立てた新聞紙の桜だるまもチーム協同で製作(写真2)した。個人では、春のイメージの衣装製作を行うこととした。具体的な手順は以下の通りである。

①「ランプシェード(チーム協同で製作)」

和紙の美しさにふれるために和紙で何層にもした大型の紙の作品に水彩絵の具で絵を描く活動を行った。普段の小学校図画工作科の授業においては多くは白い画用紙が用いられると考えられるが、和紙はどちらかというと書道において体験する場が一般的である。そのため、なるべく立体的な作品にして、作品製作を協同で楽しめるように、筆者自身が大型のゴム製ボールに和紙を何層にもして貼り付け、乾いたら剥がすと空洞ようになる張り子お面の製作方法を参考にして、2つのランプシェードの無地の下地になる型を製作した。筆者自身もその下地を作る過程を楽しむ状況があり、この作業を長い期間の時間があれば、いつか子どもにも体験してほしいという思いも抱いた。実際の実践では、ランプシェードをおぼけの生き物のように視覚的に捉えて愛着をもち、絵を描いている子どもの姿が印象的であった。

②「雪だるまと桜だるまの製作(チーム協同で製作)」

新聞紙を丸めて新聞紙彫刻を製作するイメージもこれまで温めていた実践であるが、冬チームを雪だるまにして、白いアクリル絵の具を塗り、雪だるまにする製作は完成イメージがあったが、春のだるまをどのように製作しようか検討したところ、桜吹雪のイメージがあり、桜だるまを製作することにした。ピンクの桜だるまは、白い雪だるまとバランスが合い、実践の中で衣装製作にもつながる子ども達の発話があった。なお、新聞紙と一緒に和紙も取り入れながら完成作品にしていった。

③「冬と春のそれぞれの衣装製作(個人製作)」

協同製作で行ったランプシェードとだるま製作は、衣装製作に進んだ段

階で衣装のイメージにもつながり、スムーズに展開することができた。具体的には冬と春のそれぞれの形のイメージを衣装にして製作することができた。クリスマスや春の虫の衣装は、ランプシェードに絵を描きながらデザインを考えていた様子もあり、作品製作は比較的イメージ通りに進んだ印象がある。衣装製作の素材としてはカラーのビニール袋を用いて首と手が出せるように製作し、紙やリボンなどで飾りつけ(写真3)を行った。

3. 実践の全体的なまとめ

冬と春の季節の移ろいの中で、作品発表としてのファッションショーの演出を考えていた際、雪国の冬の窓辺を開けた時に雪が室内に舞い散る風景を思い出した。また、春には、桜の花びらが美しく桜の木の下に風に舞う風景が心をよぎった。どちらも詩情のある光景であり、衣装発表のファッションショーの際に、冬チームには白い画用紙で作った雪の吹雪を、春チームにはピンクの画用紙で作った桜吹雪をポーズのシーンで各子どもに蒔くように筆者が説明を加えた。計2日間に渡る製作の2日目は毎回、ファッションショーを最後に設定しており、ランプシェードとして照らされた冬と春の和紙の作品はかわいらしく点灯され、冬だるまと桜だるまも独創的な世界観を演出(写真4)していた。なお、各個人のファッションショーでも衣装に和紙を取り入れたことから、全体的な調和につながったと考えられる。今後も和紙に着目しながら様々な実践を検討していきたい。



写真1 和紙のランプシェードに絵付け



写真3 衣装製作の様子



写真2 桜だるまの製作



写真4 発表の様子

創造性研究の系譜と芸術教育

帝京科学大学 渡部 晃子

1. はじめに

芸術教育における創造性は、着目される資質・能力の一つである。しかし創造性という言葉は広く曖昧な内容をはらんでおり、様々な定義や概念化がなされてきた。それゆえ個々人による捉え方によって様々な解釈される可能性があり、現代において芸術教育が目指す創造性とは何か、その内容を深めていくことが求められる。

平成 29 年改訂の学習指導要領では、図画工作科の目標に「創造」という言葉が繰り返し散見される¹。このことから図画工作科においても創造性の教育はこれまでに増して重視されつつあるとあってよいだろう。

それゆえ今日の美術教育における創造性は、心理学等で研究されてきた定義を参照しながら一層検討を加える必要があるのではないか。ただ先行研究において創造性の問題が取り上げられてこなかったわけではない。

創造性に関わる研究の代表的なものとして Lowenfeld の Creative and Mental Growth (1947) がある²。Lowenfeld の研究は戦後の美術教育に大きな影響を及ぼしてきたのであるが、次の 2 つの点で異議を唱えられることになる。第一に芸術における段階理論に対して根拠となる満足な証拠が欠けていること³、第二に人格形成や自己実現のために芸術の道具的価値が強調され、その内容が除外されていたこと⁴である。

一方、アメリカでは 1960 年代に創造性研究およびその教育が盛んに推し進められたが、芸術教育では公的資金の投入によってその学問的組織化が急がれていた。そこで本稿では、特にアメリカの 1960 年代の創造性教育に焦点を当て、その内容を整理するとともに同時期の芸術教育の動向を比較考察していく。これにより同時代の創造性に関わる研究・教育を多角的に捉えることを試みる。

2. 創造性研究の歴史

創造性研究は長い歴史を経てきているが、Becker

によれば 19 世紀以降の創造性研究は次の 5 つの主要な問いによって探究されてきた⁵。

1. 創造性とは何か
2. 誰が創造性を有しているのか
3. 創造的な人々の特徴とは何か
4. 誰が創造性から恩恵を受けるべきか
5. 意識的な努力で創造性を高められるか

Runco は近年の創造性研究の動向について 1990 年から 2015 年の間に論じられてきたテーマ、複数のキーワードをもとに調査した。その結果得られたことで特筆すべきは、教育における創造性と協調的問題解決による基礎研究が 1990 年代初頭にピークを迎えていることである⁶。Feldman と Benjamin は教育において創造性が果たしてきた役割について述べたが、中でも幼児教育における創造性の重要性について指摘した⁷。

また Long は創造性研究に関する文献研究において主要な 5 つの雑誌からその研究方法の多くが量的方法により行われ、質的方法が少ないことを指摘するとともに新たな研究領域として異文化における創造性や教育における創造性が比較検討される可能性を示唆している⁸。

以上の先行研究から近年の研究動向としての課題は、90 年代初頭の教育における創造性の批判的検討、質的方法による創造性研究の充実や異文化教育における創造性の捉え直し、幼年期における創造性教育の充実などが考えられる。

これまでに創造性は「神秘的で不可解なもの」という認識から一般的な能力であることがわかってきた⁹。さらには Torrance などのテストによって測定することも試みられるようになった¹⁰。創造性が特殊な個人のものではなく、社会的性質をもち、環境によって生み出されるものであるとの認識が生まれたことは創造性教育の基盤を形成したと考えられる。

そこで次に、創造性の社会・文化的性質に関わる研究の流れを特にヴィゴツキーとチクセントミハイに焦点化して概説する。

3. 創造性の社会・文化的性質

(1) ヴィゴツキー (1896 ~ 1934)

創造性の社会・文化的性質についてはその原型はヴィゴツキーの想像論に認められる。ヴィゴツキーは創造のメカニズムについて想像と思考の関係性から論じた。彼によれば人間の行動や活動にはおよそ二つの種類がある。

一つは再現的(再生的)活動,もう一つは複合化する活動ないしは創造する活動がある。そして後者のような脳の複合化能力による創造活動を「想像」として非現実のものではなく日常生活のあらゆる場所に存在するものとした。

さらに創造のメカニズムについて幾つかの要素に基づいて説明した。初めに「外面的・内面的知覚」を挙げ,さらに知覚した心的体験を「分解し連想する」ことが重要であるとしている。そして分解の過程に続いてその分解された要素を「修正する」過程が行われ,それらを「連合・統一する」。最後に想像が実現化する,あるいは外的イメージとして「結晶化する」ことによって完全に循環していく。

このように子どもの創造性はヴィゴツキーによれば生得的なものではなく獲得されていくものであった。創造的な想像の活動は非常に複雑で色々な要因に依拠するとして子どもと大人の活動は全く異なっていると主張した。そして次のように述べた。

「よく知っているように,子どもの経験は成人の経験に比べてずっと乏しいのです。(略)すなわち子どもが発達していく過程で想像力も発達し,成人になってはじめて想像力も成熟するのです。」¹¹

加えてヴィゴツキーによれば,子どもの想像の発達は,感情によるイメージの構成と概念的思考のイメージの構成が複雑に絡み合ったシステムの中で発達する。概念的思考が可能になると抽象的に物事を思考することが可能になるが,想像は具体的な性格を有したまま,そこにとどまらず新たな具体的なものに向かう。つまり具体的なものから抽象的なものを經由して新しい具体的なイメージが構成されるということが人間の想像による創造活動であるとする。

想像と思考との深い関わりによる発達は①言語的思考以前(就学前)②複合的思考(学齢期前半)③概念的思考(学齢期前半以降)の順に進む。ヴィゴツキーは特に学齢期に創造性を培うことの重要性を唱え,「未来を志向する創造的な人格は,今,具象化される創造的な想像力によってつくられる」¹²として教育の可能性を示した。

子どもの想像を出発点としたヴィゴツキーの理論から美術教育における子どもの創造性もまた一連の想

像の発達を加味して様々な側面から創造を促していく必要性が考えられる。

加えてヴィゴツキーは想像が経験や関心に左右されるとした上で社会的環境の作用についてリポーやワイスマンを引用しながら次のように述べている。

「つまりあらゆる発明家は,天才といえども常にその時代,その環境の産物なのです。(略)いかなる発明や科学的な発見も,それが生じるために必要な物質的,心理学的な条件がないうちは現れたりしません。創造とは歴史的な継承の過程であって,そこでは後発のすべてのものが先行するものによって定められているのです。」¹³

そのような想像の社会環境的作用という側面のほか,ヴィゴツキーは芸術そのものを「芸術は引きのばされた「社会的感情」ないし感情の技術ともいべきものである」としている¹⁴。そして最後に「芸術が社会における個人の生物的・社会的過程のもっとも重要な中心であるということであり,芸術は生活のもっとも危機的な重要な時点における,世界と人間との均衡の手段である。」¹⁵と結んでいる。

こうしたヴィゴツキーの理論は創造的システム理論として時代を経てチクセントミハイに引き継がれているとみられる。したがって次にチクセントミハイの理論について述べる。

(2) チクセントミハイ (1934 ~)

1965年にチクセントミハイは Artistic problems and their solutions; an exploration of creativity in the arts. という論文で博士号を取得した¹⁶。

その後,個人の思考と社会的な文脈との相互作用の中で生成されていく創造性についてチクセントミハイは細かく体系化し,創造性が3つの要素から構成されたシステムの相互関係の中で観察できるとした。

3つの要素とは記号体系の諸規則や手続きのまとまりからなる領域(domain),分野の場(field),個人(person)である¹⁷。

「領域」とは「記号体系の諸規則や手続きのまとまりから成る」¹⁸「私たちが通常文化と呼んでいるもの,つまり,特定の社会や人類全体によって共有されている記号体系の知識に組み込まれている。」¹⁹とされている。

また「分野の場」とは,「領域の門番としての役割を担うすべての人々が含まれる。彼らの仕事は領域に新しい考えや成果を加えるべきか否かを決定することである」²⁰としている。

そして「個々の人」とはすなわち「特定の領域の記号体系を用いて,ある人が新しいアイデアを出し,新しいパターンを見出したりするとき,創造性が発生す

る。」²¹と捉えられた。

さらに環境について創造性においては「正しい環境は複数の点で重要である。」²²とした。その理由として情報や刺激は均等に分散されないので個人的な性格や課題による部分があるものの、自分が働こうとする領域にアクセスできる適切な場所にいなければならない必要性を示唆した。

ヴィゴツキーは想像や芸術を社会的に捉えたが、チクセントミハイはさらにそれらを細分化し「分野の場」や「適切な場所」として具体的に指摘した。チクセントミハイによれば創造性は「個人的な現象というよりは、体系的な現象」であるとしてそれまでに用いられてきた創造性という言葉を整理した。

それは第一に「日常生活に広く用いられ、奇抜な考えを表現する人々や興味深く、刺激的な人々—要するに非常に賢そうに見える人々—」²³である。

第二に「斬新かつ独創的な方法で世界を経験する人々を指す言い方」²⁴で「物事の捉え方が新鮮で、判断は洞察力に富み、彼らだけにしかわからない重大な発見をする人々」²⁵を指す。

第三に「ダ・ヴィンチ、エジソン、ピカソ、あるいはアインシュタインなど、文化のある面に重要な変化をもたらした人々」²⁶である。

これらの3つの創造性をめぐる用法についてチクセントミハイは特に最初の二つと最後の人々は異なる在り方であって互いに関連性がないと主張する。つまり個人の創造性と文化に対する創造性は異なるという明確な区別を示したのである。

4. アメリカの創造性教育の萌芽期と芸術教育

上述してきた創造性研究の流れの中でその成果はいかに教育に援用されてきたのか。アメリカの創造性教育と芸術教育に限定して概説する。

1960年代にアメリカでは創造性教育の機運が高まった。しかし、同時期に芸術教育では異なる方向性が見られる。したがってここでは創造性教育と芸術教育の流れを対比しながら述べていく。

近現代の創造性と教育の端緒は Guilford の 1950 年の講演に認められる²⁷。Guilford は創造性と学習の関係や知性モデルの構造の解明、創造性の測定について研究、貢献した。また Torrance は 1966 年に創造的思考のテストを開発し、現在でも主要なテストの一つとして用いられている。

1954 年に実業家であった Osborn は創造教育財団 (Creative Education Foundation/ CEF 以下 CEF と記す) を設立した。さらに翌年 1955 年に創造的問題解決研究所 (Creative Problem-Solving Institute/ 以

下 CPSI とする) を創立し、創造性教育の発展に力を注いだ。

この CPSI は創造性が特別な人のものではなく、誰もが創造的な存在であり、創造的能力は教え、育むことができるとの信念のもと活動を行っている。

1966 年に Osborn が死去した後、Parnes と Noller によってバッファロー州立大学に創造性研究学部が設置され、Osborn の活動と意思は引き継がれた。また 1967 年には大学院課程の設置および雑誌『Creative Behavior』を創刊した。Parnes によれば大学院の設置は、人々の関心が非常に高かった為、その活動をさらに拡大し 1976 年には創造研究学際センター (Interdisciplinary Center for Creative Studies/ ICCS) を設立することとなった。

一方で 1960 年代の芸術教育の動きでは、教科中心の教育から学問中心の教育へと移行する方針が打ち出されてきた。1963 年にアメリカ政府は公教育における芸術への支援を初めて実現することを提案した。1965 年に初等・中等教育法 (ESEA) が制定され、芸術教育の研究やカリキュラム開発に資金が投入されることになり、CEMREL (中央中西部地区教育研究所) と SWRL (南西部地域研究所) の 2 つの教育研究所が設立された。

また同年、ペンシルバニア州立大学にて芸術分野の研究とカリキュラム開発のためのセミナー (ペンステイト・セミナー) が開催された。メンバーは Barkan, Brody, Eisner など芸術教育に携わるリーダーであった。岡崎によれば、1960 年代における美術教育をより構造化しようとする傾向に対して貢献した主な人物は Barkan と Eisner である²⁸。

そのセミナーでは芸術教育を学問分野として確立するべく芸術教育の構造と内容の問題が議論された。またその成果を受けて連邦政府や民間企業が資金提供し、新しいカリキュラム開発が行われていくこととなったのである。

その新しいカリキュラムの共通した特徴は、芸術教育の自由放任主義的な方向への反省に立って専門的な知識を重視していることであった。「Arts Impact」として全米の学区で総合的なアートの提供がなされ、社会的アートプログラムが開発された。それぞれのプログラムはすべての芸術分野を統合するように美的教育に焦点を当てて構成されていた。

加えて 1960 年代後半には指導手順や言葉、カリキュラムの書き方などを明確化しようとする動きがあり、MBO (Management by Objective) と呼ばれる手法が導入され、授業計画やカリキュラムガイドを書く際に生徒の行動目標を設定するようになったことは大き

な変革であった。²⁹。

このように 1960 年代の芸術教育においてはその構造と内容の整備が急速に進められ、Barkan のいう「Lowenfeld をはじめとする既成概念」を再検討しようとする動きが高まっていた。その中で美術教育の既成概念とされていたものに「美術は創造性を開発することである」という考えがあったとみられる³⁰。

1960 年代の美術教育は、学問としての美術に焦点化する傾向を強めていき、後の DBAE(Discipline-Based Art Education/ 学問に基づく芸術教育) に展開していくことになる。

5. おわりに

これまで述べてきたように「創造性」は時代の流れとともにその捉え方が異なっており、ヴィゴツキーやチクセントミハイらによって社会・文化的背景のもとに生みだされるものであることが明らかになってきた。1960 年代の異なる教育の方向性は、自己実現や人格形成としての芸術と学問としての芸術という 2 つの側面に焦点を当てている。また創造は想像の豊かな土壌抜きに育成することは難しく、イメージの豊かさを幼少期から育むことの重要性が浮かび上がった。美術教育における創造性もまたそのような定義や条件を踏まえ、幼少期からの一連の発達に着目する必要があるだろう。

註

- 1 文部科学省, 2018 年, 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説』, 日本文教出版
- 2 Lowenfeld,V.,1947, *Creative and Mental Growth*, New York: Macmillan
- 3 McFee,J.K, 1961,*Preparation for Art*, Bermont, CA:Wadsworth
- 4 Barkan,M.,1962,"Transitions in Art Education:Changing Conceptions of Curriculum and Theory."*Art Education*,15(7),pp.12-185
- 5 Becker,M.,1995,"19th century Foundations of Creativity Research." *Creativity Research Journal*, 8, pp.219-229
- 6 Williams, Runko and Below, 2016, "Mapping the themes, impact, and cohesion of creativity research over the last 25 years." *Creativity Research Journal*, 28(4), pp.385-394
- 7 Feldman,D.H., & Benjamin, A.C. 2006, "Creativity and Education: An American Retrospective."*Cambridge Journal of Education*,36, pp.319-336
- 8 Long,H., 2014, "An Empirical Review of Research

Methodologies and Methods in Creativity Studies (2003-2012)" *Creativity Research Journal*, 26(4), pp.427-438

- 9 Runko and Albert, 2010,"Creative Research a Historical View", Kaufman and Sternberg (Ed.),*The Cambridge Handbook of Creativity*, Cambridge University Press, pp.3-19
- 10 Torrance, E.P., 1974, *Torrance Test of Creative Thinking: Norms-technical Manual.*, Bensenville, IL: Scholastic Testing Service
- 11 ヴィゴツキー, 2002 年, 広瀬信雄訳, 『子どもの想像力と創造』新読書社, pp.53-54
- 12 同上, p.153
- 13 同上, p.49
- 14 ヴィゴツキー, 2006 年, 柴田義松訳, 『芸術心理学』, 学文社, p.324
- 15 同上, p.346
- 16 Csikszentmihalyi,M., 1965,"Artistic Problems and their Solutions; An Exploration of Creativity in the Arts", Ph. D. University of Chicago, Committee on Human Development
- 17 チクセントミハイ, 2016 年, 浅川希洋志監修, 『クリエイティヴィティ』, 世界思想社 ,P.31
- 18 同上
- 19 同上
- 20 同上
- 21 同上
- 22 同上, p.28
- 23 同上
- 24 同上
- 25 同上
- 26 同上, pp.28-29
- 27 Guilford, J.P., 1950, "Creativity", *American Psychologist* , 5, pp.444-454
- 28 岡崎昭夫, 1996 年, 「戦後におけるアメリカ美術教育の展開」, 『宇都宮大学教育学部紀要』 46, pp.133-155
- 29 Saunders,R., 1993,"State level Curriculum Guidelines: an analysis", *Visual Arts*, Kraus International Publications, p.112
- 30 Eisner,E., 1974, "The Mythology of Art Education, " *Curriculum Theory Network*, Vol.4, No.2-3, pp.89-100

子ども向けアロンアルファ サンプルワーク

子どもの想いを形にするアロンアルファの開発

東亜合成(株) アロンアルファ事業部コンシューマ部 藤田晴香



当日参加した先生方

1. 子ども向けアロンアルファ（仮称）商品開発背景

発売から50年以上、老若男女様々な方にご愛顧いただいてきたアロンアルファですが、その速さと強力さ故に、「アロンアルファは指に付くと危険だから、子どもには危なくて使わせられない」というご意見を、大変多くの先生方や保護者の方からいただきました。確かにアロンアルファは瞬間接着剤という性質上、誤って指に付いて剥がれなくなるなどのトラブルが起きる可能性がございます。しかし、昨年全国で実施したお子様向け工作イベントでは、「あらゆるものを瞬時に接着できる」という特性を

生かした、大人には思いつかない独創性溢れる作品が子どもたちの手によってたくさん生まれました。工作に夢中になり、思いつくままに造形する子どもたちの様子を見て、アロンアルファは彼らの「想い」を形にできるアイテムだと確信し、「子どもも安心して使える瞬間接着剤」を何としても商品化したいという想いに駆られました。

2. サンプルワークの目的

子どもたちにアロンアルファを使ってもらうにあたり、まずは先生方にアロンアルファの便利さや楽しさを体感いただき、子どもたちにも安心して使わせ

られることを実感いただくことが必要だと考えました。そこで、当日は小学校・中学校・大学の先生方にご協力いただき、「実際に子どもたちが使うという前提で、アロンアルファを用いて自由に工作を実施していただき、感じたことを率直に伺う機会を設けさせていただきました。

3. サンプルワーク内容

日時：2023年2月11日(土) 13:30～16:30

場所：埼玉大学教育学部附属中学校

参加者：22名(東亜合成社員3名、大学教員2名、中学校教員10名、小学校教員5名、大学生1名、小学生1名)

材料：コルクコースター、丸太(板)、ビー玉、木製クリップ、アルミホイル、針金、缶、ペットボトル、針金、プラスチックビーズなど

※アロンアルファは異素材の接着を得意としているため、様々な素材の材料を用意しました。

・用意したサンプル(右表)

・実施内容

3～5名のグループに分かれて、アロンアルファサンプルを用いて自由に工作をしていただきました。その際、サンプルによって指やモノへの接着速度や強度に違いはあるか、はがし隊ではがせるかも体験していただきました。工作は約2時間実施し、その後感想を発表していただきました。

・その他

上記サンプルA～Cのほかに、「プラスチック用(ポリエチレン、ポリプロピレンの接着のために用意)」「アロンアルファ専用硬化促進剤(スプレー)」「スーパー液(硬化促進液)」も工作の補助として提供し、色々な種類のアロンアルファを体験していただきました。

4. 先生方のご感想(一部抜粋)

- ・木工用ボンドよりも速く接着できる
- ・こんなに点付け、異素材接着ができるとは思わなかった(特にビー玉が付けられるのには驚いた。グルー



親子で参加していただいた先生

▼表 用意したサンプルと特徴

	写真	特徴
A		指に付きにくいアロンアルファ サンプルB・Cより接着速度は遅く、接着強度は弱い。
B		速くて強いアロンアルファ
C		サンプルBと内容液は同じ。 サンプルBのアルミチューブの周りに容器が付属している。
はがし隊		アロンアルファ専用リムーバー(はがし剤)。指やモノについたアロンアルファをはがすことができる。



プラスチック用



硬化促進剤(スプレー)



スーパー液(硬化促進液)

ガンよりも強度が高く、薄く付けられる。)

- 硬化促進剤やスーパー液があると、一瞬でカチッと固まるのがよい。他の接着剤では不可能な形やバランスも実現できる。
- PET はスーパー液の方が綺麗に固まる。スーパー液は細かい部分に狙い撃ちできる。
- アロンアルファは完全に溶けないが、「はがし隊」があれば指に付いても安心。
- Cのプラスチック容器は立てて保管できる、作業中も立てておけるのがよい。外身は付け替え性で繰り返し使える、キャップを無くさないなどの工夫があると尚良い。
- プラスチック用のプライマーは色付きだとどこに塗ったかが分かりやすくて良い。
- はがし隊にノズルがあれば、狙ったところに垂らしやすいのもっと使いやすい。

5. サンプルワーク実施後の学び

普段お客様に商品を目の前で使っていただき、直に感想を伺う機会はめったにないので、学びの多いサンプルワークでした。今までは、内容液に注目した開発に偏りがちでしたが、容器にも様々なご意見をいただけたのが印象的でした。例えば、「キャップの上部を大きくして、逆さまに立てて保管できるようにしたらどうか」、「プラスチック容器と低学年は押した感覚と液が出る感覚をつかみにくい」、「キャップは無くす恐れがあるので、絵の具のように一体型になっていると良い」など。普段子どもたちの行動を見ている先生だからこそ気が付く点であり、社内だけで検討していてもなかなか出てこない貴重な生の声をたくさんお聞かせいただきました。

6. アロンアルファ商品豆知識(お役立ち情報)

当日は、アロンアルファの製造会社である東亜合成社員3名がスタッフとして参加しました。作品作りの時間に、スタッフからお伝えして、先生方に好評だった商品に関する豆知識の一部をご紹介します。

①塗布しすぎると付かない

アロンアルファは接着表面の水分に反応して固ま



点付けを試みる参加者

る接着剤です。そのため、接着面に対して、多くつけすぎると逆に速度と強度が落ちます。目安は10円玉の面積に1滴程度です。

②長持ちのコツ

- ノズル先端で塗り広げず、点置きして接着する
ノズル先端で塗り広げると、先端に不純物が付着し、長持ちしにくくなります。

- ノズルを拭いてから蓋をカチツとなるまで閉める
ノズルに液が残っていると、次使うときまでに固まってしまいます。蓋をカチツとなるまで閉めることで、水分の侵入を防ぎます。

•冷蔵庫(冷凍庫)に保管する。

アロンアルファは熱・水・光に弱い接着剤です。それらを避けられる、冷蔵庫・冷凍庫保管がオススメです。再使用の際には、室温に戻してからご使用ください。

③布への使用

繊維状のもの(布、ティッシュなど)に大量に染み込むと発熱する恐れがあるので接着部分を手で押さえないようにしてください。ただ、染み込んで固まった後は、プラスチックのようになるので、材料として使用することができます。

④硬化促進剤でもっと速く、綺麗に接着

アロンアルファはすぐ付くことが最大の特徴ですが、それでもくっつくのに数秒から数10秒はかかってしまいます。ところが、「アロンアルファ専用硬化促進剤」をプシュ!とひと吹きすると、指で押さえて待つ必要が一切なく、瞬く間に固まります。

また、速く固めることで、硬化後周りが白くなる



硬化促進剤を吹き付ける



出来上がった作品を官署し合う

現象も防ぐことができ、作品が綺麗に仕上がります。

7. 今後

実際に工作を体験いただいた先生方の声をお聞かせいただき、アロンアルファは子どもたちの工作にも使っていただけるんだ!とスタッフ一同「子ども向けアロンアルファ(仮称)」の実現に大きな自信を持たせていただきました。

また、アロンアルファは、使ってみてその良さを

共有できる商品だと実感したので、今回のようなワークショップを実施し、使い方や造形に使えるアイデアを発信していきたいと感じました。

アロンアルファに限らず、様々な接着剤をその特徴に応じて適切に使い分けることは造形の幅を広げることにもつながるため、接着剤知識共有型ワークショップを先生方向けに実施し、その場面場面で適した接着剤を選定できるようなお手伝いをしていきたいと夢をふくらませております。

東亜合成株式会社 TOAGOSEI
 石井 宏明 新藤 菜莉 藤田 晴香
 埼玉大学教育学部附属中学校 小西 悟士 先生
 2023.02/11 SAT 13:30 - 17:00
 ◎ 埼玉大学教育学部附属中学校 美術室

子供でも安心して使える
アロンアルファ
 試作研究会

〈発売元〉コニシ株式会社
 〈製造元〉東亜合成株式会社
 子供向け新製品で試作!

どんどん工作して、題材研究・指導研究も踏まえつつ、東亜合成株式会社さんの製品で遊ぼう!

アロンアルファ専用のはかし液。結構頑張らないと取れない...

「コレ一本で解決しちゃう!」という声が多く出た。接着もできちゃう!?

ホリエチレンプライマーと併用...ホリアロピレン接着可能! 湿気に晒されてしまうと乾燥してしまう

硬化促進剤だとガラスが割れてしまう。散布型だと余計な所についてしまったりするところをキレイにしてくれます!

アルミホイルをお花に見立てて.....点付けできるのがよい

指に付きにくい。接着強度 A < B < C 接着速度 A < B < C

キャップ先突起で「チューブ」穴をあけます!

内容液は同じ。速くて強い。外装容器が付属している。

内容物同じ

ノズルを最後までしめる

「ノズル付」奥まで届く!

詰替はいいアイデア?

瞬間接着で、次々と形の試行錯誤ができる!

紙にアロンアルファを染み込ませて乾かすとプラスチックみたいになる!

描くことで顕在化する環境と状況の作用とメーカーも知らなかったキットパスの意外な活用

中国短期大学 鳥越亜矢



【写真1】キットパスを使ったデカルコマニーで5歳児が作ったカラフルな傘の模様

1937年創業の日本理化学工業株式会社（以下理化学工業）は、炭酸カルシウム製のチョークを日本で初めて開発し、製造販売している会社である。また、障がい者雇用を推進しており、その割合は2022年2月時点で全従業員の7割である。それぞれの理解力に合わせて工程を組み、製造ラインのほとんどを知的障がいを持った従業員が担っている。



キットパス

1. 概要

理化学工業の主力商品はダストレスチョークや環境固形マーカーキットパス“kitpas”(以下、キットパス)である。前者は北海道で廃棄物として年間約20万トンも排出されるホタテ貝殻を世界で初めて微粉末にして配合したチョークであり、2011年には、環境負荷の低減に配慮した、優れた製品・サービス(エコプロダクツ)として表彰されている¹⁾。後者はクレヨンのようなタッチで、滑らかな描き心地の画材である。その開発コンセプトは「チョークに対する黒板、色鉛筆やペンに対する紙というように、キットパスに対してはどこにでもある「窓ガラス」をキャンバスとして捉えて、窓ガラス等のツルツルとしたところに書いても、色ノリが良く、消えやすい商品を作ろう²⁾」というもので、水溶性であることを活かし、窓ガラスにかいたものは水拭きすると消えることが大きな特徴である。キットパスの主な原材料は、当初口紅などの化粧品に使われるパラフィンだったが、現在は米ぬかから抽出したライスワックスに切り替わり、さらに安全性が追求されている。このように、ダストレスチョークもキットパスも、人や環境への負荷軽減を目指した、教育現場や子どもにとって大変身近な筆記用具であり、画材である。

同社は2020年11月に全美協賛助会員になり、2021年に大成、佐藤、鳥越3名の全美協加盟大学教員と連携した。2022年2月19日に開催した2021年度の全美協造形美術教育フォーラムには、理化学工業キットパス事業部の西田太士氏と、佐藤亜紀子氏が参加した。フォーラムでは3名がそれぞれの視点に基づき事例報告を行った。

大成は、今までの実践内容にキットパスを組み合わせた活動の展開から、多くの人が持っている絵画表現の固定概念をキットパスが開放し、活動中に生じる交流の中で表現や活動が広がる可能性を持った画材であることを報告した。

佐藤は、消せるという特徴を子ども達が堪能し、キットパスが探求心を誘発することのほかに、ベビーパウダーでキットパスを定着する行為に興味を

持つ幼児の姿から、仕上げという重要な制作行為の醍醐味を大人に奪われている可能性に気づいたこと、そして、キットパスの実践を通じて、画材の特徴を知ることによって子ども自身が遊びや表現の幅を広げ、質を高めるには、時間的、質的に充実した体験が保証される必要性について考えたことなどを報告した。

鳥越は、学生の授業実践と保育者研修においてキットパスを使う活動で発揮されている力や姿の意味を捉えた結果や、キットパスを使ってみたくなる物や場所の探索を通して、表現の可能性を秘めた園環境の問い直しに至ったこと、消える特徴がやり直しや挑戦できる安心感に結び付くこと、消すことも表現になる事例、そして、保育者が楽しみながら施した、画材と表現の出会いとなる保育環境の創出事例について報告した。こうした事例報告やワークショップの内容³⁾は、メーカーにとってユーザーや研究者を交えた貴重な情報共有の場になったといえる。

本レポートは2021年度フォーラム以降、継続的にキットパスの活用を続けている、岡山県にある認定こども園、中国学園大学・中国短期大学附属たねのくにこども園(以下、たねのくにこども園)で展開された、メーカーが知らなかった画材と環境の面白さを産学連携レポートとして執筆するものである。

なお、この内容はキットパス事業部の西田氏と佐藤氏が実際にたねのくにこども園を訪問した時の内容と、2022年11月7日に両氏と開発部の方を交えてZoomで共有した内容に基づいている。

2. キットパスを使うことで顕在化する環境と状況の作用

1) 開け閉めと重なりという窓ガラスや引き戸などの建具の特徴が創造を誘発する事例

フォーラムでは、たねのくにこども園の保育教諭が園の窓ガラスに、絵本『スイミー』(レオ=レオニ/作 谷川俊太郎/訳 好学社 1969年)の一場面を表現(写真2)し、参加者からそのアイデアを

賞賛するコメントがあった。

このアイデアは、窓の開閉とガラスが2重になるという建具の持つ特徴と、『スイミー』におけるクライマックス場面のイメージを結び付けて表現している。窓を閉じた状態でも絵として見ることができ、ガラスが重なることでストーリーが進む面白さのある作品となった。

上記は絵本のストーリー展開を窓ガラスの特徴に結び付けた事例であるが、2022年5月には、園のランチルームのガラスの引き戸に、5歳児達がキットパスを使って、「新幹線で行くことができるサファリパーク」を描き出した(写真3)。

写真3の右上に描かれている横長の細い形が「新幹線」である。滑らかに水平移動するガラスの引き戸の動きが、高速で移動する新幹線のイメージと重なっているのである。⁴⁾

これらは、その環境が持つ仕組みや動きが、自分の記憶にある知識や経験と結びついて、表現したいことを生み出すきっかけとして作用した事例といえる。一人で活動している時にそれが起きる場合もあるが、このような結びつきが起きる時には往々にして、他者による共感や賞賛が、その発想を表現として具現化する際の強力な後押しになることも見逃せない事実である。



【写真3】5歳児がランチルームに描いた新幹線で行けるサファリパーク



【写真2】窓ガラスに表現された『スイミー』の世界

2) 他者とイメージの交流が起きやすい環境・状況と自分の作品に集中しやすい環境・状況

次に紹介するのは、筆者が中心となって企画したワークショップで顕在化した、他者とイメージの交流が起きやすい環境や状況と、自分の作品に集中しやすい環境や状況の事例である。

筆者は同じ学科の教員2名とともに、2022年7月23日にたねのくにこども園において5歳児の親子を対象にしたキットパスらくがき体験ワークショップを企画・実施した(写真4・5・6)。会場にした多目的室と子育てカフェスペースには、その境に設置されているブラインドが内蔵されたガラスの仕切り壁以外は、子どもの手の届く場所に広いガラス面がない。筆者らはなるべく大きな窓ガラスなどの平らな面にのびのびと描く体験を楽しんでもらおうと考えていたが、十分なスペースがなかった。そこで、壁や物入れの木製扉に大きなビニール袋を貼り、そこにも描けるように準備した。

5組の親子の他に、中国学園大学の教員2名が飛び入り参加し、キットパスが水で溶けて消えるこ

とや紙以外にもガラスに描ける特徴を面白がり、いろいろな素材や窓などに描画して楽しんだ。

<他者とイメージの交流が起きやすい環境・状況>

写真4は、多目的室の運動場側にある出入り口のガラスの引き戸に描いている親子の様子である。母親が部屋の外に出て波を描き始めると、室内にいる子どもがタコなどを描いた。興味深いのは、外にいる人が波という海の外側(表面)の様子を描き、室内にいる人が内側からその中にいる生き物を描いていることである。この親子は時折お互いに視線を合わせながら、描くことを楽しんでいた。

この引き戸のように部屋の出入り口に設置されている透明な基底材の内と外の両側から同時に描く状況においては、描く人のいる位置によって、それぞれの人に内側と外側のイメージが働き、「海」という1つの世界を創出した事例といえる。

写真5は、多目的室と子育てカフェスペースの境にあるブラインドが内蔵されたガラスの仕切り壁での様子である。ワークショップに飛び入り参加した大学教員2名がガラス越しに1人がポーズをとり、もう1人がそれに合わせてらくがきを楽しんでいる。その様子をそばにいる親子が手を止めて楽しそうに眺めている。

ガラスのある環境の内外に人がいる状況は写真4と同じであるが、写真5では片側にいる人だけが描いている。この状況は鏡に映った自分の姿を見ながら描く状況と似ている。描き手の方はガラスの向こう側にいる人の姿やポーズに触発されて、その人を「お姫様」に変身させようと描いていた。

ガラスのある空間でキットパスを使うと、ガラスを挟まずに片側だけに人がいる状況の場合は、ガラスの向こう側に見えるものを一緒に見て、視線を共有している感覚になる。また、ガラスや鏡などは透過したり映り込んだりしているため、そこには必ず自分が描いたもの以外の視覚情報がある。ガラスを介して両側に人がいる状況の場合、お互いの顔や描いたものなどを見ながら描くことになるため、言葉を交わすほかに、見ることによってイメージの交流が起きやすく、コミュニケーションやお互いの



【写真4】外から波を内から海の生き物を描く親子



【写真5】ガラス越しに相手を見ながら描く

発想を楽しみながら活動できる環境といえる。また、引き戸のように人の出入りがある環境では、物理的に人の移動が起きるため、交流が起きやすい場といえる。

<自分の作品に集中しやすい環境・状況>

他者との交流が起きてアイデアが創出される環境や状況がある一方で、他者と交流することなく、自分達の体験に集中した親子がいた。その親子はワークショップの開催時間を間違え、終了10分前に入



【写真6】周囲が片づける中で活動に集中する親子

室した。ほかの親子が片づけをしている中、それを気にする風もなく、描くことに集中していた。活動時間がわずかしかないという状況のほかに、親子が活動した場所にも、親子が集中して活動した要因があったのではないかと考察した内容を紹介する。

遅れてきた親子は、物入れの木製扉の前にしゃがみ込み、そこに貼った透明なビニール袋にキットパスで描いた。描いている周囲を他の親子が行き交って片づけを進めていた。しかし、親子の視線の先にあるものは、ビニール袋から透けて見える扉の素材である木の板と、ビニール袋に描いた自分たちの絵だけであった。写真6を見るとわかるように、親子は扉に正対しており、そこはガラスのように周囲のものが映り込むことがなく、人の出入りも目に入らない場所である。つまり、視界に余計な視覚情報が入らない環境に身を置いたことにより、この親子は自分達の活動に集中する状況になったのではないかと考える。このことは、情報を入れないような環境を設定することにより、目の前のことに集中したり、自分の世界に入り込んだりできることを意味している。

3. 保育現場で見つけたキットパスの意外な活用方法

1) キットパスでデカルコマニー

写真1は、たねのくにこども園の5歳児クラスの保育室に2022年6月に施された壁面装飾である。

左右対称のカラフルな傘の模様は、キットパスを使いデカルコマニーで表現している。これはこれまでの子ども達のデカルコマニーの経験と、キットパスが水に溶ける性質を生かして、5歳児の担任が教材研究を行って実践したものである。2つ折りした紙の片側にキットパスで描いておき、そこに霧吹きで水分を与えて素早く紙を折って、開く。傘の形に切った紙に行く前に、子ども達は四角い色画用紙で何度も試している。担任によると、描くのは半分だけでもいいことを理解し、左右で一對の模様になることを



【写真7】霧吹きで水分を加えて画用紙を閉じる



【写真8】写っているか、静かに開く



【写真9】出来上がりの見通しを持ち半分だけ描く

生かしたデザインにするなど、「もう、自分でできる」や「こんな模様になりたい」などとそれぞれに見通しを持ち、傘の模様づくりを楽しんだそうである。

通常、デカルコマニーは絵具で行う技法であり、乾燥するまでに時間がかかる。しかし、キットパスを使うと絵具の準備をする必要がないうえ、加える水分が少量のため、すぐに乾燥する。5歳児の担任はこのことをメリットとして高く評価していた。

技法の面白さという点において、キットパスで行くと、形がほぼそのまま片側に転写されるため、形が正確に写ることへの興味を掻き立てる面白さがある。またその風合いはリトグラフに近いものがある。

2021年6月24日にキットパス事業部の西田氏と佐藤氏がたねのくにこども園を訪問した。実際にこの壁面装飾を見た時、「キットパスでこんなことができるなんて知りませんでした。」と感想を述べられた。

2) キットパスの「描かない」使い方

次に、同園の子ども達が楽しんでいる、キットパスの「描かない」使い方について紹介する。

<キットパスで色水づくり>

色水づくりは絵具で行う場合や、水性マーカーを使う場合、植物をすりつぶして行う場合と、子ども達はいろいろな素材や方法を経験する。これはそれをキットパスでやってみた事例である。

5歳児の担任が色水遊びを提案し、何を使って行うか子ども達に投げかけたところ、「それ、キットパスでできるんじゃない?」と答えたため、さっそく実行してみたそうである(写真10)。

子どもたちのお気に入りの作り方は、キットパスでビニール袋に描いたり塗ったりし、その面を内側



【写真10】キットパスで色水づくりを楽しむ5歳児

にして袋に水を入れ、袋の口をぎゅっと手で握ったまま、思い切り袋を振って色水にするというやり方である。写真ではできた色水が透明に見える(写真10)が、実際にやってみると、白が混ざった感じのやや不透明な色水になる。また、ペットボトルではなく、ビニール袋を使う方が作りやすいことが分かった。水が漏れないようにビニール袋の口を縛ってから手で擦り合わせるように袋をもみ込むと、驚くほど簡単にキットパスが溶けて色水になる。こちらの



【写真 11】綿をキットパスで着色して綿あめの「味付け」をする5歳児

方が筆者には面白く感じられたが、子ども達はシェイクすることを嬉々として楽しむのである。

<キットパスで綿あめの「味付け」>

2022年7月には同園で夏祭りを行った。5歳児クラスでは、綿あめ、焼きそば、アクセサリー、クレープのお店をすることになった。綿あめづくりをする



【写真 12】どのパス類でも綿に着色できる

にあたり、綿あめに「味を付ける」にはどうすればよいかと子ども達は考え、キットパスを手にとった。

子どもたちはキットパスを粘土板に塗りとくり、それを綿でこすり取ることで綿に色が付くことを発見し、綿あめに「味をつけた」のである。何度も作るうちに、虹色の綿あめをつくる「綿あめ職人」も生まれた。綿あめ屋さんは小さい組の子ども達に大人気で、作ったものは「完売」したそうである。

このことを受けて筆者もやってみたが、どのパス類でも同じように綿を着色することができた。5歳児は園内の様々な平滑面にキットパスで描いては拭き取り消すことを繰り返していたため、同じように綿で拭き取ることによって綿に着色できると予想することに繋がったのではないかと考える。

いずれも「それ、キットパスでできるんじゃない？」という発想で挑戦した内容であり、キットパス事業部の方が初めて知った活用の仕方であった。

註

- 1) 2011年第8回エコプロダクツ大賞で奨励賞受賞(主催:エコプロダクツ大賞推進協議会、後援:財務省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省)
- 2) キットパス開発コンセプトについては、以下を参照のこと。 <https://www.buntobi.com/articles/entry/series/007063/>

3) 大成哲雄・佐藤牧子・鳥越亜矢(印刷中)「2021年度 全美協造形教育フォーラム 報告」、『大学造形美術教育研究』(第21号)

4) 新幹線で行けるサファリパークについては2022年8月18日19日に開催された第71回日本美術教育学会学術研究大会瀬戸内大会において、筆者が行った基調提案で取り上げている。

全国大学造形美術教育教員養成協議会規約

本協議会は、全国大学造形美術教育教員養成協議会と称する。

本協議会は、全国の大学及び短期大学における造形美術教育に関わる保育士及び教員養成の充実をはかり、造形教育の振興に寄与する。

本協議会は、前条の目的を達するために次の事業を行う。

1. 保育所、幼稚園、こども園から高等学校までの造形美術教育の、教員、保育士養成に関する連絡、協議、研究の交流。
2. その他、協議会の目的達成に必要な事業。

本協議会は、造形美術教育に関わる、教員、保育士養成課程の認定を受けている大学、短期大学の教員を以って組織する。

本協議会に下記の役員を置く。

1. 会長 1 名、副会長 2 名、委員若干名、常任委員若干名、監事 2 名。
2. 役員は次の任務を分掌する。
 - (1) 会長は本協議会を代表し会務を総理する。また会議を招集する。
 - (2) 副会長は会長に事故がある場合にその職務を代行する。
 - (3) 委員は役員会において本協議会の運営及び事業の起案について協議し執行することができる。
 - (4) 常任委員は本協議会の運営及び事業について起案することができる。
 - (5) 監事は本協議会の会計を監査する。

役員は総会において選出され、任期は 2 年間とする。但し、再任は妨げない。

1. 会長及び副会長は役員会で委員の中から選出される。
2. 常任委員は会長が任命し、役員会で承認される。

役員員の任命および解任は総会の出席者の過半数をもって決議される。

総会は、本協議会委員の選出、運営及び事業の承認をし、また、本協議会に関わる事案の協議を行う。

本協議会に関わる案件については総会で決議する。

総会は研究協議会とともに年 1 回開催し、会長がこれを召集する。

会長の下に事務局を置く。

本協議会の会費は、会費及び寄付金による。会費は年額 4000 円とする。

1. 教員の所属する大学、短期大学は専任、非常勤にかかわらず、会費を納入しなければならない。
2. 会費は教員の所属する大学、及び短期大学 1 校で一口とし、複数の教員が所属する場合も同様とする。(機関加盟) 但し、複数の学部それぞれ専任が配置され異なる免許を出す場合はこの限りでは無い。

本協議会は運営の為、別に細則を定める。

本協議会の事業年度は当該年度の 4 月 1 日から 3 月 31 日迄とする。

この規約は、平成 26 年 4 月 1 日から発効する。

全国大学造形美術教育行員養成協議会賛助会員 内規

(目的)

第1条 この規約は、本協議会規約第4条により設置する賛助会員制度の運営等について必要な事項を定め、これをもって外部関係者の本協議会に対する協力と理解を高めることにより、本協議会と協働して美術教育の振興を進めていくことを目的とする。

(加盟資格)

第2条 賛助会員の資格を有するのは、本協議会の目的と事業内容に関心を持ち賛同するとともに、本協議会の事業の円滑な実施に協力しようとする団体及び企業とする。

(賛助会員に対する事業)

第3条 本協議会は、第1条の目的を達成するため、賛助会員に対し、次の事業を行う。

- (1) 本協議会が作成又は発行する会員名簿を含む資料の提供
- (2) 本協議会又は会員との協働による美術教育の振興を進める活動
- (3) その他、第1条の目的を達成するために必要な事業

(賛助会員が実行可能な事業)

第4条 賛助会員は第1条の目的を達成するため、以下のことを行うことができる。

- (1) 本協議会又は会員と協働して美術教育の振興を進める活動。
- (2) 本協議会又は会員に対し、教材や製品などの紹介を行うことができる。
 - ① 年数回発行される会報発送時に A4 用紙 1 枚程度にまとめた情報を会員に送ることができる。
 - ② 年 1 回発行の研究誌に通常の 5 割の費用で 1 頁分の広告掲載ができる。
 - ③ メーリングリスト担当者と連携を取りながら、毎月発行するメールマガジンに広告掲載やリンクを張ることができる。
 - ④ 企画者と協議のうえ、造形教育フォーラム等の全美協が主宰するイベントに参加できる。
- (3) その他、第1条の目的を達成するために必要な事業

(加盟)

第5条 賛助会員たる資格を有する団体及び企業は、あらかじめ加盟申込書を会長に提出した後、本協議会の承諾を得るものとする。

2. 前項の諾否は、役員会において決する。

(会費)

第6条 賛助会員は、年会費を納入するものとする。

2. 年会費は 30,000 円とする。

(脱退)

第7条 賛助会員が脱退しようとするときは、あらかじめ本協議会に届け出て脱退するものとする。

(除名)

第8条 本協議会は、次の各号のいずれかに該当する賛助会員を除名することができる。

- (1) 本協議会の事業を妨げ又は妨げようとした賛助会員
- (2) 会費の納入を怠った賛助会員
- (3) 故意又は重大な過失により、本協議会の信用を失わせるような行為をした賛助会員
- (4) 犯罪その他の信用を失う行為をした賛助会員

(その他)

第9条 賛助会員について本規約に定めのない事項であって必要な事項は、役員会で決定する。

付則 この規約は、令和2年4月1日から施行する。

■ 研究誌『大学造形美術教育研究』投稿規定

1. 投稿資格

全国大学造形美術教育教員養成協議会加盟校に所属し、年会費が納入済みであること。

2. 投稿内容（分類）

指名論文（造形教育フォーラム報告）と投稿レポートによって構成され、大学における造形美術教育に関わる内容であり、研究ノートと実践報告、エッセーに分ける。

- A. 研究ノート：教育研究に関する内容で4頁にまとめること。
- B. 実践報告：教育実践の内容で2頁または4頁にまとめること。
- C. エッセー：造形美術教育に関わる内容で2頁または4頁にまとめること。

3. 投稿条件（件数）

会員の同一号に関する投稿件数は、単著・共著、またA・B・Cを問わず一人2本までとする。

※ 詳しくは、ホームページをご参照ください。<https://www.zenbikyo.com>

発行部数は各大学に1部、投稿者1部、他希望者を含め500部（2021年度）
複数冊希望する場合はレターパック370に送り先を記入し、下記まで送って下さい。
なお、レターパックは3cmまでなのでその範囲で送ります。残部がなくなり次第終了します。

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武待 48
桜花学園大学 保育学部保育学科 浅野 卓司

「大学造形美術教育研究 第21号」（2022年度）

発行日 2023年3月15日

発行者 全国大学造形美術教育教員養成協議会会長
浅野卓司（桜花学園大学）

編集 三澤一実（武蔵野美術大学）

事務局 高田吉朗（名古屋短期大学）

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武待 48

TEL：0562-97-1306（代表）

e-mail: zenbiooffice@googlegroups.com

The 2022
Journal
of ART
/ DESIGN
for
Higher Education

Greeting
from
President
practice
event

Journal
report

vol. 21